

DATE · A · LIVE The Snatch Steal

墮天使ニワトラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——彼は目覚めたら見慣れない世界にいた。

そこで金色の『何か』に様々な世界へと送られる。

20番目に送られた世界は、精霊と呼ばれる存在がいる世界だった。

そこで彼はその世界の運命を変えるため、霊結晶が彼に与えた役目

——それは精霊から身も心もすべてを『奪い』——隷属させること……。

目次

プロローグ	1
与えられた霊結晶	3
創世重工	6
考えにくい偶然	10
〈プリンセス〉	14
序章が終わって	18
第2ラウンド	23
勝利のための下準備	26
〈ハーミット〉	30
雨が止んだ後……	36
負け戦と勝ち戦	42
束の間のシヨツピング	47
〈ラタトスク機関〉	51
動き出す『悪夢』	59
『時』と『炎』の対峙	68
〈ナイトメア〉	76
『新天地』へ	81
報復の序曲	86
異変	93
ペナルティ	99
【黙秘強使】	104
蝕む毒と溜まる鬱憤	108
タイミング	112
『紅』と『白』に迫るもの	118

へイフリート

運命の行方

苦悩と出逢いの運命



151 143 128

プロローグ

——白、白、白。そこは辺り一面何もない真っ白な空間。

音も光もなく、完全な『無』を体現しているかのような世界が広がっていた。

無の静寂が漂う中、そこに何の前触れもなく、天から一筋の光が照らされる。

スポットライトのように照らされた箇所には金色の輝きを放つ粒子が集まり、それは人間のシルエットを思わせる姿を象った。

——目覚めよ。

人の形をした『それ』が発した言葉は、空間全体に行き渡るように響く。

するとその目の前に金色、銀色、青銅色、灰色の様々な色の粒子のような光が灯った。

しばらく空中を漂うと、それが1ヶ所に集まって人のシルエットを形取る。

そこへ上空から黒い宝石のような球体が飛来し、その中心へと入り込んでいく。

すると粒子の集合体が霧散し、中から銀色の髪を長く伸ばした青年が出現した。

「ん……」

それからすぐに青年は目を開き、その白一色しかない世界を見た。

「……!?……な、なんだここは……!?」

見慣れぬ光景に青年は困惑し、慌てて周囲を見回す。

——旅立ちの時だ。零。

「え……?」

突如として聞こえてきた声に反応し、青年はそちらを見る。

そこには金色の輝きを放つ粒子で構成された、人のシルエットのような何かがあった。

「……だ、誰だあんたは……!?」

目の前の謎の存在を前に、青年は後退りながら身構える。

ここはいつたいどこなのか。なぜこんな場所にいるのか。

そんなことを考えていると、そこで青年は自分の身に起こっている異常に気付いた。

世創零よつくり。それが自分の名前であることは理解できる。

……だが、それ以外のすべてが記憶になかった。

自分が何者で、何故こんな場所にいるのか。そしてここに来る前に何をしていたのかを。

——零。

金色の何かは、手に持っていたものを零に差し出す。

「……うっ……何だよ？」

零は恐る恐るそれを受け取り、それがごく普通のサバイバルナイフであることがわかった。

——これから1年間、ただ生き残ることだけを考えろ。これ乗り越えれば、どんな困難にも立ち向かって行けるだけの強さが身に付くはずだ。

「はっ…なにを言ってる——」

零がその言葉の意味を問いただそうとした瞬間、金色の『何か』の光がより強くなる。

「うおっ……!?!」

零は咄嗟に腕で防ぎ、何が起るのかわからない状況に備えた。

——数秒後に光が止み、零は恐る恐る腕を下ろす。

「……………はっ？」

目の前に広がっていたのは、ジャングルを思わせる密林地帯だった。

与えられた霊結晶

いきなり密林地帯に送られた零は、それから死にももの狂いで命を繋ぎ止めた。

なんとか生き延びてちょうど1年目に、零はまたあの真っ白な空間に連れてこられる。

これで終わりかと安堵した矢先、金色の『何か』は、また零を別の世界へと零を送った。

銀河を二分する規模の戦争が巻き起こっている世界。

他に類を見ないほど『食』が進化した世界。

多次元に侵食する植物の脅威が迫る世界など、20を超える世界を転々とさせられたのだった。

これで何回目かの役目を果たした零は、また真っ白な空間に呼び出されていた。

「……今度はどんな世界に連れて行く気だ？」

不機嫌そうに零が用件を聞く。

こんなことが続いて20回目。もう零には文句を言う気力すら起きなかった。

——この^{セフィラ}霊結晶の導きに従え。やるべきことはすべて、これが教えてくれる。

そう言つて差し出したのは、漆黒の輝きを放つ、宝石のような球体。「……う……何だよそれ……？」

見慣れない物体に警戒しながら、零はゆつくりと球体に手を伸ばす。

そして零の指がそれに触れた瞬間、球体は一瞬で粒子となり、零の手に吸収された。

「……!?……おいつー！これって一体……!?」

零が問いたただそうとした瞬間、身体の芯が急に熱くなるような感覚を覚える。

「……つぐー……ああつ……！……な、何しやがった……!？」

あまりの苦痛に胸を押さえて蹲うずくまりながら、零は金色の『何か』を睨み付ける。

すると零が着ていた衣装が粒子状になり、別な形へと変化させていく。

「こ、これは……」

完全に別な形状へと変化した衣装を見て、零は思わず呆然としてしまう。

それはタキシードのような高貴さとヴァンパイアのような邪悪さを併せ持ったような形状をしており、常にあの球体のような光を放っている。

しかも先ほどまでの苦痛から一転し、身体の奥から今までにない力が溢れ出てくるような感覚を覚えた。

——セフィラ霊結晶をその身に宿し、霊装を身に纏い、天使を行使する存在——『精霊』。さあ、旅立ちの時だ。

「……！……おいつ！俺に一体なにを……!？」

飛びかかろうと立ち上がった瞬間、金色の『何か』は光を放ち、零は咄嗟に腕で顔を覆う。

「せめて何がどうなってるのか説明くらいしろよ！いつつもいつつも言いたいことだけ言いやがって——」

そんな零の叫びは光の中に消え、零の新たな旅が始まるのだった。

——それから時は経ち、日本の天宮市と呼ばれる市、その一角にある工業地帯。

「……もうすぐ30年か。ずいぶんと経ったな……」

装甲車のようなトラックの助手席で、黄昏れるように零が呟く。

「そうね。……けど有意義な時間だったと思うわよ？リアライザ顕現装置なんて発明、すごく研究のし甲斐があったじゃない」

零の隣でトラックを運転している白衣の女性が、どこか楽しそうに

語りかける。

「まあその辺は否定しないけどな。……おつ、見えてきた」

目的地である建物が見えてくると、零が窓から乗り出す。

そこは少し前に小さな製造業が倒産し、空き家になった小さな社屋だった。

「あれが新しい活動拠点ね。……前みたいなことにならないといいけど……」

建物の前で車を止め、白衣の女性がげんなりしたように重たいため息を吐く。

「それを考慮したからこんな町外れの寂れた工業団地に拠点を作ったんだ。『アレ』が完成するまで見つからなければ上等だって」

トラックから降りた零は、見上げるようにその建物を眺める。

「……ここが俺たちの新しい城——『創世重工』のリニューアルオープンだ」

そう誇らしげに宣言した零の表情は、どこかわんぱく小僧のように感じられた。

——精霊。隣界に存在する特殊災害指定生命体。発生原因、存在理由ともに不明。

こちらの世界に現れる際、空間震を発生させ、周囲に甚大な被害を及ぼす。

また、その戦闘能力は強大。

対処法1、武力を以てこれを殲滅する。ただし前述の通り、非常に高い戦闘能力を持つため、達成は困難。

対処法2、デートして、デレさせる。

——そして対処法3、契約して、隷属させる。

創世重工

——創世重工。

この世界で零が活動するため、零と協力者である海原志保の二人で設立した企業である。

『新天地』と呼ばれる別世界に拠点を構え、『超小型ナノマシンから超大型空中艦まで、需要のあるものはなんでも造る』を謳い文句に、あらゆる機械の製造・販売を携わっていた。

だが精霊である零には敵が多いため、公おやかの場に出ることができない。

そのため架空の企業名を名乗って活動していたのもあって、世間にその存在を知るものがあまりにも少なかった。

「——ま、こんなもんだな」

「ええ。なかなかからしくなってきたじゃない」

荷物整理の終わったオフィスを眺めながら、零と白衣の女性、海原志保が満足そうに頷く。

「そういうええ何か足りないな。……あ」

思い出したように零が段ボール箱を漁り、中から筒状に丸められた紙を取り出す。

同時に近くのデスクに置かれていた画鋏を使って、広げられたカレンダーを壁に固定した。

「これでよし、と。……今日は4月10日だったな」

「世間は新学期や就職で大賑わいでしょうね。おめでたい話だわ……」

桜の花びらが舞い散る窓の外を眺めながら、志保が愚痴るように呟く。

「そうだな。……今度パーツと花見でもするか？」

「……そうね。たまにはのんびりと——」

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

志保の返事を遮るように、外からサイレンの音が大音量で聞こえてくる。

「……どうやらそういうわけにはいかないみたいだ」

「そうね。空間震警報が鳴ったつてことは……」

空間震警報。文字通りそれは空間震と呼ばれる現象を報せるための警報。

発生すると規模は様々だが、範囲内のすべてがごっそりと削り取られたように消失してしまう突発性広域災害である。

「よし、待ちに待った本職だ。気合い入れていこう」

「ええ。そのために今日まで準備してきたんだから」

二人は領き合いながらオフィスを飛び出し、颯爽とトラックに乗り込んだ。

そしてトラックを走らせること数十分。空間震が発生した地点のすぐ近くに停車した。

「あらら……ずいぶんと派手にドンパチやってるわね……」

そこから見える光景に、志保は感心するような声を漏らす。

町中にはスプーンで削り取られたような巨大な穴が開いており、その上空には様々な武装を手にして奇妙なスーツに身を包んだ少女の集団が、ひとりのドレスのような衣装を身に纏った少女を攻撃している。

端から見ている志保たちは、まるでSF映画でも見ているような気分になった。

「……あれが俺以外の精霊。あの格好はたぶん〈プリンセス〉だな」

「相手をしているのは陸自の対精霊部隊ね。確かA^{アンチ・スピリット} S^{チーム} Tだったかしらっ。」

まるで他人事^{ひとごと}のように高みの見物を決め込む二人。

精霊の存在は国ぐるみで隠蔽されているため、一般には知られていない。

だからといって空間震の元凶を野放しにする訳にはいかないのが現実である。

人類が30年前に手にし、科学の力で『魔法』を再現する装置。それが顕現装置^{リアライザ}。

それを用いて戦闘用に開発されたのが『戦術顕現装置搭載ユニット』、通称CRR—ユニット。

装備することができるのは、頭部に脳波を増幅させるための機械を埋め込んだ人間。通称魔術師^{ウィザード}。

その魔術師たちによって組織され、人知れず精霊を討伐するために戦う特殊部隊。それがASTだった。

「使ってる装備が弱々しいな。ドコ製だ？」

「あの見た目だと、D E Mインダストリーじゃなさそうね。他企業の委託品かしら？」^{デウス・エクス・マキナ}

査定でもしているかのように、彼女たちの装備を評価する。

無理もない。彼女たちが装備しているマシンガンやミサイルをどれだけ撃ち込もうとも、精霊の持つ絶対の盾、霊装に傷ひとつつけることすらできていなかったのだから。

しばらく戦闘が続くと、精霊がその場から消えたようにいなくなってしまう。

精霊はいつまでもこちらの世界に居続ける訳ではない。

タイミングは不明だが、その時が来ると、引き寄せられるように精霊は隣界へと帰って行く。これを消失^{ロスト}と精霊を知る者は呼んでいる。

零も一時期は消失^{ロスト}と現界に悩まされていたが、霊力をコントロールする制御装置を完成させて問題を克服した。

「消失^{ロスト}したわね。今日はこれでお開きかしら」
「そりやそうだろうな。対象の精霊がいなくなったら帰るしかないだろ。……んっ。」

興味がなくなつたように引き上げようとした矢先、零は奇妙なものを目にする。

空間震で削り取られた地面の中心近くに、ひとりの少年が倒れ伏していた。

それを見つけて数秒後、少年は空へ引っ張られるように浮かび上がり、そのまま消えてしまった。

「……今のは……」

「……う……どうかしたの？」

その光景を見ていなかった志保が、首を傾げながら尋ねる。

「……ああ、ちよつと珍しいものを見つけた。帰ってから話す」

それを聞いた志保は「そう……」と短く返し、拠点に向かってトラックを走らせた。

考えにくい偶然

〈プリンセス〉の出現から1週間後。特に目立った精霊の出現報告はなく、天宮市に嵐の前の静けさのような平和が続いていた。

「……よし、このペースならあと数日で完成だな」

パソコンの前で黙々と集中していた零が、一息つきながらゴキゴキと背中を鳴らす。

「せめて次の〈プリンセス〉ちゃんの現界までには間に合わせたいわね」

カップのコーヒーに口をつけながら、志保が落ち着いた吐息を洩らす。

「こいつさえ完成すれば、精霊の捕獲が一気に楽になる」

「ええ。——精霊捕獲用機動兵器〈メタルビースト〉。その第1号機〈オルトロス〉。社長の本職には欠かせない存在ね」

志保はパソコンのモニターに表示されている『ソレ』を誇らしげに見つめる。

「……さてと、もうひと踏ん張りやるか——」

二人の集中の糸を切るように、外から空間震警報が聞こえてきた。

「おいおい。まだ〈オルトロス〉は完成してないってのに……!」

「他の精霊ちゃんはこっちの都合なんて考えてくれないってことね……」

仕方なく作業をいったん止め、二人はトラックへと飛び乗った。

それから反応を探してたどり着いたのは、市内でも数えるほどしかない高校のひとつ、都立来禅高校。

その近くの町中にトラックを止め、その様子を伺った。

見ると校舎の半分が巨大なスプーンでくりぬかれたように消失しており、その内部の教室などの部屋が完全に丸見えになっていた。

「あらら。これまた珍しい光景ね……」

「へプリンセスは……反応は校舎の中からだな。だからまだドンパチしないのか……」

芸術品の観賞でもしているような志保の隣で、零が校舎の近くで待機しているASTの一個小隊を見ながら納得する。

ASTの装備は屋内戦には向いておらず、無理に戦闘を行って被害を増やすのも問題でしかなかった。

顕現装置の恩恵で建物などの修復は早く済むが、労が全くないわけではない。

町を守るために戦っているASTが、逆に建物を破壊するのでは本末転倒になってしまう。渋るのも無理のない話だった。

「それならこっちも少し様子を見ましようか」

そう言うと志保は手元の端末を操作し、トラックに積んでいた観測機を起動させる。

直径十センチにも満たない球状の観測機は宙に浮かび上がり、削り取られた巨大な穴から校舎内へと侵入していった。

「うくん……そんなに動いてないと思うけど。……あ！」

端末に表示されている小型のモニターでへプリンセスを探し、とある教室のひとつで佇んでいるのを見つけた。

「……………何やってるんだ？」

「机が気になるのかしら？もしかしたら学校に興味があるのかもしれないわね。……あら？」

二人が観察するようにモニターを見てみると、そこにひとりの乱入者の姿があった。

「……………あの服装はこの高校の制服ね。避難し損ねたのかしら？……つて、社長？」

志保が零の方を見ると、何か思い当たり節があるような表情で乱入者を睨み付けていた。

「あの髪の色……まさかあの時の……」

「あの時って、1週間前にへプリンセスちゃんの近くにいた一般人？偶然……とは言い難いわね。……まさか」

意図的にへプリンセスへに会いに来たのでは。そんな可能性が二人の脳裏を過ぎる。

「けど何のために？まさかナンパなんてことは……」

「目的はわからない。……けど、避難警報が鳴っている最中に、しかも一般人には情報が伏せられてる精霊の前に2度も現れるなんて、偶然と言い張るには無理があるだろ。……とりあえず様子を見てみよう。それで何かわかるはずだ」

様子見を決め込むことにした二人は当初の目的を忘れ、へプリンセスよりも少年の方にはばかり注意が行ってしまった。

だが何らかの目的があつて精霊に近づいているのは間違いない。二人の直感がそう叫んでいた。

「……あ、何かへプリンセスちゃんと話をしてるみたい」

「音声も拾えるようにしておけば良かったな……」

などと話している間に、へプリンセスは少年に掴みかかる。

だが少年は抵抗する素振りを一切見せることなく、必死に何かを叫び続ける。

するとへプリンセスは警戒心を緩めたように、少年の言葉に耳を傾けるようになった。

「あらら。本当にナンパだったみたい。近頃の高校生はずいぶん大胆ね……」

「けどこのまま仲良くなるだけで終わるなんてことはないはずだ。……まさか暗殺目的？となるとどこかの組織からのヒットマンか……？」

あらゆる可能性に視野を向けている間に、へプリンセスと少年は教室の黒板の前で何かを書いていた。

「……『十香』、って読めるわね。ひよつとしてあれがへプリンセスちゃんの名前かしら……？」

「こいつは思わぬ収穫だな。このままあの一般人が情報を引き出してくれれば……」

もう少し観察を続けようと考えた矢先、へプリンセスを襲撃するように、上空から銃弾の雨が降り注いだ。

「……ASTが攻撃を開始したか……！」

「挑発して外に引きずり出そうって作戦ね。……けど〈プリンセス〉……十香ちゃんには気にしてないみたい」

迎撃するどころか霊装の防御に任せ、〈プリンセス〉は少年との話に夢中になっているようだ。

しばらくその状態が続いていると、ASTの隊員のひとりが一気に距離を詰め、〈プリンセス〉に近接攻撃を仕掛けた。

「お、陸自にはずいぶんと血気盛んな魔術師ウイザードがいるんだな」

「もしかしてあの少年を助けようか？……ってことは知り合いかしら？」

ふたりが思案に暮れていると、〈プリンセス〉は自身の天使である玉座を顕現し、そこに備えられていた大剣を引き抜く。

そして向かってきたAST隊員に向かって斬撃を放った。

「勝負は目に見えてるわね……」

「ああ。そんじよそこらの魔術師ウイザードじゃな……」

出来レースを見守るような心境で、二人は魔術師ウイザードの冥福を祈る。

二人の剣がぶつかり合った衝撃で校舎は崩壊し、少年は下の階へと落下。

その後すぐに〈プリンセス〉は消失ロストしてしまい、戦闘はそこでお開きとなった。

「今日はここまでみたいね。……けど、それなりに収穫はあったわね」
「そうだな。〈プリンセス〉の名前に、精霊に近づく高校生。いろいろと調べる必要があるそうだ」

精霊がない以上、もうここに用はない。

観測機を回収し、トラックは拠点である社屋へと帰っていった。

〈プリンセス〉

〈プリンセス〉の二度目の現界の次の日、零と志保は〈プリンセス〉に接近していた少年について、丸一日かけて調べていた。

志保が学校のシステムにハッキングし、二人で表示された情報に片っ端から目を通していく。

「……名前は五河土道^{いつかしどう}。来禅高校2年4組。家族構成はエンジニア系の仕事で海外にいる両親と妹の四人。……か」

「思ってた以上に普通の情報しか無いわね。……明らかに臭うわ」

夕焼けで赤く染まった部屋で、零と志保は真剣な面持ちで見合う。

「普通すぎて俺の勘が逆に怪しいって言ってるな。誰かが何か隠してるのか?」

「となると誰が? って話になるわね。ここままでして隠すとなると、向こうは結構大きな組織って可能性があるわね。しかも精霊のことを知ってるとなると……」

二人はこんなことを企む組織の候補を挙げる。

少なくともASTと協力している様子がないことから、陸自という線は消える。

「DEMはちよーつと考えにくいな。あそこはやるとしたら、武力にものを言わせて強引にやるだろうし……」

「……となると、これだけの力があって、精霊相手に武力なしで近づこうなんて考える組織……」

考えれば考えるほど、その目的が見えなくなってしまう。

精霊とあの少年が仲良くなり、親密な関係にするのが目的なのはわかかった。

だがその後はどうするのか。放っておけば自然と消失し、また空間震を起こして現界する。そんな存在を懐柔して戦力にでもするのだろうか。

「……わからん」

「そうね……」

完全に途方に暮れる二人。いつそのことあの少年の後をつけてみるか。——そう考えた瞬間……、

空間震警報が鳴り響き、二人の意識は思案の海から現実に戻された。

「……………さっそくお出ましか!」

「となるとチャンスね。こうなったらお手並み拝見させてもらおうじゃない」

もしかしたら今回の接触で、あの少年の本格的な目的が見えるかもしれない。

少なくともすぐにどうこうする様子がない以上、ヘプリンセスの命を狙っている可能性は非常に低い。

そう考えながら二人はトラックに乗り込み、精霊の反応がある地点に急行した。

そしてトラックを止めたのは、天宮市が幅広く見渡せる高台公園のふもと近く。

「おいおい、何があつたんだ……………」

「これまた派手にやってるわね……………」

現場に駆けつけた二人が見たものは、あまりにも衝撃的な光景だった。

木々が覆い茂る森林地帯には、まるで巨大な猛獣の爪痕のような斬撃痕が刻まれている。

その近くの山に至っては、ナイフで半分にカットされたように、縦に真っ二つになっていた。

その上空を見ると、目視でもわかるほど霊力を解放しているヘプリンセスの姿がある。

しかもその手には昨日の戦闘で見たものとは比べ物にならないほど巨大な大剣が握られており、この惨状はその剣によるものだと推測するのは容易だった。

「これはASTが気の毒になるわ。とは言っても助けに飛び込む気にもなれないわね……………」

「確かに……………まあASTには悪いけど、ここは全滅するまで——」

「————十とおお香ああ——ツ!!」

「……………!!?!」

突如として上空から聞こえてきた叫び声に、二人は揃ってそちらを見る。

すると何もなければずの空の高みから例の少年、五河士道が重力に従って落下してくるのが見えた。

「……………なんで空から……………!!?!」

「……………やっぱり何かいるのよ。彼を影から支援する、とても大きな力が……………」

二人が戦慄している間に、プリンセスが彼の元に飛来して受け止める。

そして二人で何かを話していると、零と志保は思いもよらぬ光景を目にした。

「なっ……………!!?!」

「ああああ……………」

《プリンセス》は思いきったように顔を寄せ、そのまま彼と唇を重ねた。

その直後、彼女が手にしていた大剣が崩壊し、霊力の粒子となって消失する。

「……………!!?!……………天使が……………!」

零が驚愕で呆然としていると、さらに驚くべき現象が起こる。

同時に霊装が徐々に粒子となり、二人の高度も地上に向かって少しずつ下がっていく。

そして地面に足がついた頃には、ドレスを思わせるプリンセスの霊装は完全になくなり、一糸纏わぬ姿を晒していた。

「……………どうなってるんだ? いったい……………」

「……………社長。これを見て」

零の隣で端末を操作していた志保が、霊力探知機のモニターを見せる。

そこには周辺に霊力反応がなく、近くに精霊がないという解析結果が表示されていた。

「……………これも全部あの高校生の仕業か。……………博士」

「はいはい♪」

零が一声かけると、志保は白衣のポケットから小さなケースを取り出す。

それを開けると、中には蚊のような小さな虫が入っていた。

それをそつと指でつまむと、そのまま目の前に向かって伸ばす。

すると志保の腕は途中で消えたように見えなくなる。

「ん〜と……………この辺かな……………?」

そして数秒ほど経つてから腕をゆっくり引き抜くと、腕は何事もなかったかのように元に戻った。

「これでバッチリよ。それじゃあ彼らがこれから何処に行くのか——」

追跡を開始しようとした瞬間、少年とヘプリンセスを包むように、天からスポットライトのような光が降り注ぐ。

そして二人はゆっくりと浮遊していき、すぐにその場から消えてしまった。

「……………!?……………消えた!?博士!」

「大丈夫よ。仕掛けた観測機がちゃんと反応してるわ。……………恐らく^{リアライザ}顕現装置による物質転送……………みたいなものかしら?」

となると二人は何処に行ったのか。それを知るのは少年に付けた虫型の観測機しかない。

しかし手元にはその情報を受信できる端末がないため、仕方なく零と志保は拠点へと引き上げていった。

序章が終わって

〈プリンセス〉の消息が絶たれてから数日が経過し、天宮市には束の間
の平穏が訪れていた。

「……なるほど。——〈ラタトスク機関〉。精霊相手に武力を用い
ず、対話で無力化する組織。眉唾だと思ってたけど、本当に存在する
とはね……」

「しかも大型の空中艦まで持ち出すとはな。ずいぶん熱が入った連
中じゃないか」

創世重工、仮設社屋のオフィス。

あれから二人は観測機から得られた情報を調べ上げ、少年に協力し
ている組織の正体を突き止めた。

「それにしても驚いたわ。まさかあんな少年が存在するなんてね。
……精霊に好意を持たせてキスをすることで、霊力を封印することが
できる高校生。か……」

「その一高校生を支援するためだけに、莫大な資金と技術を注ぎ込む
とはな。しかも霊力を封印した〈プリンセス〉を学校に通わせるとは
……さすがに恐れ入ったよ」

志保と零は揃って感心の言葉を洩らす。

精霊の霊力を封印する力を持った少年に、それを支援するためだけ
に動く巨大な力を持った組織。

明らかに何者かに仕組まれているかのようなその場景に、二人はキ
ナ臭さを覚えずにはいられなかった。

「……で、社長はこれからどうするの?」

「どう、とは?」

天井を見上げるように椅子にもたれかかったまま、志保が零に問
う。

「決まってるじゃない。彼らは社長にとって敵なのか、それとも味方
なのか……」

その答えが今後の方針を決める。志保の目がそう言っているのが
見えた。

「……決まってるだろう？俺は俺のやるべきことをやる。その邪魔になる奴が何を考えて、何を企んでようと関係ない……」

椅子から跳ねるように飛び起き、闇のような冷たいものを宿した瞳で志保を見ながら続ける。

「……上等だよ。こつちも生半可な気持ちで精霊を狙ってる訳じゃないんだ。誰かが裏で糸を引いてようと、出来レースだろうと知ったことじゃない。……この精霊争奪戦——乗ってやるよ」

言いながら零は右手を目の前に伸ばし、すべてを掴み取るようにその手を握り締めた。

「……それでこそ社長ね。そう言うと思ったわ。……それじゃ私も本気で行かせてもらおうかしら？」

志保は軽く拍手しながら、モニターに表示された情報に目を落とす。

確認されている中で唯一の男の精霊、世創零。

そしてそのパートナー、海原志保。

この二人を敵に回したASTやDEM、そしてヘラタトスク機関。誰が精霊を殺し、誰が精霊を獲得するのか。究極の精霊争奪戦がいま、音を立てて開幕したのだった。

——ちようど同じ頃、五河家のリビング。

「——という訳よ。わかったかしら？」

「ん〜……まあ、なんとかな……」

少年、五河士道はヘラタトスク機関の司令官にして彼の義妹である五河琴里と、解析官の村雨令音から、今後の活動についての説明を受けていた。

数日前に霊力を封印したへプリンセス、夜刀神十香と士道は、目で見えない経路パスのようなもので繋がっており、彼女の精神状態が不安定になるとことで封印されている霊力が逆流してしまい、精霊の力が暴発してしまう危険がある。

そのために精霊用の特設住宅が完成するまでの間、彼女のメンタルケアを兼ねて五河家で生活すること。

そして十香以外にも存在する精霊たちの攻略のため、これからも訓練を続けていく旨が伝えられた。

「……ってことは、精霊は女の子しかないってことでいいのか？」
「……………」

土道の質問に、琴里と令音は顔を見合わせる。

「……………？……どうかしたのか？」
「……………いえ、何でもないわ。……男の精霊はひとりだけ、確認されている……って言っつていいのかしら？」

歯切れの悪い琴里の回答に、土道は余計に訳がわからなくなる。そんな琴里を見かねてか、隣にいた令音が代わりに口を開いた。

「……今から10年ほど前から、微弱でほんのわずかな時間だけ、霊力が観測されることがASTのような魔術師ウィザードがいる組織で確認された。その場所には決まって『ある青年』の姿が確認されている」

「魔術師ウィザードのいる組織で？……なんでまた……………」

土道が令音の説明に疑問符を浮かべていると、ある映像が表示された端末を土道に見せる。

そこには水銀に浸したような銀色の髪を後ろに長く伸ばし、純金のような瞳をした、20代半ばほどと見られる青年が映っていた。

ぱつと見だけでは男性とはわからないほどに美しく、土道も一瞬だけ見とれてしまった。

「そして彼が現れた施設で霊力が感知されると、女性の魔術師ウィザードが行方不明になっている」

「まさかそいつに攫さらわれたんじゃ……………」

土道の予想を令音は首を横に振って答える。

「いや、次の日には普通に出勤してきている。それも何事もなかったかのように……………」

「……………重要なのはその後よ。その魔術師ウィザードは決まっつてすぐに退職届を出して、そのまま行方を眩ましてるの。今でも彼女たちの所在はわかってないわ」

その答えを知るのは、彼女たちに接触した彼のみ。土道はなんとなくそう予感した。

「少女を拐かして連れて行くところから、彼にヘインキュバスという識別名が付けられたわ。ASTでは正式に彼を精霊として対応してる」

「ヘインキュバス」……」

『夢魔』を意味するその識別名は、まさに的を射ているとこの場にいる3人は納得する。

「……そ、それで、俺はそいつともデートしなくちゃ行けないのか？」
「どれだけ女性のように美しい見た目をしていようと中身は男。士道には同性相手では十香の時のようなデートができる自信はない。」

「いや、今は彼に関する情報があまりにも少なすぎる。あまりにもイレギュラーな存在である以上、同じように扱うのは得策とはいえない。それに最近では姿を見せることがなくなって、その所在はまったくわかっていない」

「こつちの上層部も精霊かどうか疑っている以上、今は保留ってことになってる。だから特に攻略する予定はないわ」

「……そ、そうか……」

二人の話を聞いて、士道は内心でほっとする。

——何故だかヘインキュバス〳〵の顔を見た瞬間、胸の内から気持ちの悪いものが込み上げてくるような錯覚を覚えた。

それが同性を口説かなければならないという嫌悪感からだと思いつけ、話を終えた士道は部屋を後にした。

——数日後、創世重工のオフィスには、賑やかな話し声が飛び交っていた。

「社長！これはどうしましょうか？」

「ん？ああ、それはやれるところまでやったら博士に回してくれ」

若い女性が指示を仰ぎ、零が適切な指示を出す。

「——社長！私はどうしたら……」

「君はこつちの仕事を頼む。終わったら俺に教えてくれ」

部屋にいる10人近くの女性に指示を出すと、零は一番奥の席に腰

掛ける。

彼女たちは零が他の組織から引き抜いてきた魔術師^{ウイザード}で、創世重工の社員である。

異性を対象に霊力を送り込み、自身に隷属させる。これこそ零が持つ天使、〈淫導賢者^{タブリス}〉の能力^{ちから}だった。

「——しばらく見ないうちにずいぶん立派になったわね。先輩魔術師^{ウイザード}たちに感謝しないと」

志保がコーヒーの入ったカップを手に、零の隣に座る。

「ああ。本当にいい娘^こたちばかりだ」

「社長の人を見る目は確かだからよ。これでこの留守を任せても安心ね」

カップに口を付けながら、懸命に仕事をする社員たちを見守る志保。

「そうだな。これでいつ空間震警報が鳴っても——」

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

零が言いかけた矢先、タイミングを見計らったかのように空間震警報が鳴り響く。

「……さっそくね」

「ああ。……それじゃあみんな。行ってくる」

零が席を立つと、社員たちは一斉に立ち上がり——

『——はいっ！頑張ってください！』

『どうか(無事で！)』

笑顔で二人に激励の言葉を贈る。

そんな彼女たちに二人は手を上げて応えながら、颯爽とオフィスを飛び出していった。

第2ラウンド

雨が降り続く町中。その一角に志保が運転するトラックがとめられた。

「……ここら辺でいいかしら。さてさてターゲットは……」

志保がトラックに備え付けられた霊力探知機を起動し、精霊の居所を調べる。

「あのデパートの中ね。それじゃあまた観測機の出番かしら」

「今度は音声も拾えるように改造してあるからな。前みたいには行かないだろ」

自信満々で端末を操作して、観測機はデパートへと発進する。

しばらく店内を徘徊していると、子供用品コーナーに人影を見つけた。

「ビンゴみたいね。霊力反応もバッチリだわ」

「……にしてもずいぶん小さいな。よくて中学生くらいか？」

モニターに表示された精霊の姿を見て、零が思わずそんな言葉を漏らす。

そこに映っていたのは、緑色の雨合羽あまがつぼのような霊装に身を包んだ、青くウェーブのかかった長い髪が特徴の小柄な少女。

左手にはコミカルなウサギのパペットが装着されており、彼女だけが不思議の国にいるかのような雰囲気醸し出していた。

「……該当情報があったわ。識別名へハーミット」。空間震の規模が比較的小さくて、AST相手でも自衛程度にしか攻撃しない大人しい娘よ」

「なるほど。……ASTが外で待機してるってことは、中には他に誰もいないってことか？」

邪魔が入る前に片付けようと考えた零が、軽やかにトラックから降りる。

「……待って。どうやら先客みたいよ」

志保が零を止め、へハーミットに接近する人影を見る。

そこから現れたのは、先手をとって零の出鼻をくじいた少年、土道だった。

「……また先を越されたか……」

「本当に運がいいわね。幸運の女神でもついでなのかしら？」

だがここは彼に〈ハーミット〉の情報を引き出してもらおうのもひとつの手かもしれない。

そう考えた零は一度腰を下ろし、土道の手並みを拝見することにした。

「……なんだか妹の面倒を見てるお兄さん、つて感じね」

「ああ。恋愛的な好感度じゃなくても、あんなのでも封印できるのか？」

二人が見守る中、土道はあれやこれやと〈ハーミット〉に近づいていく。

最初は腹話術のように喋るパペットのことに触れて機嫌を損ねかけたが、なんとか持ち直しているようだ。

「さつきから彼、耳のあたりを気にするみたいに触ってるわね。何か付けてるのかしら？」

「考えられるのは小型のインカムだろうな。それで影からサポートしてる連中とコンタクトをとってるんだろ」

やはり近くでこの様子を見ていいのか。零は周囲にも監視の目を向ける。

「……あ、やっちゃった……」

思わず志保が負けを確信したような言葉を漏らす。

〈ハーミット〉がジャングルジムから落下した瞬間、土道がそれを受け止める。

その拍子に互いの唇が接触し、偶然ながらもキスする形になってしまった。

「……いや、霊装が消えてない。それに霊力反応も健在だ」

零が落ち着いた様子で端末に目を向ける。

「これで確信できたわね。彼が霊力を封印するためには、もっと恋愛的な好感度を確保してからキスをする必要があるみたい」

「だな。となるとまだ俺に付け入るチャンスはあるってことだ。……ん？」

そこで端末が霊力の反応をキャッチしたことを報せる。

見るとそこに怒りを露わにし、来禅高校の制服を着たへプリンセスが立っていた。

「あらら。ずいぶんとタイミングの悪いことで……」

「霊力を封印できたってことは、それ相応に好意があるってことだからな……」

そんな士道が他の女とキスをしているのを見て、気分がいいはずなんてない。

修羅場と化した現場に、すぐに飛び込まなくてよかったと二人はほつとする。

するとへハーミットが挑発するように煽り、へプリンセスは止めようとする士道を押し退け、駄々をこねる子供のように対抗する。

そしてへプリンセスがパペットを掴み上げ、感情的になりながら叫んだ。

「……う……なんか様子が変だな……？」

パペットを取り上げられた瞬間、あんなに口達者だったへハーミットが急に黙りこくってしまう。

そして弱々しく手を伸ばし、パペットを返すよう懇願した。

「ええ。性格がさつきと全然違うわね。これってもしかして……」

志保が観察するように眺めていると、へハーミットは天使である怪物のように巨大なウサギの人形を顕現。氷柱つららのような氷の刃で辺りを攻撃しだした。

そして士道がへプリンセスを庇う中、へハーミットを乗せ、パペットを啜えた天使はデパートから飛び出していった。

「……これで彼のターンは終わりってことね。おかげでいろいろと情報が入ったわ」

「そうだな。……さてと、今度は俺のターンだ」

零はへハーミットが消失し、引き上げていくASTの一団を眺めながら宣言した。

勝利のための下準備

それから次の日、零と志保はオフィスで昨日の〈ハーミット〉の情報
報を纏めていた。

「……やっぱり」

モニターに表示されている観測機の情報を見て、志保の目付きが鋭
くなる。

〈ハーミット〉がデパートを飛び出した瞬間、ASTが一齐に攻撃を仕
掛けた。

その拍子に天使がパペットを落としてしまい、そのまま消失する。
ロスト

そのパペットは偶然それを見つけたASTの隊員が拾い、そのまま
持ち帰るのを確認した。

「隊員の名前は鳶一折紙。とびいち おりがみ階級は一曹。ASTの中でもエース的存
在で、学校でも成績優秀かつスポーツ万能。おまけにあの五河士道と
同じ学校で同じクラス。……狙ってるのか？」

調べ上げた隊員の情報に、零は面倒臭そうな表情をする。

まるで彼がすべての中心にいるような、偶然という言葉では片付け
られない『何か』を感じた。

「それじゃあ行きましようか。目的のものをいただきに」

「ああ。負けっぱなしは趣味じゃないんだ。今度は俺の番だ」

ようやく回ってきたチャンスに胸を踊らせながら、二人はオフィス
を後にした。

そしてトラックが停車したのは、パペットを持ち帰った折紙の自宅
があるアパートの駐車場。

「さてと、彼女の部屋は……」

端末を起動し、部屋の何処かにあるであろうパペットを探す。

「……ん？あれは……」

隣でその様子を見ていた零は、窓の外を歩く土道を視界に収める。

士道は零に気づくことなく近くを通り過ぎ、アパートへと足を踏み入れた。

「……どうやら目的は同じみたいだな。博士、悪いけど急いでくれな
いか？」

「りよーかい。場所さえわかれば……」

モニターが折紙の部屋を見つけると、スキヤニングをかけてパペツトの在処あつかを調べようとする。

「……あら？何かしらこのノイズは……？」

まるで志保を妨害するように、モニターの情報にバグのようなものが入る。

「ジャミングか？……まさか俺たちに感づいたなんてことは……」

「いえ、これはあの部屋だけに取り付けられたものよ。たぶん私的なものね。……けど、この程度なら私の『魔法』にかかれば……」

志保はコキコキと指を鳴らすと、端末から別のプログラムを起動する。

するとジャミングは数秒で取り除かれ、部屋の詳細な情報が表示された。

「わお。さすがは博士」

「これくらい余裕よ。……見つけたわ」

折紙の寝室にあるダンスの上に、飾るように置かれているパペツトの姿があった。

そして志保は両手を目の前に伸ばすと、途中から消えたように腕が見えなくなる。

「あいかかわらず大したもんだな。博士の空間転移能力は」

零は感心するようにその様子をじっと眺める。

そう、志保はこの場所から折紙の寝室との間に、別空間を経由する亜空間のトンネルを作ったのだ。

これにより瞬間移動のように何処でも移動でき、物質を運ぶことが出来るのだ。

「私が一緒にいてよかったわね。……取れたわ」

志保がゆつくりと腕を引き抜くと、その手には大事そうに抱えられ

たへハーミット」のパペットがあった。

「これで目的は達成ね。あとは……」

パペットを後ろ側に向け、取り出した裁縫バサミでパペットの繋ぎ目を少しだけ開く。

そして小型の装置を内部に仕込むと、縫い針と糸で元通りに縫合した。

「……はい。やれることは全部やったわ。あとは社長とこの子の頑張り次第ね」

志保はパペットを零に手渡しながら、トラックの後部を見る。

「ああ。出来立てホヤホヤの秘密兵器——へオルトロス」の力、見せてやろうじゃないか」

パペットを受け取り、万全の状態に胸を踊らせる零。

狙ったように空間震警報が鳴り響いたのは、その数分後のことだった。

A S Tが出動してから数十分後、町中ではへハーミット」対A S Tの戦闘が行われていた。

「——どうするんだよ琴里！よしのんが見つからなかったのに……！」

『取り乱してんじゃないわよ！……こっちで何とか手を考えるから、土道は四系乃の元に向かいなさい！』

インカムで琴里に指示を仰ぎながら、土道はあちこち凍りついた町を走る。

へハーミット」、四系乃の大事な親友のパペット、『よしのん』を取り戻しにA S T隊員である折紙の自宅を訪ねたのはいいが、『よしのん』を見つけることが出来なかった。

その最中に空間震警報が鳴り、折紙が出動したことで探す暇がなくなってしまうた。

「くそっ……このままじゃ四系乃が……！」

どうか無事でいてほしい。切実な願いを胸に秘めながら、土道は戦

闘が行われている地点へと走った。

「わお。すごいことになってるわね……」

建物の影から見える光景に、志保は驚きの声を洩らす。

〈ハーミット〉は自分に向かってくるすべてを拒むように、ドームのよ
うな形状の結界を展開した。

「さつき随意領域テリトリを氷付けにするのが見えたけど、まさかあれも……」
「でしようね。さつそく出番が来たわ」

志保は待つてましたとばかりに端末を操作する。

するとトラックの後部ハッチがゆっくりと音を立てて開く。

そして中から機械の駆動音を響かせながら、全長2mを越える巨体
が姿を表した。

二つの頭部にそれぞれ赤く発光する単眼を持ち、両腕には鋭い鉤
爪、尻尾の先の蛇の頭部を模したアーム。

そのあまりにも異質な形状は、獲物を狩るために生み出されたこと
を体現しているかのようだった。

「さあ、記念すべき初仕事だ。頼んだぞ、〈オルトロス〉」

零が〈オルトロス〉の肩を叩くと、〈オルトロス〉は小さく頷く。

そして〈ハーミット〉が閉じ籠っている結界の方を向き、胸部の獣
の顎を模したハッチを展開する。

するとその内部に隠されていたスピーカーのような部分が露にな
り、そこが高速で振動を始めた。

「靈力に真逆のエネルギーパターンを送り込み、その効果は無効にす
る『反靈力波』。……さて、たつぷりとデータを取らせてもらいましょ
うか」

説明するように呟きながら、志保は〈ハーミット〉の結界へと向かっ
ていく零と〈オルトロス〉の背中を見送った。

〈ハーミット〉

A S Tの一団からちようど反対側に回り込む形で、零と〈オルトロス〉は〈ハーミット〉の結界の前に来ていた。

「……さてと、これが反霊力波の初始動だ」

これから実験でも始めるかのような気分で、零は〈オルトロス〉のすぐ後ろに立つ。

すると〈オルトロス〉と零を囲むように、ぼんやりと薄い障壁のようなものが展開された。

「反霊力波の防御形態。異常はなさそうだな」

うんうんと零が頷くと、〈オルトロス〉はゆつくりと足を進める。

そして障壁の一部が結界に触れた瞬間、その周辺の礫つぶては威力を失い、舞い散る雪のように力なく地面に落ちていった。

「……よし、成功みたいだな。それじゃあこのまま行こうか」

上々の結果に満足そうに頷きながら、零は前進を続ける〈オルトロス〉の後に続いた。

——結界の中心部。そこは外で猛吹雪が起こっているとは思えないほど静まり返っている。

日の光が届かない真つ暗な闇の中、そこに一人の少女の姿があった。

「う、え……つ、え……つ」

〈ハーミット〉は天使の背にうずくまり、一人で泣き続ける。

大切な親友である『よしのん』のいない寂しさで、心が押し潰されそうになっていた。

「よ、し、のん……つ……」

唯一の心の支えである『よしのん』がいなければ、満足に平常心を保つことができない。

その名を呼ぶも、この静寂に満ちた空間では誰も答えてはくれない

い。……はずだった。

『……おやおやく？何を泣いてるのかな？』

聞き覚えのある可愛らしい声が、何も無いはずの闇の中から聞こえてくる。

「……………!?!」

突然の乱入者にへハーミットはビクツ！とすぐみ上がり、怯えながらそちらを見る。

暗い闇の中から重量感のある足音と共に、体長2mを超える『何か』が姿を現す。

そしてその異形の巨体の影から、見慣れた白い小さな塊がひよっこりと顔を出した。

『もしかしてよしのんに会えなくて寂しかったのかな？大丈夫！よしのんならここにいますよ！』

さらに続くようにして、パペットを右手に装着した零がゆつくりと姿を現した。

「……………よ、よしのん……………っ！」

パペットに気づいたへハーミットは天使である人形から降り、慌てて零の元に駆け寄る。

「ほら、こいつが欲しかったんだろ？」

駆け寄ってきたへハーミットに、零は右手から外したパペットを差し出す。

へハーミットはそれを受け取り、自らの左手に装着した。

『……やつほー！初めまして……………でいいのかな？本当に助かったよ〜♪』

まるでそのパペットが生きているかのように、陽気な口調で話し始める。

「……………ありが、とう……………ぎ、います……………」

突然、へハーミットがか細い声で言葉を発する。

「別に大したことじゃないさ。ただ落とし物を届けに来ただけだ。……………それよりちよつと頼みがあるんだけど」

「……………」

『なにになに？よしのんを助けてくれたお礼に何でも聞いちやうよ』

急に切り出した零の言葉に、へハーミットはきよとんとしながら首を傾げる。

「難しいことじゃない。少しの間、俺の言うとおりにしてくれればいいんだ」

そう言つて零は右手をへハーミットに向かつてかぎす。

すると掌から黒い粒子のような霊力が放出され、それがへハーミットに吸収されていく。

「……………!?!」

『わわっ!?!なにこれ!?!』

見慣れない現象にへハーミットとパペットが動揺の色を見せる。

「大丈夫だ。害はないから、大人しく受け入れてくれればいい」

「……………は、はい……………」

零に恩があるからか、それとも元から素直な性格だからか、へハーミットは言われるがままに『それ』を受け入れる。

「……………んっ、ふぁ……………」

『それ』を受け入れ始めて10秒ほど経過した頃、へハーミットに変化が見られる。

まるで酒でほろ酔いしたように顔が赤らみ、意識が朦朧もうろうとしてきたようにクラクラし始める。

『あれ？なんだか、よしのんも……………』

「よ、よしのん……………」

パペットにも同様の変化が起き、酔いつぶれたように力なく項垂うなだれた。

実はへハーミットの中には別の人格が存在しており、それがパペットという形でへハーミットと独立した思考を持っている。

土道が接していた時はパペットの人格とだけ仲良くなっていた。だからキスしても霊力を封印できなかつたのだ。

しかし送り込まれる霊力の影響を受けていることから、やはり

へハーミットとパペットは繋がりを持っていることが確認できた。零はさらに送り込む霊力を増やし、一気にラストスパートをかける。

「ふあ……ああ——」

——ドクンツ！

へハーミットが沸き上がるような高揚感に身も心も委ねそうになった瞬間、身体の奥の『何か』が鼓動するように大きく跳ねた。

同時にへハーミットの身体から、彼女の霊力を象徴するような青いオーラが放出され始めた。

「……よし、頃合いだな」

零は霊力の放出を止めると、両手でへハーミットの肩を掴む。

「えっ……？」

へハーミットの意識がはつきりしていない中、零の顔がゆっくりと近づいていき——

——そつと、二人の唇は重なった。

それをきつかけにするようにへハーミットの意識は途切れ、同時に二人は一緒に消失する。

その様子を傍からずつと見ていたへオルトロスは、ゆっくりと空を見上げる。

すると主人がいなくなったことで結界が薄れていき、まるで夜明けのような日の光がへオルトロスのボディを暖かく照らしていた。

一方、土道はへプリンセス、十香の協力もあって、なんとか結界の前までたどり着くことができた。

「……やっぱり、強行突破しかないよな……？」

目の前に広がる純白の殺意を眺めながら、土道は手にしている鞆を

強く握る。

その中にはヘラタトスクの構成員が『よしのん』そっくりに作った偽の『よしのん』が入っていた。

だがこんなところで尻込みしている場合ではない。

この中には『よしのん』と離ればなれになって寂しい思いをしている四糸乃がいる。それに自分をここまで行かせるために、十香がASTの足止めをしている。

だから何としてでも四糸乃を救わなければならない。その使命感が士道の足を動かした。

『——待ちなさい！生身で結界の中に入るなんて無謀だわ！』

インカムから聞こえてくる琴里の叫び声が士道の耳に突き刺さる。

「けど他に方法がないんだ！このままじゃ四糸乃が……！」

『ああもうっ！仕方ないわね！……こうなったら主砲で道を作るわ！そこから——』

琴里がプランを説明している最中、結界に異変が起こる。

まるで嵐が去って行くように結界が薄れていき、やがて少量の雪を残して完全に消滅してしまう。

しかも曇り空だった天気も、日の光が暖かく照らす晴れ空へと変わっていた。

「えっ？どうなってるんだ？急に天気が……」

士道は困惑しながら、数秒前まで結界の中心部だった箇所を見やる。

そこには猛獣や悪魔をイメージしたような、凶悪そうなフォルムの『何か』がぼつんと立っていた。

「な、なんだあれは……それに四糸乃はどこに……」

四糸乃を探して周囲を見回しているうちに、異形の『何か』は周囲の風景に溶け込むようにして姿を消した。

『不可視迷彩!?……ということはあれはASTの……!?』

「……そ、それってまさか、四糸乃は……」

殺されてしまったのか。最悪の可能性が頭を過ぎる。

『……いえ、まだそうと決まったわけじゃないわ。もしかしたら直前

に消失したってこともあるし。……四糸乃がいらないならいつまでも
そこにおいても仕方ないわ。回収するわよ。土道』
すると土道は上空からの光に包まれ、ヘラタトスク<が保有する空中
艦へフラクシナス>へと転送された。

雨が止んだ後……

——隣界。そこは消失した精霊ロストが眠りにつく安らぎの地。

現在、この場所に二人の精霊が訪れていた。

「……なるほど。こういう空気は変わらないのか」

「はあ、はあ……」

その場に座り込みながら周囲を見回している零と、身を預けるようにして寄りかかっているへハーミット。

彼女は未だに青い光に包まれながら、熱でうなされているように荒い呼吸を続けている。

零はこれから行う行為に背徳感を覚え、緊張から軽く身震いをする。

だがこれは避けては通れない通過点。このためにこの30年弱、ずっと準備をしてきたのだ。

意を決した零は、そつとへハーミット<の頭に右手を乗せる。

「はあ、はあ……え？」

うつすらと意識があるのか、へハーミット<は小さく反応する。

「これからお前のすべてを俺のものにする。そうすればもう、お前は外敵に狙われなくなる」

「……………」

へハーミット<はぼんやりとした意識のまま、零の言うことに耳を傾ける。

『俺のものにする』。この言葉の意味はよくわからない。

だが、彼女の中の『何か』がそれを望んでいるように、彼女の鼓動をさらに加速させる。

この男にすべてを捧げろ。この男のために尽くせ。そんな思いが彼女の胸を染めていく。そして——

「——は、い……」

彼女はその衝動に従い、塗り潰された思いを受け入れた。

瞬間、光はより一層強くなり、何かの合図のように点滅しているように見えた。

「よし……」

その返事に覚悟を決めた零は、彼女を抱き寄せるようにして向き合
い――

――そつと、唇を重ねた。

「ん……」

彼女は突然のことで驚いたのか、瞬間、目を大きく見開く。
だがすぐにそれを受け入れ、そつと目を閉じる。

すると彼女を包んでいた光が移動を始め、二人の繋がっている場
所、互いの唇へと集まっていくな。

そしてそれが二人の口の中で収束され、小さな青い宝玉たまのような球
になる。

自身の舌でそれを確認した零は、それを舌で手繰り寄せ、自身の喉
へと導いた。

「ああ……」

唇を離すと、彼女の首に青いリング状の紋様のようなものが浮かび
上がる。

それを見た零は、満足そうにこう言った。

「……これでお前は俺のものだ。――四糸乃」

「……は、い。ご主人、様……」

嬉しそうに微笑みながら、へハーミット、四糸乃は零に身を寄せる。

『――ちよつとく！よしのんを差し置いて二人だけでいちやラブす
るなんてずるいんじゃないの？』

「うおつ……!?!」

「よ、よしのん……」

すっかりその存在を忘れ去られていたパペット、『よしのん』が急に
活動を再開する。

「……そういえばそうだな。二人は一心同体だもんな」

零は『よしのん』の頭に手を乗せ、わしゃわしゃと豪快に撫でる。『そうそう！四糸乃あるところによしのんあり！ってね。それじゃあご主人さま！四糸乃とよしのんのコト、末永く可愛がってね♪』そう言うのと『よしのん』は零に飛びつくように顔を寄せ、零の唇に顔を力一杯押しつけた。

「……ああ、たっぷり可愛がってやる」

そう誓うように零は四糸乃と『よしのん』を優しく胸に抱きしめる。すると安心したのか、四糸乃は安らかに眠りに落ちてしまう。

そのまま零は四糸乃を抱き留めながら、現界の時まで二人きりの時間を過ごした。

——四糸乃と零が消失してからちようど24時間後、天宮市内に空間震警報が鳴り響く。

市内の住人は速やかに地下シェルターに避難し、地上は人つ子一人いない。

そんなゴーストタウンと化した市内で、広範囲に突風が巻き起る。

そしてその中心部に漆黒のエネルギーが発生し、それが徐々に拡大していく。

そのまま一気に広範囲に広がり、その範囲内にあるものすべてを巻き込むのが空間震だった。

しかし今回は広がることなく、2m程度に留まり、波打つ水のように湾曲する。

——そして花火のように広範囲に霧散した。

中心部から現れたのは、抱き合ったままキスをしている零と四糸乃。

周囲に舞い散る空間震の残照は、まるで二人を祝福しているかのような演出を装っているようだった。

「……へえ、こういう空間震もあるんだな」

四糸乃から唇を離すと、見慣れない空間震の跡を軽く見回す。通常の空間震なら、範囲内にあるものを根こそぎ消し去るのだが、今回はその様子がまるで見受けられない。

そう、ほんの少しもないのだ。静粛現界でも僅かな破壊の痕跡があるはずなのだが、今回はそれすらもなかった。

「あ、あの……」主人、様……」

『これからどうするの？もしかしていかがわしい場所につれてって、あんなことやこんなことを……』

零の指示を待っているのか、四糸乃と『よしのん』が上目遣いで零を見上げる。

「そうだな。こんなところでじっとしてても……」

厄介者が来る前にどこかに隠れようと見回す。すると遠方から見知ったワイヤリングスーツを身につけ、多数のC R—ユニットを装備した一団、A S Tが飛来してくるのが見えた。

「……ちよーつとドロンするのが遅れたか。仕方ないな……」

「ご、ご主人、様……」

『うわーおー！これまた大変なお出迎えだね〜』

零の後ろに怯えながら隠れる四糸乃と、ファイティングポーズをとって迎撃する姿勢を見せる『よしのん』。

「下がってろ。連中の相手は俺が——」

零が前に出ようとしたとき、何処からか一発の鉄の塊のような物体が飛来してくる。

それが零たちとA S Tの間に到達した瞬間、眩い閃光を放ちながら爆発した。

「きやつ……」

『なになにー!? 新手の敵襲〜!?!』

「……いや、どうやら援軍が来たみたいだ」

四糸乃と『よしのん』が慌てふためく中、零は落ち着いた様子で対魔術師用のジャミング機能付き閃光弾が飛んできた方を見る。

そこには左腕に装着したグレネードランチャーを構えたヘオルト口

ス」の姿があった。

「ナイスタイミングだな。……四糸乃、こつちだ」

「えっ？は、はい……」

『いえ〜い♪愛の逃避行ってやつだね〜♪』

零に腕を引かれ、四糸乃と『よしのん』はへオルトロス」のいる建物の影へと身を潜める。

それから二人を見失ったASTはその後の搜索も空しく、仕方なく撤収していくのだった。

「——お帰りなさい。その様子だと無事に目的は果たせたみたいね」

へオルトロス」に誘導されて来た零と四糸乃を、トラックの前で待機していた志保が出迎える。

「ああ、お陰様でな。この通りバツチリかつ攫ってきた」

言いながら零は四糸乃の頭に手を乗せ、優しく撫でる。

「あ、あう……」

人前で恥ずかしいのか、四糸乃は黙りこくりながら縮こまる。

「初めまして。私は海原志保。この人の協力者よ」

「博士は俺の相棒だからな。ちゃんと言うことを聞くんだぞ？」

右手を差し出して握手を求める志保に、零がフォローして四糸乃の背中を押す。

『あらそうなの〜？よしのんはよしのん！ふつつか者ですが、どうぞよろしく〜♪』

四糸乃に代わって『よしのん』が志保の手に捕まるようにして握手に応える。

「あらあら。ずいぶんと可愛らしいお友達がついてるのね」

「それよりもそろそろ戻らないか？ASTに見つかると面倒だろ」

『よしのん』を見て和んでいる志保に、零が催促する。

ちょうどへオルトロス」の格納が終わったのを機に、その場にいた全員が乗ったトラックは不可視迷彩を展開し、静かにその場を後にし

た。

負け戦と勝ち戦

四糸乃と零の現界。その様子を見ていたのはASTだけではなかった。

「……あ、あれは……」

ちやうど二人が現界した頃、空中でその様子を見ていたヘフラクシナスのブリッジ。

そこで偽の『よしのん』を握りしめたまま、士道が膝をつく。

「まさかあれって……令音！」

艦長席に座る琴里が令音に呼びかける。

「……ああ、間違いない。確認されている中で唯一の男の精霊――

ヘインキュバスだ」

令音の解析結果にブリッジ内が騒然となる。

なぜこんなところにいるのか。そしてなぜ四糸乃とキスをしながら、二人同時に現界したのか。不測の事態にクルーたちが混乱する。

「――落ち着きなさいっ！こんなところで悩んでも仕方ないわ。観測機で二人の後を追って！」

琴里の一括で全員が平常心を取り戻すと、クルーたちは大急ぎで観測機を操作する。

「……！……あそこに何かいるわね。映像を拡大して」

ヘインキュバスと四糸乃が建物の影に隠れると、そこには見覚えのある巨体が二人を出迎えるように立っていた。

「……！……あ、あいつは……！」

「四糸乃の結界の中にいた奴ね。……ってことはヘインキュバスの仲間ってことかしら？」

どれだけ悩んだところで、憶測の域を出ない。

仕方なく監視を続けていると、少し離れた場所にとめられていたトラックの近くに誰かいるのが見えた。

「今度はまともな人間みたいね。……けど人間が精霊と組むなんてこと……」

言いかけて琴里の脳裏に、とある仮説が立てられた。

「……なるほど。そういうことだったの」

「琴里？何かわかったのか？」

士道の問いかけに琴里は「ええ……」と短く答え、推理とも呼ぶべき可能性を口にした。

「今までの報告にあったヘインキュバス[▽]の行動は、すべて本命である精霊を捕獲するための戦力増強だったのよ。だから優秀な魔術師^{ウィザード}ばかりが狙われた……！」

「……なるほど。そう考えればすべて辻褃が合うな。だとすると彼はかなりの戦力を引き連れていることになる。……もしかしたら我々のような組織クラスのサポートがバックにいる可能性も否定できない」

琴里の推理に便乗するように、令音も思いついた推測を口にする。

「となると、このまま彼らの後を追って、アジトの場所を突き止めるのが得策でしょうか……」

「当然でしょ。こうなったらこのまま監視を続けて、ヘインキュバス[▽]の隠れ家を突き止めて——」

副司令である神無月^{かなづき}恭平^{きょうへい}の意見を採用した琴里が追跡を開始しようとした瞬間、ヘインキュバス[▽]たちが乗ったトラックが周囲の景色に溶け込むようにして映像から消えてしまった。

「なっ!?!もしかして不可視迷彩^{インビジブル}!? どんだけハイテクなトラックなのよ!」

目標を見失って気が動転してしまう琴里。

クルーたちは何とかトラックを見つけ出そうと奮闘するが、完全に見失う形で終わってしまった。

「……目標の反応、完全に見失いました」

「……してやられた。って訳ね」

クルーの報告に、琴里は舐めていた棒付きキャンディーをガリツと噛み砕く。

「そ、それじゃあ四糸乃はどうなるんだ!?!まさか殺されるなんてことは……」

「落ち着きたまえ。生きてまま連れて帰ったと言うことは、すぐに命を奪う可能性は低い。ここは我々で行方を捜していくからシン、君はもう帰りたいまえ」

四糸乃を心配するあまり気が動転している土道を、令音が冷静に宥める。

目的を達成できずにブリッジを去って行く土道の背中は、十香の一件での勢いが嘘のように小さく見えた。

「……只でさえ男の精霊と言うだけでもイレギュラーなのに、まさか他の精霊を捕獲するために動いていたとは……」

「しかも我々やASTの目を盗んでの鮮やかな隠密行動。これは一筋縄ではいかなさそうだな」

神無月と令音の意見に、琴里は「ええ……」と短く答える。

「……どうやらヘインキュバス」の見解を見誤っていたようね。こうなったら情報の見直しが必要かしら。……神無月！令音！ヘインキュバス」に関するデータを可能な限り集めてきて！」

琴里が怒号とともに指示を出し、ブリッジ内は再び慌ただしくなる。

「……ヘインキュバス」。まさか私たちと張り合おうとはね。……上等じゃない。その戦争、買ってやるわ……！」

新しい棒付きキャンディーを口に含み、琴里は獲物を狙う狩人のような表情で、モニター上のヘインキュバス」を睨み付けた。

一方、拠点である社屋に到着した零たちは、四糸乃の簡単な検査をしていた。

「……健康状態は至って良好。精神状態も安定。あとは制御装置用のデータさえ取れば、普通に生活しても問題ないわ」

コンピュータをカタカタと操作していた志保が、隣にいる零に結果を報告する。

「そうか。じゃあ次は俺の番だな。……四糸乃、よしのんと一緒にちよつと隣で待っててくれ。部屋にあるものは好きにしていいいから

な」

「は、はい……」

『早く終わらせてね？よしのん、もつとご主人さまと一緒にいたいからさ〜♪』

検査台から降りた四糸乃は、志保に誘導されるように大人しく隣の部屋へと移動していく。

そして入れ替わりで零が検査台に乗ったのを確認すると、コンピュータの前に戻った志保が検査を始めた。

「……他の精霊と契約を結んで、自分の支配下に置く能力……ね。本当に変わり種もいとこだわ……」

検査を続けながら、志保は零に与えられた能力について思案する。

まず対象の精霊に、隷属させるための特殊な霊力を送り込む。

これには対象の霊結晶^{セファイラ}へと浸透し、心身共に零への隷属を促す効果がある。

志保は当初、原理は催眠や洗脳に近いものかと見ていたが、四糸乃の検査でそれは間違いであることを思い知らされた。

零に隷属した四糸乃の霊結晶^{セファイラ}は、まるで零を求めているような反応を見せている。

例えるなら重度の麻薬依存症の患者が、より多くの麻薬を求めている状態に近い。

もしかしたら霊力をたらふく吸収させられ、キスをトリガーに消失^{ロスト}した時点で、既に霊結晶^{セファイラ}の方は堕ちている状態なのかもしれない。

となると隣界で精霊に隷属を迫っているのは零だけでなく、彼女たちの霊結晶^{セファイラ}からも迫られているということになる。

霊結晶は精霊の力の源。その支配権を握られた状態では、精霊自身にも隷属を促す霊力に抗うのはほぼ不可能なのではないか。志保はそう考えた。

「そして精霊本人が堕ちた証に、霊結晶^{セファイラ}は忠誠の証として互いの霊力から作った霊結晶^{セファイラ}の分身、名付けて隷属結晶^{スレイラ}を精製して、主人である社長に捧げる。……これで契約が完了ってわけね」

隷属結晶^{スレイラ}を受け取った主人との間には、目で見えない経路^{パス}のようなも

ので繋がっており、時に霊力を受け取り、時に送り込んだりすることが可能になる。

しかも言葉にしなくても隷属した精霊に気持ちを伝えることができ、それに従わせることができる。

さらに隷属結晶スレイラは主人である零の霊結晶セフィラに吸収されているため、この契約を無力化する術すべはない。

そのためどちらかの霊結晶セフィラが破壊されない限り、この主従関係を断ち切ることはできないのだ。

「……………までやってようやく一人分。けど……………」

これで終わりではない。まだ一人目を獲得しただけ。まだ精霊は他にもいるのだ。

その全員を隷属させ、支配下に置くまでは目的を果たしたことはない。

しかも精霊化した零について、まだわからないことは山ほどある。だからなにが起こってもおかしくない。

それに対する備えも万全の状態にしなくては、いつか起こる問題に対処できない可能性があるのだ。

「まだまだやることは山積みね。もっと頑張らないと。……………ね？社長」

検査台の上で大人しくされるがままの零を見ながら、志保はてきぱきと検査を続けた。

束の間のショッピング

それから次の日、零、志保、四糸乃の3人は四糸乃の生活用品を揃えるため、商店街に買い物に来ていた。

『わあくお！見たことないものがたくさんあるねえ〜♪』

「すごい、です……」

普通の生活というものを知らない四糸乃と『よしのん』は、はしやぐようにして町を見回している。

「……こうして見ると、普通の女の子と変わらないわね……」

「ああ、そうだな……」

まるで保護者にでもなったような気分で、二人はは四糸乃を見守る。

今の四糸乃は応急用の霊力制御装置で霊力を感知される心配がなく、霊装も展開していないためASTに狙われる心配はない。

「……それでも、町中を堂々と歩くわけにはいかないみたいだけど」

言いながら志保が近くの建物の影に目を向ける。

そこには鋭い視線を零たちに向けている少女の姿があった。

「確か……鳶一折紙、だっけ？ASTの」

「ええ。偶然見かけてついてきたのね。……そういえばあの娘もなかなか優秀な魔術師ウィザードよね？どうして引き抜かないの？」

志保がそう提案すると、零は残念そうな表情で折紙を見る。

「……俺もそうしたいのは山々なんだけどな。残念ながら彼女は不採用だ。精霊に対する憎しみが強い。たぶん霊力を送り込んでも完全には墮とせないと思う」

そう、零の能力は精霊相手なら確実に通用するが、それ以外の人間には絶対の保証はない。

特に精霊しじふんに対する嫌悪感や憎悪などの強い悪感情を抱いている場合、それによって阻害タブラリスされてしまう可能性があるのだ。

零の天使、〈淫導賢者〉には催眠術に近い能力が存在するが、いつ解けるかわからない以上、無闇に使う気にはなれない。

だから零は精霊について知っていて、魔術師ウィザードとして優秀で、かつ精霊に対して悪い印象を持っていない女子という条件を定めているのだ。

「なるほど。それじゃあ仕方ないわね。……それじゃあしばらく様子を見て、適当に撒まいておきましょうか」

「ああ。こういうときのための秘密兵器もあるしな」

懐に忍ばせたものを軽く叩き、二人は四糸乃の後を追うように早足で移動した。

——それから数時間後、生活必需品を一通り買い揃えた零たちは、満足げな足取りでトラックが隠してある地点を目指していた。

しかし監視の目も時間が経つごとに数を増していき、このままでは迂闊に帰ることができない。

「そろそろ面倒になってきたな。こうなったら……」

零の言わんとしていることを悟った志保は、ポケットに仕込んでいた装置のボタンを押す。

「これでいいな。……四糸乃、こっちだ」

「えっ……?」

『どうしたの?主人さま?……まさか人目につかない場所であくんなことやこくんなどを……』

勝手な妄想で騒ぎ立てている『よしのん』は気にせず、零と志保は次の曲がり角へと飛び込むように走る。

そしてすぐに近くの物陰に隠れると、零は懐から黒い手の平サイズのミニカーを取り出し、そつと地面に置く。

すると中央に取り付けられたレンズ状の部分から光が放たれ、目の前に零たち3人の姿が映し出された。

『わわっ!?よしのんたちが二人いる〜!』

「えっ?ええっ……!?!」

突然現れたもう一人の自分たちの存在に、『よしのん』と四糸乃は驚愕あしずきで後退する。

「ホログラムの方は問題なさそうだな。……それじゃあ陽動は任せ
た」

零がミニカーを軽く押すと、3人の立体映像と同じペースでゆっく
りと前進を始める。

その光景は何処からどう見ても3人が普通に町中を歩いているよ
うにしか見えぬ、零たちを追跡していたASTもそちらの後について
行ってしまった。

これは志保が持っている端末で3人の映像を記録し、それを零が
持っていたミニカー型の投射機で表示、走行させて追っ手を撒くため
の開発中の試作機である。

「……よし、あとはバレルの前にトングズラするだけだな」

「そうね。……さ、行きましょ」

「えっ!? あ、あの……」

零と志保は四系乃の背中を押すようにして、身を隠すようにしなが
らトラックの隠し場所へと向かった。

——その数分後、ホログラムにようやく気づいたASTたちが悔
しそうにしている様子は、志保が放った観測機でバッチリ記録され
ていたそう。

零が四系乃を攻略してから数週間が経過した頃……、

「——高校に精霊が転校してきた?」

志保が持ってきた情報を聞いて、零は呆然とする。

「ええ。……しかも件の彼、五河士道くんがいる来禅高校にね。これ
はどう見ても狙って近づいてきたとしか思えないわ」

「だろうな。偶然で片付けるには無理があるだろ……」

零からも同じ意見が出たところで、志保は端末に詳しい情報を表示
する。

「なになに……名前は時崎狂三。識別名はヘナイトメア。空間震とは
別に、その手で一万人以上の人間を殺害してきた最悪の精霊、か……」

「ずいぶんと物騒なことしてるわね。……趣味だなんて言い出さないかしら?」

さすがの零も、ギネス記録級の大量殺人鬼という経歴に尻込みしてしまう。

「あら、社長にしては珍しいわね。無理そうなら後回しにする?」

零の様子を気にした志保が、冗談交じりに提案する。

「……いや、これ以上余計な犠牲を出させないためにも、最優先で狙った方がいいだろ。……それよりも博士。この情報は何処からくすねてきた?」

「ん? ASTにハッキングしてコソツとね。……大丈夫。バレてないから」

しれつとぶつちやけた問題発言に、綱渡りのようなハラハラ感を覚える。

「……もう少し安全かつ合法的な情報の収集手段があればな……」

「そんな都合のいいものはないわよ。精霊の存在自体が秘匿^{ひとく}情報なんだから……」

言いかけて、志保は何かを思いついたように考え込む。

「……その顔は何か企んでる顔だな?」

それに気づいた零が、ジト目で志保を見る。

「あ、バレた? それでちよーつと相談なんだけど……」

耳打ちで志保から告げられた提案は、零の予想を裏切らないレベルの悪質な当たり屋紛いのイタズラだった。

〈ラタトスク機関〉

——最悪の精霊、〈ナイトメア〉が来禅高校に転校してきてから数日後。

士道は彼女を攻略すべく、休日を利用して町を案内する口実にデートを実行していた。

「……なあ琴里。本当にやらなきゃいけないのか？ 狂三だけじゃなくて、十香と折紙ともデートするなんて……」

ターゲットとだけデートするつもりだったはずが、さらに二人追加してトリプルブッキング状態となってしまった。

待ち合わせの間にその不安を〈フラクシナス〉にいるであろう琴里にぶつけている最中だった。

『……すまない。琴里はいま取り込み中なんだ。しばらくは私がサポートすることになった』

インカムから聞こえてきたのは厳しい司令官の叱責ではなく、解析官である令音の落ち着いた説明だった。

「れ、令音さん!?!……もしかして琴里、どこか行ってるんですか?」

『ああ、思わぬ収穫があつてね。もしかしたら四糸乃の件は何とかなるかもしれない』

「えっ? 四糸乃の? それってどういう……」

その言葉の意味を追求しようとしたところで、タイミング悪く待ち合わせの時間がきてしまう。

「……まあ、いいか。今は狂三をデレさせるのが先決だ!」

士道は気を取り直し、目の前のデートに専念することにした。

ちょうど同じ頃、士道たちがデートをしている天宮クイーンテットから少し離れた場所に、小洒落た小さなカフェがあった。

そのオープンテラスにあるテーブルのひとつで、志保が優雅にコーヒーを飲んでいた。

「……ふう、たまにはお店のコーヒーも悪くないわね……」

休日の一時を満喫しながら、志保は来たるべき時を待つ。そして……、

「——すみません。少しお時間をよろしいでしょうか？」

突然声をかけられ、志保は顔を上げる。

そこには二人の屈強な体型を持った男を引き連れた、長い金髪をした青年が立っていた。

「あら、どちら様で？」

「おっと……これは失礼。申し遅れました。わたくし、ヘフラクシナスで副司令を務めている神無月恭平と申します」

青年、神無月は一步引き、丁寧なお辞儀と共に自己紹介をする。

聞き慣れない単語に普通は疑問を持つところだが、あえて志保は気にせずに対応する。

「これは……丁寧に。……私は海原志保。社長……あなたたちが言うところのヘインキュバス」の片腕をしてるわ」

合わせるようにして、志保もカップを置いて丁寧に返す。

「やはりそうでしたか。その辺りの詳しい話をしたいと、私たちの指令がおっしゃっていただきましたので……」

急に神無月の視線が鋭くなり、後ろにいた二人の男もいつでも動けるように構える。

「従わないなら無理矢理にでも連れて行くか？見かけによらず乱暴な組織なのね？」

しかし志保は余裕を保ったまま、再びコーヒーに口を付ける。

「そんな滅相も……ございません。決してあなたにお手間を取らせることはありませんから」

神無月がそういった瞬間、二人の男を含め、その場にいた4人は上空から降り注いだ光に包まれる。

「……あらあら。ずいぶんと手際のいいことで……」

気がつくとも志保はカフェのオープンテラスではなく、見慣れない機

械的な壁に囲まれた広い部屋にいた。

どうやらあの場の空間にあったすべてを運んだようで、テーブルとイスもそのままの形で目の前にあった。

「——初めまして、でいいのかしら？……ヘインキュバス」の協力者さん？」

すると志保と向かい合うように、赤く長い髪をツインテールにし、軍服のような衣装を身に纏った、中学生程度の少女が反対側の席に座る。

「初めまして。私は五河琴里。〈ラタトスク機関〉が保有する空中艦、〈フラクシナス〉の指令を勤めているわ」

目の前の少女、琴里を呆然と見ている志保を前に、琴里が自己紹介をする。

「……………」

しかし志保は放心状態になったように、琴里のとある一ヶ所を見たまま動く気配がない。

「……どうかしたのかしら？別に私たちは危害を加えたりとかが目的にじゃなくて……」

「……70……いえ、1？……はないかしら……」

「……？……いったい何の……？」

奇妙な数字が気になった琴里は、その視線をたどっていく。

志保の視線の先にあったのは琴里が着ている服、ではなく……、

「……………ッ!？」

琴里は一瞬で顔を真っ赤にし、咄嗟に両手で胸元を隠すように覆う。

そう、志保が見ていたのは琴里の胸、バストサイズだったのだ。

「どう？71くらいで合ってるかしら？」

「しっ、失礼ね！72よ！……はっ！」

失言で正確なサイズをバラしてしまい、慌てて両手で口を塞ぐ琴里。

「あらあら。思ってたよりあったのね。……でも体型に合った可愛らしいサイズだわ」

「——そうでしょうとも！あなたにもわかりますか!?指令の素晴らしさが……!」

からかうような含み笑いをする志保に、急にテンションがおかしくなった神無月が同調するように熱弁する。

「あらまあ……見かけによらずそっちの趣味が……?」

若干引くように眉間にしわを寄せながら、志保がささつと身を引かせる。

「私は指令の未成熟な幼児体型に忠誠を誓いましたから。指令の胸の中で死ぬるなら本望——」

「——やあああああつかましいわあああああつ!!」

「へぶおおおおおつ……!」

テーブルを踏み台にして琴里が飛び上がり、渾身の蹴りが神無月の顔面に直撃する。

だがその時の神無月の表情は至極至福しのもので、恍惚とした顔で吹っ飛ばされていった。

「……ずいぶんと性格に問題のあるクルーがいるのね」

「これでも能力は優秀なの。……この性格さえなければ……」

琴里もそのことは気にしているようで、げんなりしながら足下に転がる神無月を見やる。

そこには嬉しそうに身悶みもだえる変態が、うねうねとくねりながら喜んでいた。

「……話が逸れたわね。私たちへラタトスクはあなたを歓迎するわ」
軽く咳払いをして気を取り直し、席に着きなおした琴里は改めて話題を戻す。

「改めて確認させてもらおうわ。私たちがヘインキュバスと呼んでいる彼、本当に精霊なの?」

今までの印象が嘘のような真剣さの琴里から、まさに単刀直入の質問が飛び出す。

「……一応、『YES』と言っておくわ。まだ彼のことを完全に調べ尽

くした訳じゃないけど、これだけは断定して言えるわ」

何か深い意味がありそうな志保の返答に、琴里は「そう……」と考
え込むように返す。

「……で、そういうあなたは何者なの？彼の片腕って言ったのは聞
こえたけど……」

「あら、聞いてたの？……まあ、言葉の通りの意味よ。私はある目的を
持っていて、それを協力する代わりに、私も彼に力を貸す。そういう
契約で手を組んでるの」

「契約？どんな内容かしら？私たちでも協力できることなの？」

ズバズバと踏み込む琴里に、志保は「うーん……」と悩むような仕
草をする。

「……たぶん無理ね。だってあなたたち、『不合格』だもの」

「不合格？何のこと？」

琴里がさらに踏み込むと、志保は腕に装着していた端末を操作し、
目の前に小さなウインドウを表示する。

「あなたたちの大元は……『アズガルド・エレクトロニクス』だったわ
ね？」

「……!?……あなた！どうしてそれを……!」

アズガルドがヘラタトスク機関の母体であるという事実は、最高
幹部連である円卓会議ラウンズや、一部の責任者にしか知られていないはず。

それを何故、どうやって知ったのか。琴里の思考は混乱でフリーズ
してしまう。

「どうせしつこく聞いてくると思うから、秘密の情報網とだけ答えて
おくわ。……そろそろ質問に答えてばかりで飽きてきちゃったわ。
どうせだから、こっちの質問にも答えてくれるかしら？」

「え……？」

停止した琴里の額を突きながら志保が提案する。

話をはぐらかされる形になってしまったが、彼女から積極的にこち
らに興味を持ってくれれば、その分今後の交渉もしやすくなるかもし
れない。琴里はそう考えて小さく頷く。

「ありがとね。……まず一つ目。この写真を見て」

志保は端末を操作し、琴里の目の前に小さなウインドウを表示する。

そこには集合写真と思われる、白衣を着た大人が十数人近く写っていた。

「この集合写真がどうかしたの？白衣を着てるところを見ると、科学者のようだけれど……」

「私が見て欲しいのはこの真ん中のハゲ。このハゲに見覚えはないかしら？」

志保が指をさしたのは、中央に写っている高齢の男性。

確かに頭周りにしか毛髪がなく、仙人をイメージさせるような見た目をしていた。

「……残念だけど、見たことないわ。もしかしてこの人を探して——」

人探し程度なら簡単に恩が売れるはず。そう思ってさらに深く追求しようとした。

……だが、まるで別人のように殺気を放つ彼女を見て、それ以上の言葉が出なくなってしまった。

「……ええ。私のお姉ちゃんのお仇なの。だから必ず見つけ出して、確実に息の根を止める。それが私の目的よ」

冷酷に言い放たれたその決意に、周囲にいた人間は全身が凍り付いたような感覚を覚える。

それほどまでに琴里たちは、目の前にいる女性に恐怖を覚えた。

「……つと、ごめんなさいね。つまらない身の上話しちゃって。……それじゃあ二つ目の質問。今度はこれを見て」

続けて表示されたのは、密林地帯のような森の中。

今度はビデオカメラで撮影された映像のようで、ゆっくりと視点が横に移動していた。

「……今度はどこの映像かしら？」

見覚えのない木々に、琴里は質問を投げかける。

「10年前に作った私たちの研究所。そこに付けてた監視カメラの映像よ。これは今から5年前のものね。……見て欲しいのはここから

よ」

志保が指摘すると、密林の奥から砲弾のような攻撃が容赦なくカメラが取り付けられているであろう建物を攻撃する。

壊滅して侵入経路が確保されたのを見計らい、奥から何人ものウィザード魔術師が押し寄せてきた。

「……ずいぶんと乱暴な真似をするじゃない。何処の連中？」

「どこかまではわからなかったの。……けど、リーダー格の顔はバツチリと記録してたわ。……ほら」

志保が映像を一時停止し、そこに映っていた男を指す。

「………ッ!？」

それを見た瞬間、琴里は大きく目を見開く。

5年前なので多少の変化はあったが、間違いなく琴里の知っている

『あの人物』だった。

「……その顔は知ってるってことね？」

「………」

志保の指摘に、琴里は返す言葉をなくし、小さく俯く。

「まあいいわ。それじゃあ最後の質問、いいかしら？」

気を取り直し、入れ替わるように元気がなくなってきた琴里に確認する。

「……ええ。私に答えられる範囲なら……」

これ以上変な突っ込みを入れられないよう、琴里は釘を刺す形で制限を付ける。

こほん、と小さく咳払いをし、志保は端末のウィンドウを表示する。

それを見た志保は怪しい笑みを浮かべながら、琴里に顔を寄せて言葉を発した。

「……—あなたはどうかやって精霊スピリットになったのかしら？へイフリートちゃん？」

『………ッ!？』

この問いかけには、その場にいた全員が驚愕した。

〈フラクシナス〉どころか〈ラタトスク〉内でも重要なトップシークレット極秘情報をな

ぜ知っているのか。

「……あ、あなた本当に何者なの……!?!」

「だから言ったでしょ? 私はヘインキュバス<の片腕だつて。……それじゃあそろそろお暇すまさせてもらおうかしら? それとこのテーブルとイス、それにコーヒー代はお願いね?」

そう言つて手をヒラヒラさせながら、志保はイスから立ち上がる。

「……!?!……悪いけど、あなたをこのまま帰すわけにはいかないわね。あなたにはヘインキュバス<との交渉材料になつてもらおうわ。神無月!」

「はっ!」

琴里の合図とともに、神無月とそのお供が志保を取り囲む。

「あらあら。やっぱりこうなつたわね。……けどこつちもやることがたくさんあるの」

そう言つた瞬間、志保の額に水晶のような球体が出現する。

「……!?!……それは……?」

何が起こるかわからない状況に身構える神無月たち。

するとその球体が眩い光を放ち、それが志保を包み込んだ。

「な、何が起こつてるの……!?!」

困惑する琴里たちを前に、光はものの数秒で消失する。

同時に志保の姿は影も形もなくなつていた。

「なっ!?!どうなつてるの……!?!」

「ブリッジ! 大至急で確認を!」

琴里が周囲を見回している間に、神無月がブリッジに連絡を取る。

「……どうやら一筋縄じゃないみたいね。……海原志保……!」

ガリツ!と取り出した棒付きキャンディーを苛立ちをぶつけるように噛み砕く琴里。

それからどれだけ搜索しても志保を見つけることができず、どうやってヘフラクシナス<から脱出したのかもわかっていない。

しかも重要な情報を握られるという散々な結果を残し、志保の誘拐はヘラタトスク<に苦い敗北感を与える形に終わった。

動き出す『悪夢』

士道がトリプルデートをした日の夜、零は四糸乃を寝かしつけ、今日の出来事から得た情報を調べていた。

「……やっぱりないな……」

解析結果を見て、零は大きく首を傾げる。

観測機が記録した映像では、間違いなくへナイトメアは魔術師に殺されていた。

だが次の日には何事もなかったかのように、普段通りの生活を送っている。

A S Tらは再生能力のような力があるのではないかと見ているようだが、零はそう思わない。

一人もの人間を殺さなければならぬことに関係があるような、もっと大規模な力の気配を感じていた。

「……はあ。やっぱり博士がいなくて辛いな……」

大きなため息を吐きながら、零は大きく伸びをする。

「——あら、私がいなくて大変そうね？社長」

上体を反らした先に、志保が機嫌良さそうな笑みで零を見下ろしていた。

「ああ……おかえり、博士。収穫はあった？」

「ええ。宝の山はがっぽり頂いてきたわ。使えそうな情報は端末に送っておくから、後で見といてね。……それで何を悩んでたの？」

志保がパソコンを覗き込み、流し読みのようなペースでその情報に目を通していく。

「……なるほど。これまた変わった娘ね。何か特別な能力があるのかしら？」

「俺もそう睨んでる。……ただ霊結晶がないのが引つ掛かるんだよね……」

そう、精霊の力の源である霊結晶。

殺されたへナイトメアの死体にはその反応がなかった。

後から抜き取られたわけではない。最初から痕跡すらなかったのだ。

だがその真実を説明できるだけの答えらしい答えが見当たらない。完全に零は両手を上げた。

「……これはもう少し様子を見た方が良さそうね」

「やっぱりそうなるか……」

予想通りの答えに、零は途方に暮れる。

視線をデスクに落としたところで、昼頃に書き留めておいたメモ書きが目に入った。

「……そういえば『新天地』から連絡があったんだ。〈オルトロス〉10機が完成したから、朝にはこっちに送るってさ」

「あら、予定より早かったわね。工場長、無理してなければいいけど……」

志保は仕事熱心で職人魂全開の工場長が、従業員たちをこき使いたげないか心配する。

「次会ったら釘刺しとかないな。……今日はこの辺にしとくか」

「そうね。私もはしやぎすぎて疲れたし。……シャワー浴びて寝るわ」

志保は大きなあくびをひとつすると、伸びをしながらオフィスを後にする。

続くようにして零もオフィスを後にした頃には、もう日付を跨いでいたのだった。

それから次の日、創世重工の社屋に大型のコンテナが運び込まれていた。

「……よし、これで全部だな」

コンテナの数は全部で10。それを確認した零はコンテナを運んできたトレーラーを見送るように手を振る。

するとトレーラーの目の前の空間にジッパーのようなものが出現し、ゆっくりと音を立てて開く。

その先にある空間に向けて、トレーラーは何事もないように発車していった。

「それじゃあ、さっそく起動するわね」

零の隣に立っていた志保が、素早い手つきで端末を操作する。

『あれれ〜？こんなところで何やってるの〜？』

「お仕事、ですか……？」

そこへ四糸乃が顔を出し、『よしのん』が不思議そうにコンテナを眺める。

「おお、いいところに来たな。これからすごいものを見せてやる」

『ええ〜？なにになに〜？』

「すごいもの……？」

ただただ首を傾げる『よしのん』と四糸乃。

すると10のコンテナがすべて同時に展開し、その中にいたもの――

――10機の〈オルトロス〉が姿を現した。

『わあ〜！〈オルトロス〉くんが10人も!?すごい！』

「兄弟、ですか……？」

「どうだ？驚いたか？計11機の〈オルトロス〉だ」

盛大に驚く『よしのん』と四糸乃を見て、満足そうに笑う零。

「これで戦力が大幅にアップするわね。それじゃあ行きましようか」

志保が端末で指示を出すと、10機の〈オルトロス〉たちはゾロゾ

ロとトラックのコンテナ部に乗り込む。

「……よし、それじゃあ監視に専念するか」

全員が乗り込んだのを確認すると、零も颯爽と助手席に搭乗する。

「四糸乃ちゃんは社員のみんなの言うことを聞いて、いい娘でお留守番しててね？」

「……は、はいっ！」

『オ・シ・ゴ・ト、頑張つてね〜♪』

四糸乃の頭を優しく撫で、志保が運転席に乗り込む。

そしてハッチが自動で開き、トラックは発車した。

「——フフ。まさかこんなところに隠れていたとはな……」
その様子を建物の影から見ていた者がいたことは、この時の零たちには知る由もなかつた。

トラックを走らせること数十分。向かう先は「ナイトメア」が通う来禅高校。

今日は平日である以上、必ずそこに現れると零たちは睨んでいた。「……とは言っても、急に大きな動きをするなんてことはないよな？」
「私もそう思うわ。今日じゃなきゃいけない事情なんて——」

目的地のすぐ近くにトラックを停車し、そこから見えるであろう来禅高校を見上げた。

——そこには漆黒のドームのようなものに覆われた来禅高校の校舎があつた。

「……あつた」

二人の台詞が綺麗にハモる。

霊力の感知を報せるセンサーが反応していることから、あれが精霊の仕業であることはすぐにわかつた。

「となるとあれは広域結界か。ずいぶんとヤバいことになってるな」
「この時間だとまだ生徒はたくさんいるでしょうに……」

二人は早急に端末を操作し、「オルトロス」に機動命令を出す。

するとコンテナから飛び出した「オルトロス」は不可視迷彩を展開し、所定位置に向かつていった。

「よし、あとはターゲットの所在だな……」

零は観測機を出し、この事態の元凶である「ナイトメア」を探索する。

「……あ、いた」

——思っていたよりも早く見つかった。

目標は校舎の屋上で霊装を展開し、何かを待っているように立っていた。

「何を待ってるのかしら……?」

「ひとつしかないだろ? わざわざ生徒としてこの学校に来た理由――」

零の解答を代弁するように、屋上の扉がゆっくりと開く。

そこから現れたのは、昨日彼女とデートした件の少年、土道だった。

「……さっそくお出ましか。さてさて、大量殺人鬼の精霊を相手に、どんな口説き方をするのか……」

お手並み拝見。とばかりに落ち着いた姿勢を見せる零。

精霊相手に正面から挑むような無謀な真似はしない。事前の準備をしつかり済ませ、理想のタイミングを見つけて挑む。それが零のやり方だった。

「社長。へオルトロスへの配置が完了したわ。好きなタイミングで突入できるわよ」

「りょーかい。……あとはかつ攫い時を待つかな」

堂々と構えながら、土道がどう動くのかを見極めようとする。すると……、

――ウ　　ウ　　ウ　　ウ

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

突然、空間震警報が甲高かんだかく鳴り響いた。

「空間震警報!? まさか……」

「どうやら、自分の意思で引き起こせるみたいね。……確か社長もできたんじゃない?」

「ああ。……けど長いことやってないからな……」

まるで自転車やピアノ程度の感覚で言っただけの零。

その間に土道が何かを言ったと思うと、屋上のフェンスを上げる。そしてそのまま仰向けに倒れるように、校舎から飛び降りた。

「……!? ……マジか……!?」

「ずいぶんと度胸あるのね……」

さすがの二人も土道の死を予感する。

しかし途中で〈ヘナイトメア〉が助け出し、自殺は阻止された。

「助けた？それとも死なれたら困る事情でもあるのか？」

「でしょうね。少なくとも彼の命をただ奪うだけが目的じゃないのはわかかったわ」

殺すのが目的なら、そのチャンスはいくらでもあったはず。

なのにそうしなかったのは、それ以外の目的があったから。

それを利用した土道は自分を人質にし、彼女との交渉の材料にしたのだ。

その証拠に〈ヘナイトメア〉は校舎を覆っていた広域結界を解除し、空間震も止めた。

「あらら。ずいぶんとすんなりね……」

「これで本当に終わりか？そんなことはないと思うけどな……」

疑心暗鬼な二人が見守る中、土道は〈ヘナイトメア〉に手を差し出す。それに対し彼女は戸惑いを見せながらも手を伸ばした。

——しかしその彼女を貫くように、身体の真ん中から腕が出現した。

「……!?……あれは……!」

見覚えのある腕に、零の思考が一気に加速する。

あれは土道が〈ヘナイトメア〉とデートをしていた頃、彼女の殺人を見て逃げようとする土道を、影から飛び出した無数の腕が捕らえた。

そして霊装が消失し、事切れた彼女を見下ろすように、すぐ側にもうひとりの〈ヘナイトメア〉が出現した。

「……なるほど。これが殺されても死なないからくりか」

「今まで殺されたのは、彼女そっくりの分身か何か。だからどれだけ殺されても別の個体が現れば、誰もがすぐに蘇ったと勘違いする。こういうことね」

謎が解けてすっきりした二人が見ている前で、無数の腕に拘束された土道に彼女の狂気が迫る。

だが寸前のところで乱入者が横槍を入れ、彼女の腕が宙を舞った。

「……あ、また来たか……」

乱入者を見て、零は面倒くさそうな表情をする。

青く長い髪をポニーテールにし、左目の下の泣き黒子ほくろが特徴の少女、崇宮真那たかみやまなだった。

彼女は青と白を基調としたワイヤリングスーツを身に纏い、レイザーブレイドを構え、土道を守るようにヘナイトメアに立ちはだかった。

「あの娘がDEMから派遣された魔術師ウイザードね。なかなか可愛い娘じゃない」

「けど困ったな。魔術師相手じゃヘオルトロスじゃ不利だ……」

感心するように真那を眺める志保の隣で、零が不安そうに戦場と化した屋上を見やる。

真那は分身体とはいえ、ヘナイトメアを何人も始末してきた腕利きの魔術師ウイザード。

その戦闘力はASTとは比べ物にならず、もしかしたら精霊を殺せるのではという声も上がっている程だった。

「となるとオリジナルの彼女がどれ程の強さなのが鍵ね。せめて紙一重くらいで負けてくれると嬉しいんだけど……」

志保が理想を口にしてしていると、ヘナイトメアは時計盤を模した自身の天使を顕現。

その『IV』の部分から出現した黒い靄もやのような物が彼女の持つ古式銃に吸収され、自身の頭部を撃ち抜く。

すると時間が巻き戻ったように切断された腕が宙を舞い、何事もなかったかのように彼女の腕が元通りになった。

「再生能力?!いや……」

『時間を巻き戻した』みたいね。大した能力だわ……」

二人が驚きを露わにしている中、今度は『I』の部分から出たものを銃に装填、またしても自身の頭部を撃ち抜く。

すると一瞬で真那の近くに接近し、隙を突くように攻撃した。

「今度は『自分の時間を加速させる』能力ってか。ずいぶん汎用性高いな……」

「ええ。正面から挑まなくて正解だったわね」

もし不用意に攻め込んでいたら。そう考えると背筋がゾツとする。やはり土道に先行を譲り、ひとまず様子を見るのは悪くない。零はそう考えた。

真那を追い詰め始めたところで、今度は『Ⅶ』の数字から力を受け、それを真那に向けて放つ。

すると真那の動きがピタリと止まり、彼女だけの時間が静止したように動かなくなった。

『対象の時間停止』か。本当に怖いな……」

「ますます出にくくなってきたわね。……このままじゃ弱らせるどころかやられちゃいそうな空気じゃない？」

やはり思った通りにはいかない。現実の厳しさに打ちひしがれそうになる零。

そんな状況に水を差すように、限定的な霊装を身に纏った十香と、ワイヤリングスーツを装着した折紙が飛び込んできた。

「お、援軍か。これで先が読めなくなってきたな」

「……だと、いいんだけどね……」

若干の希望が見えてきたかと思っただが、やはり現実は甘くなかった。

今度は影の中から今まで生み出した分身体を大量に呼び出し、数の暴力で圧倒し始めた。

その数は10や20どころではなく、屋上全体を包囲しかねない数の「ナイトメア」が形成を完全に逆転させてしまった。

「まだあんなにいたのか……」

「影の中から出てきたわ。時間だけじゃなくて、影に関係する能力もあるみたいね……」

この状況にはさすがの志保も険しい表情を見せ、零も自分が戦闘する可能性を考慮する。

そうしている間に十香、折紙、真那はことごとく拘束され、土道も取り押さえられる形になった。

そして勝ち誇ったように再び空間震を発生させ、学校全体を吹き飛ばそうとする。

「……………やばい！〈オルトロス〉！あれを——」

「——待って！近くに別の霊力反応！これは…………」

志保が零を止め、モニターを見せる。

すると空間震は発生直前で消滅し、〈ナイトメア〉の暴拳は不発に終わった。

「……………何が…………」

「助けが来たのよ。それもとびきりのレアキャラが…………」

理解が追いつかない零に、志保がモニターの一角を見せる。

そこには紅く長い髪をなびかせ、和装のような衣装を身に纏い、周
囲に炎を携えた少女が浮いていた。

「精霊？それも炎の…………まさか」

零には心当たりがあった。昨日、志保が持ち帰ったデータの中に。

5年前に確認されて以来、ずっと行方を眩ましていた『炎の精霊』。

まるで士道を助けるために現れたかのように、大型の大斧たいふのような
天使を顕現した。

「ようやく表舞台に顔を出したわね。五河琴里ちゃん。——いえ、

〈イフリート〉ちゃん」

『時』と『炎』の対峙

「……あれが、ヘイフリート」……」

激しい炎で真っ赤に染まった空を見上げ、零は呆然とする。

中学生程度の幼さが残る見た目でありながら、何故かそれ故に美しいと感じてしまう。

零には幼女しか愛せない趣味があるわけではないが、それを差し引いても美しいと感じさせてしまうような魅力が彼女にはあった。

「あらら〜？ひよつとして惚れちゃった？……ま、わからなくもないわね。あの娘、とつても可愛いから」

「そうじゃない。どうしてこのタイミングで出てきたのか気になっただけだ。……まあ、現状を見れば出て来ざるを得ないんだろうけど……」

もしヘラタトスクに戦力と呼べる戦闘員がいなかったとしたら、精霊という強力な力を持った司令官自らが出向いたのも納得できる。

あるいはこの事態を收拾できるのが自分だけだと判断したのか。その答えは本人にしかわからない。

「……ここは見守りましょう。お兄さんを助けるために、司令官自ら飛び出してきた勇姿を」

「ああ……」

運が良ければヘナイトメアかヘイフリート、どちらか弱った方を捕獲するチャンスが見えてくるはず。

そうでなくとも、5年間もその姿を見せることがなかったヘイフリート、その能力を知る絶好の機会。どう転んでも零に損はなかった。

零たちが見守る中、ヘイフリートは炎を纏った戦斧を振るい、土道を拘束していたヘナイトメアの分身体を薙ぎ払う。

ヘナイトメアも彼女を強敵と理解したのか、標的をヘイフリートに専念する。

そして一気に勝負を付けようと、ヘナイトメアは真那を止めた『VII』

の弾丸でヘイフリートへの動きを停止。そして分身体による一斉射撃で、彼女は流血と共に倒れ伏した。

「やっぱりあの力は精霊にも有効か。ヘナイトメア。……やっぱり他の精霊とは……！」

「待って。まだ終わってないわ」

零もヘイフリートへの死を予感して飛び出そうとしたが、それを志保が止める。

志保が見守るモニター上では、零も目を疑うような光景が映っていた。

倒れたヘイフリートへの傷口に炎が灯り、傷口を舐めるように焼いていく。

すると数秒で全身の傷が何事もなかったかのように完治し、ヘイフリートへはむくりと立ち上がった。

「再生能力!? しかも致命傷もののダメージを数秒で……！」

さすがの零も予想外だったのか、モニターを見たまま硬直してしま

う。「そう。あれがあの子の娘の能力。ヘラタトスクへのデータの中にあつたわ。……たぶん霊結晶セファイラを破壊されない限りはどんな攻撃でも彼女を再起不能にするのは不可能だと思っわ」

だとしたら余計な横槍は敵を増やす結果になっていた。焦って飛び出さなくて良かったと、心の底から志保に感謝した零だった。

ただ攻撃するだけでは勝てないと悟ったヘナイトメアへは、対象を加速させる『I』の力を分身体の何人かに放ち、そして自身にもそれを使用した。

すると分身体は瞬時に移動を始め、その意図を察知したヘイフリートへは舌打ちしながら土道の元に駆け寄った。

そしたら案の定、土道の身柄を確保しようと思っ影から分身体が飛び出し、その直前でヘイフリートへが彼を蹴り飛ばす。

代わりに無数の分身体に押さえつけられる形となってしまったが、そこは戦斧に炎を纏わせ、広範囲に薙ぎ払って撃退した。

「……本当に凄いパワーね。あの小さな身体のどこに詰まってるのか

しらす？」

「博士。緊張感が削がれるからセクハラトークは後にしてくれ……」

志保の悪い癖に零はげんりしながら突っ込みを入れる。

〈ナイトメア〉は『IV』の力で時間を戻すと、より強力な力を使おうと時計盤の天使を呼び出す。

それを阻止しようとしたヘイフリートだったが、何故か急に苦しみだし、その場に蹲うずくまってしまふ。

「……う……どうしたんだ？まさかスタミナ切れなんてことは……」

「いえ、もつとヤバいことになったわ。……彼女、しばらく力を使い続けると暴走するみたいなの。破壊衝動みたいなのに意識を奪われて、人が変わったみたい凶暴化する。それが怖いから力を使いたがらないの」

志保の説明を聞いて、目撃情報がほとんどない理由を零は察する。

非常に強力だが、それ相応の代償を伴う。まさに諸刃の剣。

そんなものを使い続ければ、間違いなく向かう先は破滅。そんなものは誰だって望んでいるはずがない。

それを証明するかのように、ヘイフリートは戦斧を大砲のような形状に変化させ、その砲身に炎のエネルギーを蓄積させる。

これはまずいと思ったのか、〈ナイトメア〉は分身体を前面に展開。だがヘイフリートはの天使から発射された熱線は、その直線上にあつたものすべてを易々と消し飛ばした。

熱線が通り過ぎた後には、分身体すべてを消し飛ばされ、時計盤の一部を抉り取られ、戦意を喪失してへたり込む〈ナイトメア〉の姿しかなかった。

「わお。……とんでもない威力ね。さすがは精霊。と言ったところかしらす？」

「けど暴走してるんならまずいんじゃないか？このままじゃトドメ指しかねない空気だ」

零が指し示した先には凶悪な笑みを浮かべながら〈ナイトメア〉を煽り、2発目のエネルギーの充電を開始するヘイフリートの姿があった。

士道が側に寄って必死に説得するが、その言葉すら耳に入っている様子がなかった。

「これはよろしくないわね。……〈オルトロス〉」

〈ナイトメア〉を殺されかねない状況に、志保は〈オルトロス〉に指示を出す。

その間に士道が〈ナイトメア〉を庇うように立ちはだかり、必殺の一撃を発射のと同じタイミングで〈エイフリート〉の意識が戻った。

……しかし発射された砲撃は止めることができず、まっすぐ〈ナイトメア〉の前に立つ士道に向かっていった。

——しかし、その直前を『何か』が通過し、砲撃は士道の直前で削り取られたように消え、残りの余波はその周囲を逸れるように外れていった。

だが衝撃は止まることなく、士道を吹き飛ばして気を失わせる。

それを不思議に思いながらも、〈ナイトメア〉はそのどさくさに紛れてその場から立ち去った。

「……！……チャンスだ！〈オルトロス〉！総員、逃げた〈ナイトメア〉を追跡！捕獲しろ！」

今こそ動くとき。そう睨んだ零が、〈オルトロス〉たちに指示を出す。

「それじゃあ私たちもぼちぼち行きましょうか」

「ああ。ここからは俺の仕事だ」

二人はトラックから降り、端末で〈ナイトメア〉の反応を追いながら、ゆったりとした足取りで学校裏の森林地帯へと足を踏み入れた。

——来禅高校から数km離れた森の中。その木々のふもとにできた影から、ゆっくりと人の形をした『何か』が這い出てくる。

血のような赤と、影のような黒を基調としたドレスに身を包み、長く黒い髪を左右非対称のツインテールにした精霊——〈ナイトメア〉。

彼女はヘイフリートとの戦闘から何とか離脱し、ここまで逃げてきたのだ。

「はあ、はあ……まさか、わたくしがここまで、追い詰められるなんて……」

近くにあつた巨木に背を預けながら、ヘナイトメアは自身の非力さを悔やむ。

分身体のほぼすべてが倒され、天使を使うための時間もほとんど消費してしまった。

五河士道を喰らい、その力を自分のものにする。ただそれだけだったはずなのに……。

「……仕切り直し、ですわね。もっと時間を蓄えないと——」

——ガサツ！
近くの茂みから、僅かな物音が聞こえる。

「……!?……誰かいますの!?!」
咄嗟にヘナイトメアは天使の一部である古式銃をそちらに向ける。もしかしたらここまで追いかけてきたのか。弱り切っている状態で、自身に余裕がないヘナイトメアは過敏に反応する。

しかし数秒後、茂みから飛び出した鳥が、バサバサと羽ばたいて飛んでいく。

それを見たヘナイトメアは、一気に肩の力が抜けるような感覚を覚えた。

「……ぷつ、あはははははっ！わたくしとしたことが、つつい神経質に——」

——ゴウンツ！

直後、その直線上から重低音のような音が響き、見えない『何か』がヘナイトメアに迫る。

「……!?……ッ！」

それに反応することができなかったヘナイトメアは、避ける間もなく直撃する。

「かはっ……!?」

まるで見えない車にでも跳ね飛ばされたかのような衝撃を受け、
〈ナイトメア〉の身体は背後の巨木に叩き付けられた。

「……ッ！……な、何が……?」

朦朧もうちろうとする意識で正面を見やると、茂みの奥から紅い二つの光が見える。

それがゆつくりと近づいていき、1機の〈オルトロス〉が姿を現した。

「あ……い……あ……」

それを最後に〈ナイトメア〉の意識は途切れ、力なくその場に倒れた。

すると背後からも別の〈オルトロス〉が出現し、倒れ伏している〈ナイトメア〉の側に立つ。

同時に胸部装甲を展開し、彼女の足下の影に向かって、見えない衝撃波のようなものを撃ち込んだ。

〈オルトロス〉が装備している反霊力波には、二通りのバリエーションが存在する。

まず精霊の霊力を帯びた攻撃を防ぐ防御型。

そして反霊力波を衝撃波のようにして発射する攻撃型。

これを受けた精霊は霊力を一時的に無効にされ、セフィラ霊結晶に不具合を起こさせることができるのだ。

〈ナイトメア〉及び影に隠れているであろう分身体を無力化すると、

〈オルトロス〉はその報告をすべく、現状の情報を零の端末に送った。

「——よし、首尾は万全だな」

その数分後、〈オルトロス〉からの反応を受け、零と志保が悠々とやってきた。

そこには既に11機の〈オルトロス〉が勢揃いしており、〈ナイトメア〉が逃げないように見張りをしているようだった。

「ご苦労様。……さすがだな。うちの〈オルトロス〉は」

「当然よ。私たちが長年の研究で完成させた自信作だもの。……それ

「じゃあ、手早く済ませましようか」

志保が合図すると、2機の〈オルトロス〉がヘナイトメア〉の両サイドに立つ。

それぞれで腕を掴むと、彼女を宙吊りにするように持ち上げ、そのまま零の前まで運んだ。

「……よし、ここからは俺のターンだ」

零はヘナイトメア〉に向かって右手をかざすと、精霊を隷属させるための霊力を放出する。

「……んっ、うあ……」

するとヘナイトメア〉の口から、うめき声のような音が洩れ始める。「なに、怖がることはない。すぐに良くなるさ」

優しく語りかけながら、零は徐々に送り込む霊力を増やしていく。

「……ー……んう、はああ……あつ、くう……」

すると四糸乃の時よりも吸収のペースが早く、空の器同然のヘナイトメア〉にスムーズに霊力が流れ込んでいくのがわかる。

今の意識もなく、弱り切ったヘナイトメア〉には、何か得体の知れない力に抵抗するだけの余裕はもはやない。

その証拠に彼女の身体から、少しずつ黒い霊力が滲み出てきているのが見て取れた。

「これも反霊力波で弱ってるおかげだな。それじゃあ一気に……」

短時間で勝負を決めようと、零は一気に大量の霊力を送り込んだ。

「……ひいっ！くううっ……っああっ!?……っはああ……ッ！」

次第にヘナイトメア〉の身悶えるような呻き声は強くなっていき、彼女を覆う霊力のオーラもその色を濃くしていく。

そして開始から1分弱で彼女の反応は弱々しくなり、全身を夜の闇が覆い尽くしているかのようなオーラに包まれた。

「……よし、頃合いだな」

零はヘナイトメア〉にかざした右手でそつと彼女の顎に触れ、軽く持ち上げる。

そしてゆつくりと顔を寄せると、そのまま唇を重ねた。

「ん——」

すると一瞬だけ覚醒した彼女は大きく目を見開き、すぐに意識が途切れたように力が抜け、そのまま零と一緒に消失した。^{ロスト}

「……これで二人目。一時はどうなることかと思っただわ……」

その様子を一部始終見届けた志保は、一息ついてからへオルトロスにこの場所の番を言いつける。

くくくくくくくくくくくく

すると彼女のポケットから、携帯の着信音が聞こえてきた。

「あら？誰からかしら？」

志保は手早く携帯を取り出すと、着信先を見る。

相手が従業員のひとりであることを確認すると、すぐに着信に出た。

「もしもし。どうかしたの？——えっ？」

〈ナイトメア〉

——隣界。その無に支配されたような何もない空間に、二人の人影があった。

「はあ……はあ……」

「ずいぶんと粘るじゃないか。……けど、それもどこまで保つかな？」
地面に座り込んだ零に背中を預けるようにして、〈ナイトメア〉が魔うまされていくように荒い呼吸をしている。

ここに来てからすぐに堕ちた四糸乃とは違い、彼女はもう10分弱はこうして抵抗を続けていた。

「こんな……ことで、わたくしは……わたくしには……成さなければ、ならないことが……」

果たさなければならぬ悲願。この男に堕ちたら、この誘惑に屈したら、それが果たせなくなってしまうかも知れない。

そんな恐怖が折れる寸前の彼女の心を支えていたのだ。

「……う……それがすぐに堕ちない理由か。それなら……」

零は左手で自身の目を覆うと、自身の霊力を解放する。

「〈淫タブリ導リス賢者〉——【盗スキャン視】」

ゆっくりと手を退けると、零の瞳はまるですべてを見透かすような輝きを放っている。

そしてゆっくりとその視線を〈ナイトメア〉に向ける。

するとその目を介して、零にある情報が流れ込んできた。

「……そうか。そんな目的があったのか……」

すべてを理解した零は、ゆっくりと目を閉じ、【盗スキャン視】を解除する。

その目で見えた対象が今考えている『思考』、そして今まで体験した『記憶』を覗き見る。それが〈淫タブリ導リス賢者〉の持つ能力のひとつである【盗スキャン視】の力だった。

これにより知ることができた。なぜ彼女が大勢の人間の命を奪い、士道を狙ったのかを。

許されることではないのはわかっている。しかし、どんなことをしても果たさなければならぬ悲願があった。

だが彼女にどれだけの事情があろうと、零もこれだけは譲るわけにはいかない。

そこで零は妙案を思いつき、そつと彼女の耳元に顔を寄せる。そして『ある提案』を彼女に持ちかけた。

「…………ツ!?!」

それを聞いたヘナイトメアが大きく目を見開く。

同時にその影響で気が緩んだのか、彼女を蝕む霊力と霊結晶セファイラからの誘惑が挟み撃ちで彼女を墮落へと引き込もうとする。

「…………本当ですの?それは…………?」

「ああ、約束する。だから俺のものになれ」

「………………………」

その提案には何の確認もないし、彼が約束を守るという保証は何処にもない。

だが彼女の霊結晶セファイラがその男に従え。身も心も委ねろ。と、甘い誘惑を囁き、流れ込んでくる彼の霊力も心地良く、虜になってしまいうさだ。

「…………わ、わたくし、は…………」

振り返り、虚ろな瞳で零を見るヘナイトメア。

途端に全身を覆っていた霊力が、まるで点滅しているように強弱を繰り返し始める。

これが精霊自身も墮ちた証だと見た零は、そつと彼女と唇を重ねた。

「ん…………」

すると彼女を覆っていた霊力は二人の口の中に収束し、精霊が零に隷属した証、隷属結晶スレイラが精製される。

零はそれを舌で手繰り寄せ、自身の喉へと導く。

その直後、ヘナイトメアの首を覆うように、隷属の証である紋様が刻まれた。

「……これでお前は俺のものだ。——狂三」

「……はい。ご主人様。……約束、ちゃんと守ってくださいませよう。」

「ああ。当たり前だろ？」

そつと胸に顔を埋める狂三を、零は優しく抱き留める。

「ああ……ご主人様。ご主人様……」

まるで主人に懐く猫のように、零に甘える狂三。

ずっと我慢していた反動のようなものだろう。零はそう考えて狂

三の頭を優しく撫でる。

こうして人々の命が脅かされる『悪夢』は、静かに幕を閉じた。

零と狂三が消失してから24時間後、同じ場所で空間震が発生する。

しかし空間震警報は鳴っておらず、誰もその空間震が起きていることに気付いてすらいなかった。

その空間震が発生している範囲内を、大規模な随意領域テリトリイのようなものが覆っており、その外側からへオルトロスがそれを守るように展開していた。

これは零が精霊を隷属させ、現界するときが発生する何も破壊しない空間震、名付けて無害空間震の発生を悟られなくする特殊な随意領域テリトリイ。

この中で無害空間震が発生しても、誰も反応を感知することができず、誰も狂三が零の手に落ちた事実すら知ることができないのだ。

無害空間震が発生した直後、その中心には抱き合ってキスをしている零と狂三の姿がある。

「……これからよろしくな。狂三」

「ふふ。……はい。ご主人様。誠心誠意、お仕えさせていただきますわ」

二人はそつと唇を離すと、狂三が愛おしそうに零を見つめる。

すると背後から気配を感じ、零はすぐに振り返る。

「——社長」

そこから現れたのは、いつにもなく浮かない表情の志保だった。
「おお、博士。この通り狂三は墮としたぞ」

「……ご主人様。こちらの方は……？」

志保と初対面の狂三は、警戒しながら零の顔色をうかがう。

「ああ、この人は俺の相棒だ。ちゃんと言うことを聞くんだぞ？」

「そう、ですの？……わかりました。よろしくお願いしますわ」

敵ではないと理解した狂三は、そつと握手を求めて右手を差し出す。

「ええ。海原志保よ。博士って呼んで。……っ」

握手に応じた志保だったが、その表所はどこか暗いものを感じる。

「……う……何かあったのか？」

零が思い切つて問いかけると、志保は重々しく口を開いた。

「……実は、創世重工の新社屋が——魔術師ウイザードの一団に襲撃されたの」

「えっ……!？」

それを聞いた瞬間、零の表情が凍り付いた。

「従業員のみんなは無事よ。もちろん四糸乃ちゃんも。察知したのが早くてすぐに『新天地』に避難したから、怪我人は一人も出てないわ。

……けど、社屋は完全に制圧されて、今でも魔術師ウイザードたちが屯たむろしてるわ」

「……………」

ギリツ！と零の拳が出血せんがばかりの力で握られる。

「ご、ご主人様……う？」

その様子を心配してか、狂三が心配そうに零を見つめる。

このときの零の表情は、夜叉か羅刹のような殺気を放っていた。

「……博士。そいつらけしかけた奴の情報はあるか？」

「ええ。詳しいことは『新天地』に戻ってからにしましょう。ここだと

誰かに見られる可能性があるわ」

いつまでも随意領域テリトリーを展開しては、間違ひなく誰かがそれに気づく危険がある。そうなつては隠す意味がなくなつてしまうかもしれない。

「……そうだな。戻るか。——『新天地』に」

気を取り直した零が指をパチンと鳴らすと、目の前にジッパーのよ

うなものが出現する。

そしてそれがゆつくりと開くと、その中には別の景色が広がっていた。

「まあ……これもご主人様の力ですの？」

その光景を初めて見たであろう狂三が驚きの声を漏らす。

「——ようこそ、狂三。ここが俺たちの最重要拠点にして安住の地

——『新天地』だ」

『新天地』へ――

創世重工。新社屋跡地。

「――バルティン郷。内部の調査が終了しましたが、データはほぼすべて持ち去られていたようです」

「……チツ！無駄に察しのいい奴だ。〈ヘインキュバス〉……」
魔術師からの報告を聞き、初老の男性は吸っていた煙草を足下に捨てる。

その目の前には爆撃でもあったかのように、完全に瓦礫の山と化した建物があつた。

「……まあいい。これだけ痛い目に遭わせてやったのだ。少しは大人しくなるだろう。……役に立ちそうなものは可能な限り拾い集めろ！」

欲深そうな笑みを浮かべると、男性は魔術師ウイザードに指示を出す。

彼はとある情報で〈ヘインキュバス〉の研究所の場所を突き止めた。

そこで見つけたものは、他の円卓会議ラウンズのメンバーを出し抜ける可能性を秘めたものだった。

これと併せて〈ヘインキュバス〉を独自に捕獲することができれば、〈ラタトスク機関〉どころかDEMインダストリー、はてまた世界のすべてを支配下に置くことができるかもしれない。そう考えたバルティンの中で、今まで燻くすぶり続けていた野心が一気に爆発した。

「待っている〈ヘインキュバス〉！このバルティン・ドウルガツセの掌中からは逃れられんぞ！」

男性、バルティンは高笑いを響かせながら、瓦礫の山と化した社屋を眺め続けた。

「――あらまあ、これはこれは……」

目の前に広がる景色を見て、狂三は驚きの声を洩らす。

そこには海外の海水浴場顔負けの砂浜、見たこともないような植物が覆い茂る亜熱帯。

そしてその中心部にそびえ立つ巨大な建造物が、まるで狂三を未知の異世界に来たような気分にした。

「喜んでもらえたか？……ここが俺たちの本拠地、『新天地』だ。とりあえず中で休もうか」

零が指し示したのは、目の前にあるこの近辺でいちばん高いであろう建造物。

そこは古代遺跡のような外観でありながら、所々に現代的な機械をあしらったような容姿をしていた。

「はあ。……ところでここはいったい何処ですの？わたくし、様々な国を見て回ったことはありませんが、このような場所は……」

「でしょうね。……とりあえず地球上にはないどこかと言っておくわ。ほら、こつちよ」

志保の曖昧な説明に首を傾げながら、狂三は零やへオルトロスたちの後に続いて、建物の中に入っていった。

創世重工本社。

「——社長！」

「社長！よくぞ無事で……！」

広大なオフィスで零を出迎えたのは、新社屋にいた従業員たちだった。

「いったい何があった？みんな怪我はないか？」

「はいっ！社長の言いつけ通りに脱出したので、怪我人は誰もいません！」

状況確認をする零に、従業員のひとりが涙目になりながら状況を事細かに説明する。

零と志保が狂三の捕獲に出発してからしばらく経った頃、何の前触れもなく砲弾のような爆発が建物に直撃した。

幸い休憩時間だったので、脱出口が近くにあった休憩室に従業員たちと四糸乃はいた。

そのため異変を察知してすぐに全員が避難し、誰ひとり死傷者を出すことなく脱出に成功したのだという。

「……そうか。みんな無事か。よかった……」

零は全員の無事を確認し、安堵の表情を浮かべる。

『——ご主人さま……っ!!』

「ご主人、様……!」

そこへ隣の部屋から『よしのん』と四糸乃が駆けてきて、零の胸に飛び込んだ。

「おお、よしのんと四糸乃も、無事で良かった。……聞いたぞ。ちゃんとおんなの言うことを聞いて脱出したってな。偉いぞ」

零は『よしのん』と四糸乃の頭をわしやわしやと豪快に撫でる。

「……ご、ご主人様も、無事で……よかった、です……」

『よしのんたち、ずーっと心配してたんだよ?ご主人さまは大丈夫かな?って』

「そうか……ごめんな。心配かけて。俺はこの通り何ともないから、心配しなくても大丈夫だ」

涙目で見つめてくる四糸乃と『よしのん』を見て、心を痛めた零が無事であることをアピールしてみせた。

「あらあら。ずいぶんと可愛らしい方ですわね」

「ええ。四糸乃ちゃんとよしのんちゃん。あなたと同じ精霊だから、仲良くしてあげてね」

その様子を傍から見ている狂三に、志保が簡単に説明する。

「そうでしたの。……ということはわたくしの先輩に当たる、ということですよ」

四糸乃と『よしのん』をあやすのに必死になっている零を見て、狂三はゆっくりとその側に歩み寄った。

「——あらあら。とても可愛らしい方ですわね」

「ふえ……?」

『お姉さん、だれ……?』

「く、狂三……?」

いきなり間に入ってきた狂三に、四糸乃と『よしのん』、そして零は呆然とする。

「初めまして。わたくし、時崎狂三と申しますわ。よろしくお願ひしますね。セ・ン・パ・イ・さん？」

『せ、せんぱい……?』

その尊敬されるような響きに、『よしのん』の気分が一気に向上する。

情けなく泣いているところを見られては、四糸乃まで後輩に悪い印象を与えてしまう。

四糸乃を守るために気を取り直した『よしのん』は、ブルブルと身震いして涙を振り払った。

『あれれ〜?もしかして新入りの精霊さん?よしのんはよしのん!可愛いつしよ?何ならよしのん先輩って呼んじやってくれていいんだよ?……ほら、四糸乃も泣いてないで挨拶しなきゃ!』

「ふえ、ええつ……!?!」

急に話を振られ、四糸乃は対応に困ってあたふたしてしまう。

「ふふ……本当に可愛らしい方ですわね。よろしくお願ひしますわ。

四糸乃さん」

言いながら握手を求めて右手を差し出す狂三。

「えつ?……は、はい。よろしく、お願ひ、します……」

恐る恐るその手を取り、震えながらも握手に応じる四糸乃。

急に話題を変えられたせいか、いつの間にか四糸乃は落ち着きを取り戻していた。

「……助かったよ。狂三」

「いえ。お役に立てたなら何よりですわ」

これで四糸乃が大泣きせずに済んだ。零は狂三に感謝しながら、四糸乃の頭を優しく撫でる。

「先輩なら先輩らしく、ちゃんとしないと。……さて、そろそろ遅いから飯にするかな。四糸乃と狂三にはこの案内もあるし」

「そうね。……みんなもいろいろあって大変だったでしょ?今日はもう休んでていいわ。お疲れ様」

『お疲れ様でしたー!』

志保の挨拶で従業員たちは解散し、わらわらとオフィスを去って行った。

「……さてと、俺たちも行くか。四糸乃、狂三。まずは夕食を済ませて、それから部屋に案内するからな」

『はいはいー! ささっ、行くよ! 四糸乃♪』

「うん……」

「ご主人様が行くところなら何処へでも……」

「久しぶりの本社の食堂ね。今日は何にしましょうかしら?」

零に引き連れられるようにして、四糸乃、狂三、志保は食堂へと向かった。

報復の序曲

それから次の日、創世重工本社内、情報統括室。

円筒状に構築されたその部屋の壁を、無数の光の帯が上下移動を繰り返している。

この部屋では『新天地』や零たちが開発した端末から得たデータなど、特に重要な情報が保存されている。

もちろん、志保がへフラクシナスから接收したデータや、他の組織からハッキングにより入手した最新の情報まで、使えそうなものはすべて大容量情報処理装置『ニライカナイ』に蓄えられていた。

そしてその部屋の奥に配置された巨大なモノリスのような黒い板の前で、零と志保が表示されているウィンドウを黙々と見ていた。

「……なるほど。決行は明日か」

零は口元に手を当てながら、納得したように頷く。

表示されていたのは、へフラクシナスの精霊用隔離スペース。

昨日の琴里と土道、そしてその部屋の前にいた令音の会話内容が、一語一句逃すことなく記録されていた。

「……やっぱり気付いてないみたいね。私がわざと拉致されたことに……」

呆れたようにため息を吐き、哀れむような視線をウィンドウに向ける志保。

そう、数日前に志保がへフラクシナスに連れて行かれたのは、わざとそうなるように仕向けてのことだった。

琴里たちが志保を見失ったとき、志保はへフラクシナスから抜け出した訳ではない。

正確には『別の空間』に隠れ、そこからへフラクシナスのメインコンピュータに接続し、ハッキングのための隠し通路を構築していたのだ。

これによりへフラクシナス側気付かれることなくシステムに侵入し、堂々と情報を盗むことが出来るようになった。

それによると、琴里は5年前、何らかの要因で人間から精霊になっ

た。

しかしその力を制御することができず、大規模な火災を引き起こしてしまう。

詳しくは記憶が曖昧なため覚えていないが、士道によって霊力を封印され、そのすぐ後で〈ヘラタトスク〉に拾われた。

そこで5年間かけて研修を受け、現在の司令官という立場を任せられたのだという。

「5年前に最初に保護した精霊を司令官に任命する……か。まあ、わからない話じゃないな……」

「そうね。立派な役職と権力を与えて忠誠心を植え付ける。……裏切り防止の予防策って下心が見え見えだわ」

今度は二人揃ってため息を吐く。

だが司令官というのは、相応の能力と部下からの強い信頼がなくては務まらない。

事実、士道をちゃんとサポートし、十香という見事な初白星の獲得を実現した。

ということとは司令官としての能力は本物である。この事実を二人は素直に受け止めた。

「……にしても解せないのは、どうしてわざわざデートをする必要があるのか、つてことだな」

映像の隣に表示したウインドウに目を移し、零は疑問符を浮かべた。

そこには〈ヘフラクシナス〉からハッキングした、琴里の精神状態を示すパラメータが表示されている。

それによると、琴里の士道への好感度は、常に封印可能な数値を余裕で超えていた。

令音の話では2日後までに琴里の霊力を封印しないと、琴里は自身の霊力に耐えられなくなり、今までの琴里ではなくなってしまうかも知れない。

そのために琴里とデートをして、霊力を再封印しなくてはならない。とのことだった。

「……まあ、素直になれない年頃の娘の口実作り、って奴かしら？ 初心で可愛らしいわね……」

このデートの意味を理解した志保が、ニマニマと含み笑いを浮かべる。

「……う……博士にはわかるのか？」

「ええ。こういうことは男には難しいかしら？ 餅は餅屋、ってところでしようね。……それで、やっぱり社長は狙っちゃうの？」

志保は改めて方針確認をするように尋ねる。

それはつまり、まだ霊力の封印が行われていないうちに、琴里をかつ攫うと言うこと。

士道から大切に育ててきた妹を奪い、義理の兄という思い人がいる少女を強引に自分の僕にし、その思いを踏みにじることに他ならなかった。

「……この兄妹には悪いが、俺にも譲れないものがある。……それに、二度も俺の我が家を襲撃してくれたお礼参りもしないといけないからな」

言いながら零は、別のウインドウを表示する。

そこに映っていたのは、新社屋が襲撃された後、志保が飛ばした観測機の映像。

5年前に研究所を襲撃したのと同じ魔術師の団が、無慈悲な攻撃で社屋を破壊する様子が映し出されていた。

社屋を完全に瓦礫の山にすると、後からひとりの男性が姿を現す。

服装や髪型など多少の違いはあったが、5年前に研究所を襲撃した張本人と同一人物だった。

「――バルティン・ドウルガツセ。ヘラタトスク機関の最高幹部連、円卓会議の一員。組織内でも多数の支持者を持ち、それなりに発言力も強い、か。……けど、まさかあんな方法でこっちの居場所を見つけるなんてね……」

「ああ。どんな執念してるんだよ……」

二人はげんなりするように机に突っ伏し、目の前のモニターを呆然とした目付きで眺める。

そこにはヘフラクシナスのコンピュータに残されていた、クルーからバルティンへの報告の履歴が表示されていた。

どうやらバルティンが琴里に内緒で潜り込ませていたようで、他の円卓会議ラウンズのメンバーよりも先に重要な情報が手元に来るように仕組んでいたようだ。

それにより四糸乃が零の手に落ち、零が天宮市に來ていることを知った時から、秘密裏に活動を開始していた。

方法は至って簡単。バルティンの息のかかったヘフラクシナス及びヘラタトスクの人員、そして警察などの様々な組織にも通用する権力を行使し、天宮市じゅうを風潰しらみしに探し回らせたのだ。

その人数は100を軽く超え、かつ不眠不休を強要するレベルで探し回らせた結果、僅か1ヶ月弱で零が拠点にしている新社屋の場所を見つけて出したのだという。

「よりによって人海戦術か。それじゃあ情報ばかり気にしても意味がないな」

「しかもこき使った人たちの中には過労で倒れた人もいるみたいよ。こういうのをブラック企業って言うのかもしれないわね……」

しかも肝心の零は不在だったため、目的そのものが果たせなかったという不名誉な結果を残す形となった。

おまけに新社屋には重要なものは持ち込まれておらず、パソコンも零と志保以外の人物が接続アクセスしようとする、自動的に中のデータを『新天地』のコンピュータに転送、そして自壊するように改造してあった。

まさに骨折れ損のくたびれ儲けとなった搜索関係者たちを思い、二人は無言で合掌した。

「まあ、ヘポセイディアが完成するまでの仮設拠点みたいなもんだっただからな。……ところで完成はもうそろそろじゃないのか？」

「ええ。確か明後日には動かせるようになるって報告があったわ。となると明日のデートには間に合いそうもないわね……」

志保の報告を聞いて、「そうか……」とげんなりしながらデスクに突っ伏す。

「……無い物ねだりしても仕方ないか。へオルトロスの新装備は完成してるみたいだし、それまでにやれることはやっておくか」

零は重たいため息を吐き出すと、飛び起きるようにイスから立ち上がる。

「やられたら倍以上にして返す。それが俺の流儀だ。五河琴里……いや、ヘイフリート」。次の目標は——お前だ」

モニターに映った琴里に向かって右手を伸ばし、それを掴むように手を握った。

これは報復。やられたからやり返す子供の喧嘩と同程度の争い。それでも零は止めることをしない。何故ならそれが、避けては通ることのできない運命なのだから……。

それから日が沈む前に情報整理を終えた二人は、夕食のために食堂を訪れていた。

「——あつ、ご主人様……」

『ひよつとして二人もお昼? いいところに来たね♪』

「おお、四糸乃によしのん。狂三も一緒か」

円形のテーブルに、四糸乃と狂三が座っているのを見つける。

「あらあら。それでしたら、ご主人様と博士さんもご一緒にいかがでしょうか?」

「いいわね。ご一緒させていただこうかしら? それじゃあ私たちも注文してくるから、ちよつと待っててね」

いちど二人は席を離れ、カウンターでメニューを注文する。

そして完成した料理をトレーに乗せ、二人は四糸乃と狂三のいる席に戻っていった。

それから数分後、零たちは狂三が語る土道とのデートの様子に耳を傾けていた。

「……そうか。デートでランジェリーショップに……」

「はい。そしたら土道さん、とても魅力的なものを選んでくださいましたわ。今わたくしが身につけているのがそうなんですけど、ご覧になりますか?」

言つて狂三は零のすぐ側に立ち、スカートの手端をつまむ。

そして四糸乃と『よしのん』が両手で目元を隠し、志保が身を乗り出して見ようとしている中、狂三はゆっくりとスカートを持ち上げていった。

「……いや、またの機会にさせてもらう。こんなところじゃ狂三の綺麗な身体を他の奴に見られるからな」

「あら、お上手ですわね、ご主人様だったら……」

四糸乃と『よしのん』が安堵し、志保が残念そうにしている中、狂三は満更でもなさそうな表情で席に戻っていく。

「にしてもデートでランジエリーショップつて、いったい何を考えるのかしら……?」

もちろん志保は土道にこんなありえない選択をさせた連中を知っている。

〈フラクシナス〉ではAIが瞬時に選択肢を用意し、クルーたちがその中から最適だと思うものを土道に言わせるという、まさにリアルギャンゲーのようなシステムを採用しているという。

しかし相手は精霊。一歩間違えれば殺されかねない相手に、そんな危ない綱渡りをさせるクルーの判断を疑いたくなくなった。

「土道さん。本当に積極的な方でしたわ。……校内を案内していただいたときも、『狂三は今、どんなパンツを穿はいてるんだ?』つて……」

「——ぶふおっ!」

あまりにも想定外の一言に、さすがの零も飲んでいた水を吹いてしまふ。

「ちよ、大丈夫?……まあ、無理もないけど……」

志保が慌てて側に駆け寄り、咳き込む零の背中を優しく擦さする。

『ひゃ〜!土道くんつてケダモノさんだったんだ〜!よしのん、危うく食べられちゃうところだったよ……』

「し、土道さん……」

知人の知らない一面を垣間見た『よしのん』と四糸乃は、身を寄せて小動物のように小さく震え上がる。

「そうですねー!ご主人様に何か着衣を選んでいただきましょう!」
閃いたように両手をパンと叩き、狂三はそう提案する。

『おおー!それグッドアイデアー♪ほーら四糸乃ー!ご主人さまと一緒にいるチャンスだよー♪』

「え、ええっ!?で、でもご主人様に迷惑が……」

ぐいぐいとひっぱる『よしのん』とは対照的に、零に迷惑をかけたまといと渋る四糸乃。

「それは一理あるわね。……あ!」

狂三の意見を聞いて、志保はある妙案を思いついた。

そしてニマニマと含み笑いをしながら四糸乃と狂三の間に入ると、二人にそつと耳打ちをした。

「——ねえ、二人とも。『水着』って興味ないかしら?」

異変

オーシャンパーク、ウオーターエリア。

その脱衣場近くの木々の影に、アロハ系の柄をした水着を身につけ、夏系の上着を羽織った零の姿があった。

「はあ。……まさか四糸乃と狂三まで連れてくることになるとはな……」

零は太陽の光が燦々と降り注ぐ天を眺めながら、ここに来るまでの経緯を思い出す。

事は朝10時頃、町中の衣類専門店に零たちは訪れる。

そこでヘラタトスクの目を掻い潜り、四糸乃と狂三の水着を見繕って無事に購入することができた。

それからすぐに土道と琴里がデートをするこの場所、オーシャンパークに二人を連れて来てしまったのだ。

「まったく博士は。……まあ、二人のいい気分転換になればいいんだけどな……」

たまに思い切った行動をする志保に、零はこれまで何度も振り回されてきた。

だがしかし、それが思いも寄らぬ形でいい結果を生み出してしまうので、余計に何も言えない零だった。

『……主人さまあ……っ！』

そこへ『よしのん』の呼び声が聞こえてきて、零はそちらに目を向ける。

するとそちらから赤と白のストライプ柄の水泳着のような衣装を身につけた『よしのん』と、ピンクを基調としたワンピースタイプの水着を着た四糸乃がパタパタと駆けてきて、そのまま零の胸に飛び込んできた。

「おいおい。ビーチサイドは走ると危ないぞ。……ってよしのん。その水着？どうしたんだ？」

『あ、気付いちやったく？これね、博士が今日のために一晩で作ってくれたんだってさく♪どお？似合う？』

零が問いかけると、『よしのん』はセクシーポーズで見せびらかすようにアピールする。

「ああ。『海の女』って感じで可愛らしいな。……四糸乃もやっぱり可愛らしさをアピールするのが正解だったみたいだ。よく似合ってるぞ」

言いながら『よしのん』と四糸乃を褒めるように、零は優しく頭を撫でる。

『えへへ〜！褒められちゃった〜♪四糸乃〜！よしのんたち可愛いってさ〜♪』

「は、はい。ありがとうございます……」

嬉しそうにそれを受け入れ、頬を赤らめる『よしのん』と四糸乃。

本当に四糸乃は見ているだけで癒される。零にとって四糸乃は憩いの存在だった。

「——あらあら。四糸乃さんとよしのんさんばかりそんなに誉めて、ずるいんじゃないですか？」

そこへ続くようにして現れたのは、赤と黒で配色されたビキニタイプの水着を着た狂三だった。

「おお……やっぱり狂三は赤と黒が合うな。それにすごく綺麗だ……」

「まあ……主人様だったら、そんなからかうようなことは言わないでくださいまし……」

頬に手を当て、羞恥心で顔を赤くする狂三。

そしてゆつくりと零の側に寄り、その美貌あふれる肢体を密着させるように押し付けてきた。

「おいおい。こんな人がたくさんいる中で……」

狂三の豊満なバストから伝わってくる鼓動が、零の身体を小刻みに震え上がらせる。

さすがに見られるのは恥ずかしく、零は動揺を見せながら周囲を見回す。

そこが物陰だったことが幸いし、この光景が人目に触れることはなかった。

『あーっ！狂三ちゃんずるーい！四糸乃！ここはよしのんと四糸乃のダブルセクスィーバディーでご主人さまを悩殺しよう！』

「え、ええっ……!?!」

『よしのん』も狂三に張り合うように、四糸乃を零の側まで誘導する。「——ずいぶんと羨ましい光景ね。私も混ぜてもらっていいかしら？」

「は、博士まで……」

後から現れた志保の姿を見て、零はどうしようもないくらい困惑しそうになる。

彼女が身に付けている水着はVの字をイメージしたような白一色のスリングショーツ。

しかしその上から馴染み深い白衣を羽織り、部分的に見える光景が余計に妖艶さを演出してしまっていた。

「どうかしら？私もまだまだいけると思うわよ？」

『うんうん！博士すっごくいい！バッチグー♪』

「は、博士さん……」

志保のポーズングを見て、『よしのん』は親指を立て、四糸乃は右手で顔を隠しながらこっそりと見つめる。

「あらあら、これは博士さんにしてやられましたわね。わたくしも次はあのタイプに挑戦してみますわ」

まるで誘惑するように、狂三は零の腕にしがみつきながら、宣言するようになんて言うてのける。

「はあ……そうだな。みんな綺麗だよ。……だから披露会は後にして、今は監視に専念させてくれ」

これは放っておいたら先に進まない。そう感じた零はバツサリと斬り捨てる。

そして茂みの影から、一人の少年と二人の少女を見つけた。

「あら？どうして十香ちゃんが……？」

「お目付け役……ってわけじゃなさそうだな」

しかも当の琴里は不機嫌そうな表情でふて腐れているようにも見える。

「……そういえば社長は知ってる？琴里ちゃんのリボンの秘密」

「ああ。リボンの色で自己暗示をかけてるんだったよな」

ここで零はヘフラクシナスからハッキングしたデータの中の、琴里に関する情報を思い出す。

彼女は髪に括るリボンの色によって、普段の私生活での性格と、司令官としての強気な性格。この二つを使い分けている。

今は黒いリボンを付けているため、ヘフラクシナスの司令官としての強気な性格。

だからだろうか。今はデート中であるにも関わらず、そこまで楽しんでるようには見えなかった。

「……確かに、普通じゃないからな。他の娘を連れてデートなんて……」

「それだけじゃないみたいよ。ほら彼、さつきから距離を置いてるみたいによそよそしいじゃない？あんな空気じゃ気分も削がれるわ」

しかしそれを十香がムードメーカーのような役割でフォローしている。だからヘフラクシナスのクルーは彼女を同伴させたのだろうと零たちは考える。

「……もしかしてあの同伴している方は、あの時の炎の精霊さんですか？」

『四糸乃に負けず劣らずの可愛さだね』

「綺麗、です……」

狂三、『よしのん』、四糸乃も並ぶようにしてこっそりと覗き見る。

「ええ。五河琴里ちゃん。彼、土道くんの義理の妹よ」

「それでもって五河土道に精霊の霊力を封印させてるヘラタトスク機関の司令官をやってる。要は俺たちの商売敵だ」

などと志保と零が情報を口にしていく間に、3人はウォータースライダーに移動する。

そして土道の前に琴里、背後から十香がしがみつく形で滑り出し、水柱を上げながらプールに飛び込んだ。

『へえ。土道くんってあんな可愛い妹ちゃんがいたんだ。ま、可愛さではよしのんが上だと思っけど〜♪』

「よ、よしのん……」

『よしのん』がセクシーポーズでアピールすると、自分に自信のない四糸乃がしょんぼりとする。

「士道さんも隅に置けませんわね。十香さんだけでなく、あんな可愛らしい方を侍^{はべ}らせて……あら」

プールから浮かび上がってくると、琴里は士道にしがみついて泣いているようだった。

「あらら。リボンが取れちゃったのね……」

「となると、あれが本来の性格か。年相応の娘であることには変わらないんだな……」

志保と零はその様子を複雑な心境で見続ける。

これから自分たちがすることは、あの二人を引き離すのと同意義。誉められることではないのは十分にわかっている。

そんな後ろめたさからだろうか、ほんの少しだけ零の意思に揺らぎが生じる。

もういつそのこと、今回だけはそつとしておいてもいいので――

――ドクンッ!

「……………!?!」

突然、零の中で何かが暴れるような感覚を覚える。

それが一気に膨れ上がり、吐き気を催した零は口元を押さえた。

「ぐ、ぐご主人様……………!?!」

『どうしちゃったの!?!』

「は、博士……………!」

狂三、『よしのん』、四糸乃が慌てるなか、志保は冷静に零の容態を確認する。

「……………!?!まさか、考えちやつたの……………!?!」

その原因に気付いた志保が、零の肩を支えながら立ち上がる。

「博士さん!ご主人様は……………?!」

「大丈夫、ですか……………?!」

『よしのんたちに何か出来ることはある!?!』

心配そうに志保にすがり付く精霊たち。

中でも狂三はいつもの落ち着きを忘れたように取り乱している。

「……大丈夫よ。社長のことは私に任せて、あなたたちはここで大人しく待っててね？」

いつもと変わらぬ笑顔でそう言うと、志保は零を連れてその場を離れていった。

ペナルティ

脱衣場近くの手荒い場。

「はあ……はあ……つぶーぐう……つー！」

蛇口が全開に開いて大量の水が吐き出されている前で、零は洗面台にすがり付くように座り込んでいた。

「……もうてつきり割り切ったものかと思ってたら、こんな重要なときに……」

「……くそっ……考えない、ように……はあ、はあ……してた、はずなのに……」

志保は零を落ち着かせるように、優しく背中を擦る。

そこには先程までの強さと美しさを兼ね備えたような青年の姿はなく、何かに怯えているように身を震わせる子供のようなだった。

志保は零がこうなるのを見るのはこれで2度目。

最初はこの世界に来てから数年後、初めて自分以外の精霊を目撃した時だった。

この時まではまだ自分に与えられた目的がわかっていなかった。

もしかしたら何かヒントがあるかもしれないと考えた零は、この世で2番目に発見された精霊、【第二の精霊】を探す。

そして彼女を遠目で見た瞬間、零の霊結晶が激しく鼓動する。

直後、まるで霊結晶^{セフィラ}が彼女を求めているかのように反応し、そのための方法が零の頭の中に流れ込んできた。

しかしその内容を理解したのはいいが、それを二つ返事で実行できるほど零は女に飢えているわけではない。

——そんな些細な抵抗が引き金となったのか、今度は零に激しい激痛が襲った。

まるで体内にいる何かが大暴れし、心臓を鷲掴みにされたような感覚。

迷いを見せた零を叱り飛ばしているような、霊結晶^{セフィラ}の怒り。そう思

わずにはいられなかった。

ただ少し、ほんの少しだけ迷いを見せただけでこのザマ。もし明確に拒否する意思を示したら——そんなことは考える余裕すらない。零は気付いた。霊結晶セファイラを与えられた時から、自分にはもうやる以外の選択肢などないのだと。

それに異を唱えるどころか、迷うことすら許されない。生殺与奪権を握られた哀れな奴隷のように——。

「……はああつ……はああつ……ちく、しよお……ちく、しよおお……」

だが今はこんなところで燻くすぶっている場合ではない。

この千載一遇の機会を逃せば、琴里、ヘイフリートを狙うチャンスがいつ来るかわからないのだから。

なのに体が震えて言うことをきかない。力が入らない。

終わってしまう。これまでの旅が、手に入れたものが、自分の何もかもが意味をなくしてしまう。

明確な死おわりの恐怖に、身体が零の意思に反して動くことを拒んでいった。

「——しっかりしなさいっ！」

志保が零の上着の胸ぐらを掴み、強引に自分に向けさせる。

そこには感情の昂たかぶりで泣きそうな志保の顔と、彼女の眼鏡に映る自分の顔があった。

「……あなたがここで立ち止まったらどうなるか、それはあなたが一番わかっているはずでしょ!?!……思い出しなさい。目的を果たせなかったらどうなるか……!」

「果たせ、なかったら……」

そこで零の脳裏に過ぎるのは、かつて自分が訪れた世界。

そしてそのうちの幾つか、目的を果たせなかった世界がどうなった

のかを――。

「……いい、いや……だ……もう、あんなのは……」

「だったら立ちなさい！……いま、この場所にはあなたの目的を達成するためのピースがある。けどそれを手に入れるためには、誰かの大切なものを奪わなきゃいけない。そのためには……」

ガタガタと激しく震える零の前で、志保は小さく俯く。

「……選りなさい。自分の身だけを思っここで震え続けるか、良心も迷いも、邪魔になるものは全部捨てて、目的を果たすことだけを考えるか。……けど忘れないで。あなたのことを信じて、あなたが捨ててはいけない大切なものがあることを……」

「大切な、もの……」

志保の呼びかけで落ち着きを取り戻しつつある零の思考に、今の自分を支えているものの姿が過ぎる。

創世重工の従業員。契約を結んでいる子会社に顧客。四糸乃と狂三。そして――、

『与えられた役目も、出てしまった犠牲も、ぜんぶ背負って前に行く』。それがあなたの信念でしょ？……だから全部なかったことにしないで。私のすべてを背負って、私と契約を結んだ世創零を――

――虚構^{うそ}にしないで……」

掴んでいた手を離し、志保の腕が力なく下がる。

そして彼女の頬を一筋の雫がしたたり落ちたのを零は見逃さなかった。

――駄目だ。このままでは。

零の心の中に、ほんの小さな光が灯る。

覚悟が足りなかった。良心という甘えがあった。

今までにもあったはずだ。善意だけじゃどうにもならなかったことが。

だから自分の意思だけを貫いていくと決めた。……決めたはずだった。

「……………」

「え？社長…………？」

零はゆっくりと立ち上がると、洗面台の方を向く。

そしてゆっくりと頭を下げると、未だに放出され続けている蛇口の水に頭を突っ込んだ。

「え!?ちよ……………」

跳ねる水しぶきを腕で防ぎながら、志保は零の姿を見続ける。

その姿は滝行を行う修行僧のようで、頭の中の煩悩いらぬものを洗い流しているみたいに見えた。

……しばらくそれが続くと、零は頭を水から引き抜き、身を起こして洗面台に手をつく。

そして激しく首を振るい、長い銀色の髪に纏わり付いた水分を振り払った。

「…………博士」

「は、はい……………」

その冷め切ったような零の声に、志保は思わず上擦った声で返事をしてしまう。

そこから見えた彼の横顔からは微塵の恐怖も感じられず、感情が消えたかのような静寂感を見せていた。

「…………正直に答えてくれ。俺は——非道い奴か？」

「え…………？」

あまりにも掻い摘まみすぎた問いに、志保は一瞬、零の真意を見失いかける。

だがすぐに零の横顔を見て、彼が求める答えの意味を見出した。

「…………ええ。若い女の子を奴隷にして侍はべらせて、その挙げ句に思っている女の子にまで手を出そうとしている。私の個人的な見解からすれば、あなたのやっていることは——悪そのものよ」

「……………そうか」

零は志保の口から飛び出した暴言に対し、零は目の前の鏡で自身の顔を見たまま答える。

これはこの先、自分の中にある不要なものと決別するための儀式。『役目』に対する迷い、相手への同情、そして死の恐怖。

それらを捨てなければ成せないことがある。守れないものがある。

「……上等じゃないか。やってやるよ。だから——」

どうせ他に選択肢なんてない。もはやそんな投げ遣りな動機ではない。

これは自分の意思で決めたこと。零にとっていちばん失いたくないものを守るために。

退路は断った。邪魔になるものはすべて捨てた。零の覚悟は完全に決まった。

気持ちの切り替えが終わった零は、右の拳を振り上げ——

——ドンツ!

「つぐ……!」

自分の胸に力いっぱい叩き付けた。

そして自分の中にあるものに向かって、零からの唯一の要求を絞り出すように口にした。

「——黙って見てろ」

【黙秘強使】

落ち着きを取り戻した零は、志保と共に四糸乃と狂三が待つであろう場所に帰ろうとしていた。

「……にしても珍しいな。博士があんなにも感情的になるなんて……」

「自分でもびつくりだわ。……これも社長のおかげかしら？」

感心するように話す零に、志保は独り言ひとりごとちるるように言葉を返す。

そこで零は会って間もない頃の志保の様子を思い出す。

零が17番目にやって来た世界。そこで零は志保と出会った。

その世界には金色の『何か』から、『クロノスを滅ぼせ』という曖昧な役目を与えて来ていた。

単身で調べた結果、その世界には人間を遺伝子レベルで改造し、世界を支配しようと企む『クロノス』という組織が存在することを突き止める。

当時、志保はその研究員のひとりで、『クロノス』が誇る最高の頭脳の持ち主と称されるカタストリア・ガルバスの右腕を勤めていた。

だがそれはガルバスに近づくための口実で、目的は実験によって命を奪われた姉の仇を討つために近づいていたのだ。

ある時、隙を見て暗殺を企てたくわだのだが、保身最優先のガルバスの策略により失敗に終わってしまう。

そのために組織から追われる身となった志保は、偶然出会った零にかくま匿われることになった。

いつこの場所がバレるのか。いつ命を狙ってくるのか。この時の志保はいつ来るかわからない恐怖に怯え続け、長い間『新天地』から出ることを拒むようになる。

しかし長い時間をかけた零の必死なケアにより、今のように落ち着きのある本来の自分を取り戻したのだった。

「……社長には本当に感謝してるわ。見ず知らずの私を匿って、『クロノス』を潰す手伝いまでしてくれた。……もしあの時、社長に出会っ

てなかったら……」

間違いない『クロノス』の手に落ち、復讐のチャンスは二度と来なかっただろう。

志保は『もしかしたら』という可能性を思い浮かべ、暗い表情で小さく俯く。

それに気付いた零は足を止め、背を向けたまま口を開いた。

「——『もし』なんてない。俺たちはこうして出会ったんだ。……約束したろ？『どこかの異世界に逃げ込んだハゲジジイに復讐する代わりに、前を向いて生きていく』って。そのために俺たちはこうしてコツコツと力を付けて、創世重工を立ち上げた。……だろ？」
柔らかい笑みを浮かべながら、零は志保の方を振り向く。

そう、まだ復讐は終わっていないのだ。『クロノス』は壊滅させたものの、最高責任者であるガルバスは別次元に逃走を図り、その行方は未だわかっていない。

だが様々な世界を巡り、多彩な能力を身につけた零に、ガルバスは異様な執着を持っていた。

間違いなく何らかの形で力を付け、必ず零を掌中に収めようと狙ってくる。

ガルバスの性格をよく知る志保はそう睨み、零の世界巡りの旅に同行させてもらえるように頼んだ。

こうして志保は復讐のため、零は様々な世界での『役目』を果たすため、互いに協力し合う『契約』を結んだのだった。

「……そのためにも、今はこの世界での『役目』を果たして——」
出入り口前にある自販機の近くに足を踏み入れようとした瞬間、零はピタリと足を止める。

「……………どうかし——」

後ろから志保が声をかけようとしたところで、零は右手で制する。

この先に何かあると察知した志保は、零の下から覗くようにして、自販機の向こう側をこっそりと見る。

すると見覚えのある女性が水着の上から白衣を羽織り、自販機の影

に向かつて座り込んでいるのが見えた。

「……あれって、ヘフラクシナスの解析官さん？」

「だけじゃないみたいだ。……いるぞ。その自販機の奥に」

二人は耳をすますと、苦しそうな息遣いの呼吸音が、自販機の反対側から聞こえてくる。

さらに自販機の裏から、か細い少女のものと思しき腕が伸びた。

「……もしかして、琴里ちゃん？」

「ああ。……しかもかなり弱ってるみたいだな」

こつそりと様子を見ていると、どうやら士道に隠れて鎮静剤などの薬を投与しに来たようだ。

琴里は今日の士道とのデートをかなり楽しみにしていたようで、無理をして相当な量の薬を使用しているようだった。

「あらまあ。これまた健気なこと……」

「この台詞、あのボンクラ兄貴にも聞かせてやりたいもんだ……」

そう、士道は琴里がここまで無理をしているという事実には気付いてすらない。

どれだけ琴里が士道を思おうと、向こうから見れば長年共に暮らしてきた家族。それ以上でもそれ以下でもないのだ。

しかし少女の思いは共に過ごした時に比例して強く、零が付け入る隙が見当たらない。

もし強引に霊力を送り込んでも、その強靱な意志ではね除けられる可能性があった。

何か弱みを見つけ、そこに付け入るチャンスでもあれば。零は何か手はないか思案に暮れる。

——ドクンッ！

「……………!?!」

瞬間、心臓が飛び跳ねたかのような感覚を覚え、零は胸元を握る。弱気になったせいでまた霊結晶セファイラが文句を言っているのかと思っただが、痛みや苦しみなどは一切感じない。

それどころか身体の奥から力が漲みなぎってくるような感覚と共に、零の頭の中にイメージが流れ込んできた。

「……………社長？」

異変に気付いた志保が、そっと零の顔を覗き見る。

その時の零からは先ほどまでの焦りの色は消え、清々しいほどの余裕を見せていた。

「……………博士。データの記録は任せた」

「えっ？ちよつと……………」

状況が理解できていない志保を差し置いて、零はゆつくりと自販機の影から出る。

「〈淫タブリス導賢者〉———【黙秘ストーキング強使】」

そう唱えた瞬間、その様子を間近で見っていた志保は、ありえない光景を目にする。

目の前を悠々と歩いてきた零の姿がゆつくりと薄れていき、まるで神隠しにでも遭ったかのように消えてしまったのだ。

「あれ？社長……………」

零を見失った志保は、慌てて周囲を見回す。

しかしどこにも零の姿はなく、足音どころか呼吸音すら聞こえなかった。

「……………そうだ。端末で……………」

志保は思い出したように端末を起動し、零の端末の所在を確かめる。

すると反応は数m先で確認され、そのままゆつくりと歩いていくと表示していた。

「えっ？…どうなってるの？…これ……………」

訳がわからなくなった志保は、混乱のあまり端末のウィンドウと目の前の通路を何度も見やる。

やはりそこには零の姿がなく、用事を済ませてその場を去ろうとする令音の姿しかなかった。

蝕む毒と溜まる鬱憤

「はあ、はあ……」

荒い呼吸でぐったりとしている琴里が、自販機の影で壁に背を預けていた。

精霊の力を取り戻した彼女は、その力を使用するたびに精神を破壊衝動に乗っ取られ、自分の意思と関係なく戦闘をしてしまうようになる。

何とかするためには、士道にもう一度霊力を封印してもらわなければならぬ。今日のデートはそのためのもの。

先ほど令音に投与された精神安定剤と鎮痛剤の効果が効いてきたのか、少しずつ衝動が落ち着きつつあった。

そろそろ戻った方がいいかもしれない。そう思い一呼吸置いて立ち上がろうとする。

——あんな男のどこがいいんだ？

「……!?!?……」

瞬間、頭の中に響いた声に反応し、琴里は大きく目を見開く。

だが周囲には誰もおらず、琴里自身の荒い呼吸音しか聞こえない。

「……やっぱりまだ調子が良くないのかしら……?」

気のせいかと思ひ、再度全身の力を抜く。

——もしかしたら気づいてるんじゃないのか？自分は異性としてあの男が好きなんじゃないかって、兄妹としての好意の延長線上なんじゃないかって。

「…………ッ!?!?」

再び聞こえてきたその声に、琴里はこれが気のせいではないことを確信する。

——このまま一緒にいても、あいつは君の気持ちに気付くことはない。いつまでも『妹』のまま。それでいいのか？

「誰……!?!?何処にいるの!?!?姿を見せなさい……!」

壁に手をついてなんとか立ち上がり、周囲を警戒するように見回す。

しかし声の主は姿を見せるどころか、その気配すら琴里に気付かせない。

声はすれども姿は見えず。まるで心霊現象にでも遭遇したような気分になり、琴里は恐怖を振り払うように立ち上がる。

「いい加減に姿を見せなさいよ！それとも、隠れて言いたいことだけ言う臆病者……」

——もしそのせいで——、君はあいつを愛せるのか？

「……えっ?」

琴里の虚勢を打ち砕くように響いたのは、あまりにも唐突な一言。だがその勢いは盛大で、琴里の頭を真っ白にするには十分だった。

「……ちよ、ちよつとー!どういふことよそれ!?ちゃんと答えなさい……!」

必死に辺りに向かって騒ぎ立てるが、次の声が聞こえてくることはなかった。

「……なんなのよ。まったく……」

これ以上の追求をしようとしても無駄だと悟った琴里は、土道たちが待つであろう場所へと駆けていった。

「……いったい何がどうなってるのかしら?」

その様子をずっと見ていた志保は、目の前で起こっている状況が理解できずに困惑する。

零の姿が見えなくなつてすぐ、まるで誰かと話しているかのように琴里が叫び出す。

だが志保の耳には琴里の声しか届いておらず、端末も他の音をまったく検知していない。

おそらく零が何かしたのだろうと志保は推測するが、その原理がまったく理解できなかつた。

「……こうなったら社長に直接聞くしかないわね。けどどこに……」

「——俺ならここだぜ」

「えっ……!?!」

唐突に聞こえてきた声に、志保は反射的に振り返る。

そこには壁を背にし、疲労感を吐き出すようなため息を漏らす零の姿があった。

「ちよ……いつからそこに……?」

「ん?ちようど今さつき。……ひよつとして記録できてなかったのか?」

意外そうな表情で尋ねる零に、志保は小さく頷く。

「そうか。……こいつはもう少し研究が必要だな……」

「それよりも何をしたの?こっちは社長の存在どころか、琴里ちゃん
の身に何が起こったのかわかんないんだけど……?」

ひとりで考え込む零に、置いてけぼりを食らった志保が不機嫌そう
に抗議する。

「ああ、悪い。いま話すよ」

零は霊結晶セファイラから新たに与えられた能力、**【黙秘強使】**ストリーキングについて簡単に
説明した。

これを使用している間は、周囲に零への認識を阻害する霊力が散布
され、誰も零の存在を認識できなくなる。

おまけにこの状態の時にだけ、対象の意識に『メッセージ』を
植え付ける特殊な霊力を送り込むことができる。

送り込まれたそれは、まるで暗示のように対象の精神に訴えかけ、
半ば強制的にそのメッセージを信じさせてしまう。

さらに霊結晶セファイラを持つ精霊には特に有効で、それを取り込んだ霊結晶セファイラ
を限定的に籠絡させ、内側からも精霊の精神に訴えかけるように仕向
けるといったものだった。

「……なるほど。隠密状態でこっそりと近づいての精神攻撃。なかなか
面白い能力じゃない」

「そうか?なんか戦闘に関係ない能力ばかりだろ。……俺、本当に

精霊なのか……?」

他の精霊たちとの違いに、零は不満の声を漏らす。

零たちが確認した精霊たちは、使い方によっては一日で国ひとつ潰せるだけの力を持っている。

なのに自分ができるのは読心術に隠密兼精神攻撃。おまけに他の精霊を隷属させて支配するだけ。零が思う『世界を殺す存在』のイメージとは大きくかけ離れていた。

「強力な力を持った他の精霊を自分の言いなりに出来るだけでも立派じゃない。その気になれば世界征服だって夢じゃないんじゃない?」

「むう。……そうか?」

励ますように肩を叩く志保に、零は自信なさげに返す。

「それに勢い余って捕獲するはずの精霊を殺しちやわないようになって、だ・れ・か・さ・ん・の・配慮だと思わよ?社長って精霊の力を抜きにしてもチート級に強いじゃない」

「うゝっ……」

志保は^{セファイラ}霊結晶を意識するように、零の胸を人差し指で突く。

そう、零には与えられた^{セファイラ}霊結晶の命令、もとい導きに従い、精霊を隷属させるという役目がある。

もし精霊と戦闘することになり、そのまま殺すことになってしまったら。零の命に関わることは火を見るより明らかだった。

「それに戦力が安定するまでは派手な動きはしないって取り決めだったでしょ?ずっと研究ばかりで鬱憤が溜まってるのはわかるけど、自分で決めたことには責任持つて欲しいわね」

「ぐはあ……!」

深々と胸を抉るようなデイスに、零は力尽きて膝をつく。

そしてそのまま倒れるときに『K. O. !』という言葉が聞こえてきたのは、恐らく聞き違いではないだろう。

「せめて『アレ』が完成するまでは我慢してよね。ほら、行くわよー」

志保は強引に零を立たせ、四糸乃と狂三が待つであろう地点へと戻った。

タイミング

『……狂三ちゃん。どうするの？この人たち……』

「死んじやったんですか……？」

『よしのん』と四糸乃が心配そうな表情をしながら、足元に倒れている男たちを見る。

「心配には及びませんわ。……ただほんの少し、『時間』をいただいただけですから。このままそつとしておけば、そのうちに目を覚ますと思いますわ」

頬に手を当て、狂三はいつもの優雅な笑顔でそう答える。

「——悪い。待たせたな」

「いい娘にしてたかしら？」

そこへ木の影から覗くようにして、零と志保がひよつこりと顔を出した。

『あつ！ご主人さま！』

「おかえり、なさい……」

「お体の方はもうよろしいんですの？」

零の身を気遣うように、『よしのん』と四糸乃、狂三が身を寄せる。

「ああ。俺はもう大丈夫だ。……ところでこれはどういう状況なんだ？」

先程まで四糸乃と狂三がいた場所に倒れている男たちを見て、零が説明を求める。

見た限り死んでいる訳では無さそうだが、だからといって何事もなかったかのようにスルーできるような様子ではなかった。

『よく聞いてくれたね♪実は……』

『よしのん』が身振り素振りを交えながら、零と志保がいない間に何があったのかを事細かに説明する。

二人がこの場を離れてから少し経った頃、四糸乃と狂三の前に数人の男たちが話しかけてきた。

それがナンパだと気付いた狂三が、人を待っているからと丁寧に断

るのだが完全に聞く耳を持たない。

なので止む終えずへ時喰^{とき}みの城で男たちの時間を吸収して気を失わせた。というのが事の真相だった。

「そうか。そいつは間が悪かったな。……それで、このまま放っておいたら死ぬ、なんてことはないよな?」

「はい。いただいたと言ってもほんの少し。すぐ命に関わるといったことはありませんわ」

ほんの確認程度の感覚で尋ねる零に、狂三はにこやかに答える。

もし死人が出て大事になれば、間違はなくターゲットの琴里に感づかれていただろう。そう考えて零は内心でほっと一息つく。

「……なら問題ないか。よく言いつけを守ってくれたな」

言いながら零は狂三の頭を優しく撫でる。

倒れている彼らは自業自得ということで、失った寿命は勉強代として割り切らせることにした。

「まあ、(主人様……)」

狂三は頬を赤らめ、嬉しそうにそれを受ける。

『狂三ちゃんだけずるいよ〜! よしのんと四糸乃も、ご主人さまの言うことを聞いて大人しく待ってたんだから〜!』

「……………」

アピールするようにぷりぷりと怒る『よしのん』と、羨ましそうに狂三を見つめる四糸乃。

「そうだな。二人もいい娘で待ってたもんな。偉いぞ」

今度は『よしのん』と四糸乃を同時に撫で、嬉しそうにしている様子を堪能した。

「はいはい。可愛い精霊ちゃんたちを愛するのは後にして、今はターゲットの監視に専念しましよ」

志保が呆れたように言いながら、琴里たちのいる方を指す。

そこには耳から何かを取り外し、それを放る土道の姿があった。

「……………何を捨てた……………?」

「たぶん、(フラクシナス)と通話するためのインカムだと思うわ。……なるほど。ここからは一対一でデートをするつもりみたいね」

志保がそう予想した矢先、十香をその場に残した士道は琴里と共に移動を開始する。

「お、場所を変えるのか。それじゃあ……」

自分たちも移動しようと考えたところで、ひとり残された十香の姿が目に入る。

恐らく士道たちを二人きりにするため、あえて別行動をとる選択をしたのだろう。

だが何か騒ぎでも起これば、間違いなく彼女は士道の元へと飛んでくるはず。

たとえ十香が全開の力を出せなくても、その妨害を掻い潜りながらでは難易度が上がってしまう。零にとっては不安要素のひとつだった。

「確かに後で乱入されるのは面倒ね。……それじゃあへオルトロスを何機か監視に回すのはどうかしら？ 足止めだけなら2〜3機で事足りると思うわよ？」

零と同じことを考えていた志保が、ぱっと思いついたように提案する。

「なるほど。戦力を分散するってことか。……他に思い付く作戦も無いし、それでいくか」

「そうと決まったら私も残ってへオルトロスたちに指示を出すわ。それで十香ちゃんが動くようなら、社長の邪魔をできないように足止め。出来るようならそのまま捕獲。これでプランは決定ね」

志保の提案に、零は「ああ……」と短く了承の返事をする。

『霊力を封印されている』という特殊な状態の今の十香は、零の力で隸属させられない可能性がある。

だからと言って放置しておいてもいいという訳にはいかない。いざれ攻略しなくてはならない以上、その詳しい性質を知っておいても損はない。

たとえ隸属できなくてもひとまず身柄だけでも確保し、調べるために側に置いておこうというのが志保の意見だった。

「よし、それじゃあ四糸乃、よしのん、狂三。あの二人を追うぞ」

「は、はいっ……!」

『いやあく!なんだかドキドキしてきたねえ! テレビで見たスパイ映画みたいだよ♪』

「はい。ご主人様のためなら何処へでも」

十香の監視を買って出た志保をその場に残し、零は二人を引き連れてこの場を後にした。

それからアミューズエリアに移動した士道と琴里を追って、3人は茂みの影からこっそりと覗き見る。

『おおく! すっごく楽しそうだねえ♪』

「うん……」

「士道さんったら、あんなにはしゃいで……」

零たちが見守る中、士道は琴里を連れて様々なアトラクションに挑んでいる。

琴里は士道の意図が理解できずに振り回されているような状態だったが、士道はそんなことはお構いなしといった感じで勢い任せにあちこち連れ回す。

士道が琴里を引つ張り回すその光景は、端から見れば仲睦まじい兄妹そのものだった。

「——けど、どう足掻いても妹止まりなんだよな……」

だが零の目には恋人同士のデートには見えていない。せいぜい仲のいい兄妹が休日遊びに来ているといった程度。

その証拠に次のアトラクションに移動している時の琴里は、どこもなく落ち込んでいるように見える。

「……そういえばさ、ご主人さまには兄弟とかいないの? ご主人さまの周りには博士と従業員のみんなしかいないみたいだけど……」

『えっ……っ?』

『よしのん』の唐突な質問に、思案に暮れていた零の意識が呼び戻され

る。

「わたくしも気になりますわ。ご主人様、ご自分のことを全然お話しになりませんか……」

「私も、聞きたいです……」

続くようにして狂三と四糸乃も期待の眼差しを送る。

すると零は物思いに耽るふけように、ぼんやりと空を見上げた。

「兄弟、か。……悪いけど、俺にもわからないんだ」

「えっ?」

「どういう、ことですか……?」

YESでもNOでもない、あまりにも予想外の答えが返ってきた。

それにどう答えていいかわからなくなった四糸乃と狂三は思考がフリーズしてしまう。

「……俺は俺を精霊にした奴の都合で、いろいろな世界を転々とさせられてる。俺にはそれ以前の、自分の名前以外の記憶がまったくないんだ」

「精霊にした奴……?」

零の言葉の中の、心当たりがあるキーワードに狂三が反応する。

「……それはもしかして、全身がノイズのようなもので見えない方はありませんの?」

「……?……何だそれ?」

狂三が発した言葉に、零は謎かけのような疑問を覚える。

恐らく自分が知る金色の『何か』とは違った経緯で霊結晶セフィラを持つ者がいるのだろうか。零はそう考え、詳しく調べるために後で聞き直すことにした。

「……いや、俺に霊結晶セフィラを寄越したのは——」

——瞬間、零の言葉を遮るように、爆発音と衝撃が零たちを襲う。

「……!?……」

「きゃっ……!」

『なんだなんだ?!』

驚きで体勢を崩しそうになった四糸乃を、それに気付いた零がさつと優しく受け止める。

「大丈夫か？」

「は、はい。……ありがとうございます……」

『おかげで助かったよー！ありがとね！ご主人さま♪』

零が確認すると、四糸乃は顔を赤くして俯き、『よしのん』は嬉しそうに手を振ってみせる。

「……ご主人様。どうやら先を越されたみたいですね」

「えっ……？」

言いながら狂三が上空を指差す。

そこには零が見たことのないCR―ユニットを装備したAST隊員、鳶一折紙の姿があった。

『紅』と『白』に迫るもの

「おいおい。なんだよあれ……?」

折紙が身に付けている装備を見て、零は思わず呆然としてしまう。魔力砲と思われる巨大な砲身が両サイドに二門、ASTが使用しているものよりも特殊な形状をしたレーザーブレイドが二本。

おまけに何らかのギミックがありそうな背部コンテナユニット。たった一人で身に付けるには、明らかに過剰な重装備である。

あんなものがASTにあったこと事態が驚きなのだが、それ以上にそんなハイレベルなものを一人で使役している折紙の力量に、思わず舌を巻いてしまう零だった。

『ねえねえ……あのお姉さんって、よしのんたちを虐める人たちの仲間だよ?』

「うう……」

ASTに狙われていた頃を思い出したのか、『よしのん』と四糸乃が零の後ろに隠れる。

「大丈夫だ。まだこつちに気付いてない」

零は怯える二人を宥め、そつと傍に抱き寄せた。

「……やはり、目的は炎の精霊さんのようですわね」

狂三が爆発のあった地点を指す。

そこはちようど士道の真隣。先ほどまで琴里が座っていたベンチがあった場所である。

士道は展開した防性随意領域により守られていたようだが、その範囲外にいた琴里には間違いなく直撃していただろう。

しかし爆発の中から、炎に守られて無傷の琴里が姿を表す。

そして琴里が霊装を展開し、精霊——ハイフリートとしての力を解放した。

その瞬間、折紙が激昂したようにミサイルの雨を降らせる。

「これまた大それたことをやらかしたな……」

聞き逃しでなければ、間違いなく空間震警報は鳴っていない。

その証拠に、周囲には未だに逃げ惑う一般人の悲鳴が飛び交っている。

る。

もしかしたら独断で来たのか。それともこの不意打ち同然の戦闘自体も作戦の内なのか。

「……どちらにしても、これはやり過ぎだろ……」

零が思案に暮れている中、戦闘はさらに激しさを増していく。

折紙は空中を飛び交うヘイフリート^{テリトリ}を随意領域に閉じ込め、その内部にミサイルを撃ち込む。

だがそれでも大したダメージを与えられないと悟ると、すぐさまレイザーブレイドの刃をロープのように展開。それでヘイフリート^{テリトリ}を拘束する。

再び随意領域^{テリトリ}に閉じ込めると、今度は両サイドに備えられた巨大な砲門を向け、高出力の魔力砲を放つ。

その余波はあまりにも凄まじく、随意領域^{テリトリ}を破壊し飛散するエネルギーが周囲のアトラクションにまで牙を剥いた。

「ぎゃ……っー！」

『わわわっ……！』

茂みに隠れていた零たちにもその影響が及び、慌てた四糸乃が足をもつれさせる。

「——っ。……大丈夫か？」

だがそれを見逃さなかった零が回り込み、四糸乃の身体を優しく受け止めた。

「は、はいっ。ありがとうございます……」

『おかげで助かったよー！ありがとうございますー！ご主人さまー♪』

四糸乃は恥ずかしそうに顔を赤くして俯き、『よしのん』^{うつむ}は感謝の気持ちを表現するようにはしゃぐ。

「まあ、ご主人様だったら、四糸乃さんばかり……」

その様子を狂三が羨ましそうに見つめる。

だがその間にも未だに折紙の攻撃の余波は治まらず、このままだともっと酷い巻き込まれ方をしてもおかしくない。

「……これは少し離れた方がいいな」

「そうですね。……それではこちらに」

狂三の誘導に従い、安全を確保するために攻撃が届かない位置にまで距離を取る。

その間に魔力砲の攻撃から生き延びた「エイフリート」が折紙の背後に回り込み、天使である戦斧でC R ユニットに斬りかかった。

「これはちよーつと面倒なことになってきたな……」

愉悦に満ちた笑みで戦斧を何度も叩きつける「エイフリート」を見て、零は零は難しそうに顔をしかめる。

あれは狂三との戦闘で見せた、破壊衝動に意識を支配されたときの「エイフリート」そのものだった。

このままだとあんな状態の「エイフリート」を相手にしなくてはならない。そう考えただけで零はゾツとせずにはいられなかった。

対する折紙は体勢を建て直そうと、防性随意領域プロテクト・テリトリーで防御。同時に「エイフリート」を振り落とそうと出鱈目でたらめに飛び回る。

だが「エイフリート」は気にする様子もなく、随意領域テリトリーで保護されたコンテナユニットを戦斧で何度も斬りつけた。

「このまま鳶一折紙がダウンしたところが狙い目かな……」

端末には他の魔力反応は感知されておらず、十香は志保と「オルトロス」が足止めする手筈になっている。

おまけに土道はインカムを持っていないため、「フラクシナス」に助けを求めることもできない。

だから余程のイレギュラーがない限りは、他の誰の邪魔も入らない絶好のタイミングが訪れることになるのだ。

そう考えている間に随意領域テリトリーは破壊され、折紙は地面に不時着する。

そして「エイフリート」は止めとばかりに戦斧を砲撃形態に変形させ、ほぼ至近距離の折紙に発射口を向けた。

「これでチェックメイトだな。それじゃあ俺もそろそろ……」

頃合いを見て立ち上がった零だったが、その動きは折紙の叫びによって止められた。

それによると5年前に折紙の両親は「エイフリート」によって殺されたのだという。

その事実を突きつけられたヘイフリートは抑えられなかったはずの破壊衝動すら忘れ、戦意を喪失してへたり込んでしまった。

「あらあら。折紙さんにそんな事情があたりでしたの……」

憎しみをぶつけんばかりに叫ぶ折紙を、狂三は意外そうに見つめる。

一時とはいえクラスメートとして顔を合わせた立場上、彼女とは全くの無関係というわけではない。

だからといって後ろめたさがあるわけではないが、大切なものを奪われ復讐に燃えるその姿に、狂三はどこか共感するものを感じていた。

『……………』

対して四糸乃と『よしのん』は、どこか申し訳なさそうに俯く。

もし自分が同じように誰かを殺していたら。そんな『もしも』のことを考えているのだろう。そう察した零が、無言で二人の頭にポン、と手を置く。

その間に再び飛び上がった折紙は紐状のレーザーブレイドと随意領域でヘイフリートを拘束。一気に止めを刺そうと魔力砲を最大出力でチャージした。

このまま戦意喪失したヘイフリートが折紙に勝つのは不可能だろう。そう読んだ零が、重い腰を上げるように立ち上がる。

「……そろそろ俺の出番みたいだな。……狂三。四糸乃を連れて博士と合流してくれ」

「えっ？それではご主人様が……」

自分もヘイフリートとの戦闘に参加するつもりでいた狂三が、心配そうに零を見る。

「俺なら大丈夫だ。ヘオルトロスもいるからな。それよりも博士の方が気になるから、そつちを手伝ってくれ」

そう自信ありげに言ってみせる零に、狂三は「むう……」と不満げな表情をする。

「本当はご主人様の勇姿を見ておきたかったです、ご主人様がそうおっしゃるのなら……」

「あ、あの……」

狂三がしぶしぶ了承すると、隣にいた四糸乃が心配そうな眼差しを零に送っていた。

「……う……どうした？」

「そ、その……頑張つて、ください……」

『よしのんも応援してるからね〜♪』

零の無事を祈った精一杯の応援。

その姿に勇気付けられたのと同時に、彼女たちも自分を支えてくれる存在なのだと実感させられた。

「……ああ。ありがとな」

零が笑顔でそう返すと、狂三の足下の影が広がり、四糸乃と共にその中へと沈んでいった。

「……へオルトロスへ全機。所定位置でターゲットを包囲」

それを見届けた零は、端末でへオルトロスへたちに指示を出す。

同時に零の全身を包むように、闇色の霧もやのようなものが出現する。

数秒後にそれが振り払われると、中からヴァンパイアを彷彿とさせる霊装を身に纏った零が姿を現した。

「——さあ、ここからは俺のターンだ」

へイフリートへに魔力砲へブラスタークへを向ける折紙の前に、義妹いもうとを守ろうと兄、土道が庇うように立ちはだかる。

「折紙！止める！止めてくれ！」

「……土道。邪魔をしないで」

「そんなわけいくか！」

土道が必死に止めようとするが、折紙の意思は揺らぐことすらなかった。

「貴方には言つたはず。私は両親の仇を討つために今まで生きてきた。へイフリートへ——五河琴里を殺すことだけが、今の私の存在理由」

そう何の迷いもなく言つてみせる折紙に、土道は彼女を止めるだけ

の言葉を見出せずにいた。

だがこのままでは大切な家族が殺されてしまう。そんな未来を阻止するため、士道は必死で呼びかける。

「……ダメだ。ダメなんだ！お前が殺しちゃ……その引き金を引いたら、きつと戻れなくなる！俺は……そんなお前を見たくない！」

「……それでも、構わない。私の手で、ヘイフリートを討てるならまったく届かない。士道の言葉があまりにも弱い。

まるで二人の間に見えない壁でもあるかのように、自分の思いを彼女に伝える事すらできなかつた。

「折紙！聞いてくれ！俺は——」

「——残念ながら、チャンスタイムはそこまでだ」

瞬間、士道の台詞を遮るように、何処からか声が聞こえてくる。

『……………!?!』

そしてパン！パン！と手拍子の音が響き、二人はそちらに視線を移す。

そこにいたのは、確認されている中で唯一の男の精霊——ヘインキュバスだった。

「なっ?!お前は……!」

「ヘインキュバス……」

予想外の乱入者に士道は驚愕し、折紙は警戒するように睨み付ける。

「ずいぶんと物騒な空気だな？もつと年頃の男女らしい会話はできないのか？」

「……何をしに来たの？今は貴方の相手をしている暇はない。もし邪魔をするなら……」

皮肉を交えて余裕ぶつた態度のヘインキュバスに、折紙はヘブラスタークンの発射口を向ける。

——瞬間、彼女が装備しているCRユニット、ヘホワイト・リコリスのコンテナユニットが大きく揺れた。

「……………!?!」

咄嗟に振り返ると、そこには猛獣の爪で切り裂かれたような傷を負ったコンテナユニットと、そこに照らされる6つの赤い光。

そしてそこからゆっくりと不可視迷彩を解除し、3機のへオルトロスが姿を現した。

しかもそのうちの1機には、他の2機にはない武装が装備されている。

左腕部のグレネード、両足のミサイルランチャー、そして内側に棒状のパーツが仕込まれた右腕部のプロテクター。

他の機体と異なる用途を与えられたその機体の視線は、まるで折紙を狩猟すべき獲物だと言っているかのようなようだった。

「折紙!」

「いつの間に……………!?!」

士道が叫ぶ中、折紙はへインキュバスへの策にはまったことを思い知らされる。

だからへインキュバスは目立つように堂々と姿を現したのだ。自分に注意を引きつけて、背後からへオルトロスが奇襲を仕掛けやすいように。

その間に武装したへオルトロスが右腕を振り上げ、プロテクター内に仕込んだものを展開する。

「警棒?……………違う。スタンロッド?」

その鉄パイプのように細長い金属のパーツは、折紙にそう印象付けさせるには十分だった。

だがそんなもので魔術師を倒せるとは思えない。

折紙は咄嗟に随意領域で防御する。

しかしへオルトロスへはそんなことお構いなしにその武装を振り上げ、随意領域で保護されたコンテナユニットに叩き付けた。

瞬間、棒状のパーツから電流が迸り、随意領域を伝って折紙にもその牙を剥いた。

「……………ツ!?ああああああああつ……………!!」

その直後、まるで高圧電流を浴びているかのような激痛が奔り、折

紙の意識を刈り取る。

コントロールを失ったへホワイト・リコリスは機能を停止し、轟音を響かせながら地面に落下した。

「折紙……!?!」

「我ながらよく出来てるな。対魔術師用対人装備は」

上々な結果を見てへインキュバスはうんうんと満足そうに頷く。

落下の衝撃で折紙は地面に投げ出され、土道が血相を変えて駆け寄った。

その間に折紙が気を失ったことで随意領域テリトリーが消失し、拘束されていたへイフリートが解放される。

だが彼女も限界が近いのか、フラフラと立ち上がるのも困難に見えた。

「……へオルトロス」

パチン!とへインキュバスが指を鳴らすと、不可視迷彩インビジブルで隠れていたへオルトロスの機が姿を現し、へイフリートの背後からゆっくりとにじり寄る。

「まだいたの?……けど、たかが機械人形で精霊をどうにかできるとでも——」

へイフリートが言いかけたところで、死角から重低音のような衝撃波が襲う。

「かはっ……!」

へイフリートの身体はまるで車にはねられたように宙を舞い、力なく地面に倒れ伏す。

「琴里……ッ!」

それに気付いた土道が駆けだし、ゆっくりと近づくへインキュバスの前に立ちはだかるように両手を広げた。

「お前の目的が何なのかは知らないけど、琴里には指一本触れさせない!それにお前が連れて行った四糸乃も返してもらおう!」

「……………」

目の前で凄んでみせる土道を、へインキュバスは冷たい目で見据える。

「……はあ」

そして呆れたようにため息を吐くと、鋭いボディブローを土道の腹に叩き込んだ。

「がはっ……！」

それに反応どころか気付くことすら出来なかった土道は気を失い、力なくその場に倒れた。

「悪いな。こっちにも事情があるんだ。……さてと」

改めて「ハイフリート」に視線を戻し、ゆっくりと側に歩み寄っていく。

「——さあ。兄離れの時がきたぜ。妹ちゃ——」

そつと手を伸ばそうとしたところで、「インキュバス」のすぐ目の前を赤く細い光が通過した。

「ん……？」

明らかに今のはレーザーによる攻撃。「インキュバス」は身を起し、それが飛んできた方を見る。

「……何だあれ？」

その視線の先にいたのは、青いカプセルを思わせる楕円状のボディに、その中央に黄色く輝くモノアイを持った機械。

空中を浮遊していると、そこから高度な技術によって造られたのはわかるが、右腕の解析用端末が魔力反応を感知していない。

つまりあれは顕現装置リアライザを用いずに、それに匹敵する技術力を以て造られたことになる。

「どこの誰の差し金かは知らないけど、俺の邪魔をするからには覚悟は出来てるんだろうな？」

不機嫌そうにポキポキと指を鳴らしながら、「インキュバス」は謎の機械に向き直る。

すると解析用端末が近くに魔力反応を感知したことを報せた。

「……う……なんだ……？」

さつとウインドウに目を向けると、離れたところからASTの一団

が接近していることを物語っていた。

「チィ……こんなときに……」

不測の事態が迫っている状況に舌打ちをしながら、ヘインキュバスは周囲を見回す。

すると目の前にいる青いカプセル型の機械と同じものが、周囲を取り囲むように10機ほど姿を現す。

「……なるほど。ASTが来る前にこいつらを何とかしないとイケないって訳か……」

ヘインキュバスへの言葉を遮るように、カプセル型の機械はモノアイからレーザーを発射した。

「——上等だよ」

瞬間、離れた位置にいたはずのヘインキュバスが、カプセル型の機械のすぐ目の前に現れる。

そして身を捻るようにして勢いをつけ、鋭い回し蹴りをど真ん中に叩き込んだ。

——バチバチ……！

スパークしながらメキメキと金属が軋むような音を立てて形を変え、中枢部分を損傷して機能を停止。スクラップと化したそれはそのまま重力に従って地面に落下した。

「……さてと、時間がないから、さっさと済ませようか」

周囲で応戦しているヘオルトロスたちを見回しながら、ヘインキュバスは余裕に満ちた笑みを浮かべた。

〈エイフリート〉

〈フラクシナス〉内、医務室。

「ん……」

ベッドで横になっていた土道が、ゆっくりと^{まひた}瞼を開ける。

「……目が覚めたようだね。シン」

「令音、さん……？」

ベッドのすぐ側にいた人物、令音を見た土道はゆっくりと身を起す。

そして周囲を見回し、そこが〈フラクシナス〉の医務室であることを理解した。

「え？……俺、どうしてこんなところに？……確か、オーシャンパークで琴里とデートをしてて——」

そこまで口にした瞬間、気を失う前までの出来事が脳内でフラッシュバックされる。

両親の仇であるエイフリートを討ちに乱入してきた折紙。

琴里が殺されそうなところで現れ、折紙を止めたヘインキュバス。

そしてそのヘインキュバスが引き連れていたロボットに琴里は気絶させられ、すぐに土道自身も気を失わされた。

「……それから気を失った君を、十香がASTに見つかるよりも前に連れ出してくれたんだ。自身も負傷しているというのに……」

「えっ？…十香……？」

令音の視線を追うように、土道は隣のベッドを見る。

そこには絆創膏や包帯で治療された十香が、寝息をたてながら安らかに眠っていた。

「君たちの危機を察知して助けに向かおうとしたところ、ヘインキュバスが引き連れていたのと同じ個体が現れ、やむを得ず交戦した。

……だが追い詰められたところで別の乱入者が現れ、乱戦になった隙を突いて抜け出したようだ。……そして鳶一折紙はその後に駆けつけたASTに連行されていた。恐らく命に別状はないだろう」

「そう、ですか……」

十香と折紙の無事。それを聞いただけでも内心でほっとする。だが一番気がかりな彼女の安否を確認できるまでは、土道に本当の安心は訪れない。

意を決するように間を置き、覚悟を決めたように話を切り出した。

「——それで令音さん。琴里はどうしたんですか？」

「……………」

土道が問いかけると、令音は悩ましげに俯く。

「……………どうしたんですか？……………まさか琴里の身に何か……………!？」

最悪の事態が頭を過ぎった土道は、身を乗り出すように令音に近づいた。

「——なに情けない声出してんのよ？土道」

『えっ……………!?!』

聞き覚えのある声に、二人は目を見開いて驚愕する。

「……………まさか私がいなくなつたとも思つたのかしら？」

「あ、あ……………」

自動ドアが開き、向こう側にいた人物が堂々とした足取りで入室する。

「その救いようがないくらい情けない顔をやめてくれる？車に轢かれ
たウシガエルみたいで気分が悪いわ」

〈ラタトスク〉の軍服を肩にかけ——

「こんなことじゃすべての精霊を救うだなんて夢のまた夢ね。もつと
厳しい訓練を用意しないといけないかしら？」

長い髪をツインテールにした——

「——というわけで、特別に私を踏ませてあげるわ。だから存分に

私を罵倒なさい♪」

……副司令の神無月だった。

しかもご丁寧に琴里が着ているものとそっくりな衣装を着て、拡声器のような機械で琴里の声までも再現していた。

『……………』

それを見た二人は硬直し、気分も急下降で落胆した。

「……私だ。医務室で副指令が乱心した。またいつもの場所に連れていってくれ」

令音が通信機で連絡を取って数秒後。医務室に数人の男が現れ、神無月を両サイドからガツシリと拘束する。

「な、何をするつもりですか!?!村雨解析官!私は土道くんを励まそうと……って、待ちなさい!何処へ連れていく気ですか!?!」

バタバタと暴れる神無月^{へんたい}を宙吊りにして、男たちはそのまま医務室を去っていく。

「……令音さん。さっきの神無月さんが言ってたことって……」

「わかった。……落ち着いて聞いてくれ。どんな結果であつても、決して取り乱さないで欲しい」

本当は目を改め、土道が落ち着いてから話そうと考えていたのだが、神無月^{へんたい}が余計なことを口走ったおかげで、今すぐに話さなければならなくなってしまった。

腹を決めた令音は一呼吸置き、いつそう真剣な表情でまっすぐ土道を見た。

「……シン。琴里は——」

——ロスト
消失してしまったよ。ヘインキュバスと共に……」

オーシャンパーク近くのふ頭。その一角にある廃倉庫。

A S Tが現場に到着している頃、十香の足止めをしていた志保たちは、集合場所であるそこに身を潜めていた。

「……………これで全機揃ったわね？」

夕陽で赤く照らされた屋内。そのドラム缶に腰掛けていた志保が、足音のする出入り口に視線を向ける。

そこには重たい扉を開け、屋内に足を踏み入れる8機のへオルトロス∟の姿があった。

しかもそのうちの何機かは、乱入してきた謎の機械兵器の残骸を抱えている。

「あら……………そちらにも来ましたの？」

柱に背を預けていた狂三が、近づいて興味深そうに眺める。

そう、零が遭遇したものと同じ機械兵器は、十香の足止めをしていたへオルトロス∟たちの前にも現れたのだ。

見たことのない乱入者に当初は困惑する志保だったが、真つ先に十香に攻撃を仕掛けたことから、標的が精霊であることをいち早く察する。

相手が何処の誰かわからない以上、それはよろしくないと志保は判断。すぐにへオルトロス∟たちに乱入した正体不明の敵から十香を守るように指示した。

なんとか十香捕縛だけは阻止したものの、プランのひとつだった十香には逃げられてしまう。

そこへ狂三と四糸乃が合流し、あちらの方はもう問題はないことを伝えられる。

それを聞いた志保はもうこの場にいる意味はないことを理解し、正体不明の敵と交戦しているへオルトロス∟たちを引き上げさせた。

「ご主人様。大丈夫かな…………？」

『心配しすぎだよ！…こういう時こそご主人さまを信じないと！』

木箱に座り、年相応の子供のように足をブラブラさせていた四糸乃が、心配そうに『よしのん』と相談する。

「けど社長が一緒じゃないって事は、ひとまず当初の目的は達成したみたいね？」

その証拠に零の端末の反応は何処にもなく、彼が消失したことを伝えていた。

しかもへオルトロスが持ち帰ってきた敵機の残骸は、破壊箇所が最小限に抑えられている。

後で解析がしやすいようにという零の配慮だろう。そう考えながら志保は解析用端末を取り出す。

それを使って残骸を調べ、再稼働の危険や発信器などがないことを確認した。

「……大丈夫みたいね。それじゃあさつきと持って帰って調べましょうか。ちようど『迎え』も来たみたいだし」

「迎え、ですか……？」

『誰も来てないよ……？』

志保の意味深な台詞に、四糸乃と『よしのん』が首を傾げながら辺りを見回す。

するとその場にいた全員を包むように、頭上から光が降り注ぐ。

「えっ……!!？」

『なにになに!!?どうなってんの!!?』

「これは……」

その後を感じたのは奇妙な浮遊感。自分の意思で空を飛ぶのとは違った感覚に、精霊たちは動揺の色を見せる。

「さあ、一足先に戻りましょうか。私たちの新しい拠点——へポセイディアへ」

志保がそう言った瞬間、まるで光に溶けて消えたかのように、その場にいた全員の姿が見えなくなった。

隣界。そこは精霊のみが踏み入ることを許された世界。

その闇の世界のような場所に、ふたつの人影があった。

「はあ、はあ……」

「……そろそろ30分か。思ってたより粘るな……」

地面に座り込んだ零が、目の前に横たわる赤い光に包まれた少女をじっと眺める。

炎のように赤い髪に、天女を思わせる和装。ヘイフリートという識別名を与えられた精霊の少女が、熱でうなされているように苦悶の表情を浮かべていた。

乱入してきた敵機をすべて撃退した零は、無事にヘイフリートをこの臨界に引き込むことに成功する。

しかしそれで終わりという訳ではない。消失から24時間以内にここで隷属の誓いをさせなければ、今までの苦労が水泡に帰してしまうのだ。

「……なあ。そろそろ楽になったらどうだ？いつまでも片意地張ってたら辛いだけだろ？」

零がその声をかけると、ヘイフリートはキツ！と敵意に満ちた視線を向ける。

「そんなわけ……いかないでしょ……はあ、はあ……なにを企んでるのか、知らないけど……私には……」

目の前の男に身も心もすべてを捧げたい。彼の望むことをしたい。そんな衝動が彼女の身体の奥から込み上げてくる。

しかし同時に、それを良しとしない相反する気持ちがある。それを拒む。その根源となっているのが、義理の兄と慕っている彼の存在。

5年以上も前から変わらぬその思いは、他の男に靡くことなどありえないと自負するほどの自信があった。

——もしかしたら気づいてるんじゃないのか？自分は異性としてあの男が好きなんじゃないやなくて、兄妹としての好意の延長線上なん

じゃないかって。

——このまま一緒にいても、あいつは君の気持ちに気付くことはない。いつまでも『妹』のまま。それでいいのか？

だがその固い意志に揺さぶりをかけるように、あの時間こえてきた『囁き』が、彼女の頭の中で何度も響く。

まるで心の奥底に眠っていた感情が吹き出すように、少女の淡い恋心に波紋を投げかける。

「そ……そんなことない！私は士道が……おにーちゃんのことか——」

——だい

「えっ……？」

突然、ヘイフリートへの決意表明にも似た告白を遮るように、何処からか声が響く。

すぐに身を起こし周囲を見回すが、ここには自分と目の前の男以外に誰もいない。

——ようだい

「……!?……誰!?何処にいるの!?!」

聞き違いではない。間違いなく自分たち以外の誰かがいる。

自分と同じようにここに連れてこられた者が、もしかしたら他にもこの場にいるのかも知れない。

うまく協力を得ることが出来れば、この世界からの脱出の可能性が見えてくる。そんな淡い希望を抱きながら動かない身体で必死に辺りを見回した。

——ちようだい

「えっ……っ？」

瞬間、〈エイフリート〉は自身の腕を掴まれたような感触がした。嫌な予感がする。決して振り返ってはいけない。彼女の直感が虫の知らせのように警告する。

だがそれよりも怖いもの見たさが勝ってしまい、〈エイフリート〉は恐る恐る振り向いた。

——ちようだい。おいしいの、もつとちようだい♪

……そこにいたのは、妖艶なまでに美しい笑みを浮かべ、真紅に染まった瞳でまっすぐこちらを見る——〈エイフリート〉自身だった。
「ひっ……っ!？」

目の前の不可解な現象に、〈エイフリート〉は咄嗟に腕を振り払う。この自分とまったく同じ姿をした存在が何者なのか。そんなことを考える余裕もないほどの恐怖が彼女を襲った。

——ねえ。あなたも欲しいんでしょ？おいしいの……

「な、何のことを言ってるのよ!?!それよりもあなたは一体……!?!」
なんとか気力を振り絞り、自分と同じ姿をした『何か』に警戒の言葉を投げかける。

だが未知の存在への恐怖で身体は思うように動かず、全身の震えが止らない。

そんな彼女を嘲笑^{あざわら}うかのように、もうひとりのヘイフリートはゆつたりとした動きでにじり寄って来る。

——ほら。ここも言ってるじゃない。『欲しい』って……

言いながらもうひとりのヘイフリートは彼女の胸元に人差し指を当てる。

だが今のヘイフリートには、それが何を意味するのか理解する余裕はない。

怖い。ここから逃げ出したい。あまりの恐怖で気丈な態度も忘れ、ただ目の前に迫るものから逃れたい。そんな気持ちで頭がいっぱいになっていた。

「い、いや……来ないでっ……!」

「……………何やってるんだ?急にひとりで……………」

その様子をすぐ側で見ていた零が、困惑しながら首を傾げる。

視線の先にいるのは、まるで幽霊でも見たかのようにあらゆる方向を見て怯えているヘイフリート。ただひとり。

少なくとも零の目には、彼女以外に誰かがいるようには見えず、それらしき気配もまったく感じられなかった。

「何を、する気なの!?……………やつ……………やめ、てえ……………」

まるで見えない『何か』に押さえつけられたかのように、ヘイフリートは仰向けに倒れる。

「いつ……………いやあつ!はいつて、くる……………わたしの、なかに……………やつ、ああ……………」

これまでにないほどの苦しみ様を見せながら、ヘイフリートは助けを求めるように空に向かってまっすぐ手を伸ばす。

「——やつ、ああ……………たす、けて……………おにー、ちゃ……………」

言いかけたところで、ヘイフリートの目から光が消え、伸ばした手もぱたりと地面に横たわった。

「……………どうなったんだ?」

その様子の一部始終を見ていた零は、立ち上がってすぐ近くまで寄

る。

とりあえず呼吸はしているので、死んでいる訳ではない。それを確認して零はほっと一息つく。

——その瞬間、ヘイフリートは目を開け、その全身から真紅の輝きが放たれる。

「うおっ……!?!」

零は咄嗟に腕で顔を隠したが、その隙を突くように正面から何かに押され、仰向けに倒れた。

「っ痛う……なんだよ一体……」

零がぶつけた後頭部を擦りながら身を起こそうとしたところで、目の前の彼女とまっすぐ目が合う。

「——ねえ。ちょうだい♪おいしいの、ちょうだい♡」

そこにはまるで甘えるような表情で、真紅に染まった瞳をしたヘイフリートが、零にまたがるように乗っていた。

「ふふ。とつても美味しそう……」

獲物を前にした捕食動物のような目で見ると、そつと零の胸元に顔を寄せる。

「……っ……なにを……っ……」

困惑している零の目の前で、ヘイフリートは零の霊装にそつと唇を付け、すう、と息を吸った。

「んう……ふふ、おいしい……」

いちど顔を離すと、ペロりと唇を舐める。

いったい何をしたのか。零はヘイフリートが何かを吸ったと思われる箇所を見て、彼女が何を求めているのかを推測する。

「もしかしたら……」

ふと、とある可能性を思い付いた零は、ヘイフリートに向かって右手をかざし、そこから精霊を隷属させるときに送り込む霊力を放出した。

「……………」

すると大好物の食べ物を前にした動物のように目の色を変え、飛び付かんばかりの勢いで掌に顔を寄せる。

そしてちろりと舌を出し、まるで主人に甘えるペットのように手の平を舐め始めた。

「ちよ……くすぐったいって……!」

我慢できないこそばゆさに零は腕を引っ込めようとしたが、それを阻止せんとハイフリートが両手で拘束するように掴んだ。

「んっ、ちゅ……ふふっ、すぐくおいしい……♡」

ぺろり、と唇を舐める小さな舌。時折見せる愛しむような微笑み。

その様子は零の視線を釘付けにするほど妖艶で、とても彼女が13歳の少女とは思えないほどの色香を漂わせていた。

自分には幼女趣味など無いと自覚していた零だったが、それを差し引いても零を意識させるだけの魅力が感じられる。

しかしくすぐったいのを我慢してまで、このまま舐めさせ続けるわけにはいかない。そのためやむを得ず霊力の放出を止める。

「あっ……」

するとハイフリートは物足りなさそうな表情を見せ、すぐに舐めるのを止めた。

「やあ……もつと欲しいのお……!」

物足りなさそうに掴んだ腕を振るいながら懇願する様を見て、これはチャンスだと零は睨んだ。

「そうか。……なら俺のものになれ。そうすれば毎日でも食わせてやるぞ?」

「毎日……?」

それはハイフリートにとってたまらなく魅力的な提案である。

この男のものになる。その言葉の意味はよくわからないが、このたまらなく美味しい霊力を毎日でも食べられるのであれば、それ以外のことを考えるだけの思考を彼女は持っていなかった。

おまけに自身の源である霊結晶も、それを望んでいるかのように強く反応している。

そのために必要なこと。それを知ったことで、彼女がとる行動はも

う決まっていた。

「……して。あなたのものに……私の、すべてをあげる！私の——
ごしゅじんさまあ……！」

隷属の承諾を受け入れた瞬間、彼女の全身を炎のような真紅のオーラが包み込む。

精霊自身と霊結晶セファイラの意思。この両方が隷属を受け入れたことで、彼女の『準備』が完了する。

それを見た零はそつと上半身を起こし、彼女の唇にそつと自身の唇を重ねた。

「んっ——」

突然のことに驚きで目を見開くヘイフリートだったが、すぐにそれを受け入れて全身の力を抜く。

すると彼女の全身を覆っていた霊力のオーラは二人の重なった唇の間に集まり、隷属の証である隷属結晶スレイイラが精製される。

零はそれを舌で自身の喉に誘導し、そのままこくん、と呑み込む。するとヘイフリートの首元に隷属の証である紋様が刻まれ、彼女のすべては零のものになった。

——瞬間、頭に何かの流れ込んでくるような感覚がする。

『……………!?!』

二人は同時に目を見開き、すぐに唇を離す。

その直後、忘れていたものを思い出すかのように、頭の中にぼんやりとしたイメージのようなものが浮かび上がってきた。

——5年前、どうして琴里は精霊になったのか。

そしてその力をいつ土道が封印し、なぜその事実を二人が忘れていたのか。

閉ざされていた過去の封印を曝け出すように、零とヘイフリート——

——琴里は真実を垣間見た。

「今のは……」

「思い出した……」

純白の世界から少女の声が、まるでそよ風のように優しく青年の元に伝わる。

『!!』

青年は白に染まった世界に手を伸ばしながら、少女の名を力の限りに叫んだ。

「あ、あ……」

「……………」

目を見開きながら呆然とする琴里と、後ろめたそうに俯く零。あまりにもリアルな光景に、まるで青年の気持ちと同調したかのようになんて伝わってきた。

「……………あ、ああああああああ……っ！」

頭を抱え、琴里は発狂したように悲鳴を上げる。

「お……おいっ！っっかりしろ！」

すぐに我に返った零が、琴里の肩を掴んで呼びかける。

すると琴里は糸が切れた人形のように気を失い、零に寄りかかるように倒れた。

「……………」

零はやるせない表情をしながら、琴里を優しく抱き寄せる。

間違いなく彼女も今の光景を見たのだろう。青年——零にとって最も幸せであり、最も辛い記憶を。

まさか琴里の封印されていた記憶が甦ったのに反応したのか。どれだけ考えても推測の域を出ない。

また新たに増えた謎に頭を悩ませながら、零は胸の中で涙を流し続

ける琴里を優しく抱き締め続けた。

運命の行方

——オーシャンパーク。アミューズメントエリア。

天宮市でも有名な遊園地であるそこは、普段なら客で賑わっているはずの時間であるはずなのに、まるでゴーストタウンのような静けさが漂っていた。

そこは折紙と精霊が交戦してから活動しておらず、現在はASTの団体が事後処理のために活動している真っ最中だった。

「……そうね。それはあつちの車両に運んでおいて。……そこっ！駄弁だべつてないで手を動かす！」

ASTの隊長である日下部燎子くさかべりょうこが現場指揮を執り、隊員たちにてきぱきと指示を出す。

「……にしても、どこのどいつなの？こんなもの作ったのは……？」
燎子はあちこちに転がっている機械の残骸に視線を流しながら、茹うだるようなため息を吐き出す。

報告によると、これらの個体はASTが到着するまでの間、精霊と交戦していた痕跡があった。

もしかしたらDEMが開発した最新兵器ではないかと一時は考えたが、彼らが公開しない限りはその答えを知る術はない。

なのでひとまず残骸だけでも駐屯地に持ち帰り、そこで詳しく調べることになった。

どちらにしろこの件に関して書かなければならない報告書のことを考え、燎子はげんなりせずにはいられなかった。

——ピピピッ！

ふと何の前触れもなく、持っていた通信機がアラームを鳴らす。

「通信？……何なのよ？この忙しい時に……」

どうせ上層部からまた面倒な要求があったのだろう。そんな苛立ちを募らせながら、燎子は通信機を手に取った。

「……どうしたの？また上の連中が何か言って——」

『——日下部一尉！その近辺に霊力波を感知しました！』

「……!?……なんですって!？」

通信機からの報告に燎子が驚愕の声を洩らした直後、辺りに空間震警報が鳴り響く。

「総員退避！死にたくなかったら早くしなさい！」
燎子が怒号を飛ばし、作業中だった隊員たちを避難させようとする。

……だが避難が完了するよりも先に、漆黒の闇のような球体が出現し、広範囲に膨れ上がった。

「……!?……いつもより早い……!」

その予想外の事態に、燎子は焦りを覚える。

これまでに見てきた空間震とは、明らかに発生のスピードが違う。そのせいか一番近い位置にいた隊員が逃げ遅れ、このままでは巻き込まれることは容易に想像できた。

「くっ……!」

隊長としての使命感からか、燎子は隊員の前に飛び込む。

「た、隊長……!」

「死にたくなかったらそこで大人しくしてなさい!」

カタカタと震える隊員を後ろに、燎子は渾身の力を込め随意領域^{テリトリ}を展開する。

その間に空間震は一気に広がり、燎子たちを一瞬で呑み込んだ。

「——えっ?」

……数秒後、燎子たちは何事もなかったかのようにその場所に立っていた。
随意領域^{テリトリ}には衝撃などのダメージを受けた形跡はなく、周囲のアトラクションや地面も空間震が発生する前と何も変わらない状態で残っている。

ただ違うのは空間震が発生した中心に、二人の人影が見えたことだけだった。

「綺麗……」

燎子の後ろにいた隊員が、ぽつりと見惚れたように言葉を漏らす。そこにいたのは、ヴァンパイアを思わせる貴族風のスーツを着こなした銀髪の青年と、和装のような衣装を身に纏った赤い髪の少女。二人は互いに抱き合いながら、誓いの口付けのように唇を重ねている。

そして辺り一面に舞い散る粒子が、その中心にいた二人を祝福しているかのように見えた。

——〈フラクシナス〉内、ブリッジ。

「……やはりこうなったか……」

「ああ……司令……」

モニター上で〈インキュバス〉と共に現界した琴里の姿を見て、令音と神無月を含めたクルーたちは動揺の色を見せる。

その光景は婚姻の契りを交わしているかのような、他人が踏み込みがたい神聖さを感じられた。

「こ、琴里……」

いつでも現地に向かえるように待機していた土道も、その光景に出鼻を挫かれてしまう。

まるで長年一緒に暮らしてきた妹が、どこか自分の手の届かない所に行ってしまったような錯覚を覚えた。

などとそれぞれの反応を示している間に、モニター上の二人は唇を離し、ASTが迫りくる上空を見る。

そして攻撃が開始される前に、その場を離れようと動き出した。

「……神無月副司令。二人がASTを撒いたところで……」

「任せてください。転送装置の準備はいつでも出来ています」

令音と目配せをし、神無月はコンピュータを操作する。

いま琴里がどういう状態なのかはわからない。だがせめて二人の身柄を確保することができれば、話を聞くくらいのは出来るかもしれない。

そんな淡い希望を抱き、クルーたちはそのタイミングを計る。

その間に二人はオーシャンパークを飛び出し、建物の影に身を潜めた。

「——今ですっ！」

A S Tの視界から離れた瞬間を見計らい、神無月は端末に触れる。するとモニター上にいた二人は光に包まれ、消えるようにしてそのままいなくなった。

「……、琴里……！」

それをずっと見ていた土道は、急いでブリッジを飛び出す。

それに続くようにして令音や神無月たちクルーも駆け出し、転送装置のある部屋へと向かった。

——だがそこには二人の姿はなく、無の静寂のような静けさだけが土道たちの出迎えを受けたのだった。

——一方、格納庫を思わせる機械的で広大な空間。

そこに転送装置の光に導かれるように、零と琴里がそつと降り立った。

「……う……どこなのここは？へフラクシナスじゃない……？」

転送装置を使用したことから、琴里はてっきりへフラクシナスが回収したのかと思っていた。

だが周囲の壁や隅に置かれた機材などから、自分の知る場所ではないことを悟る。

「……そういえば昨日のうちに引き取るって話だったっけな。我ながらいい出来だ……」

周囲を軽く見渡した零は、うんうんと頷きながら満足げな表情をする。

「——二人で仲良く一緒にいたってことは、成功したってことでいいのよね？」

そこへ聞き覚えのある声と共に、開かれた自動ドアから志保が嬉しそうに入ってきた。

「おお、博士。ようやく完成したみたいだな？」

「ええ。私たちの新しい拠点、異次元潜航艦——『ポセイディア』よ。志保が両手を広げながら言うのと、零は歓喜のあまり握った拳を小さく震わせる。

「そうか。……これでようやく一歩前進だな。あとは『アレ』が完成すれば本格的に表立って動けるのか……」

待ちわびたように身震いをしながら、零は広大な部屋一面を見渡す。

「それじゃあ立ち話も難だし、医務室で簡単に検査しながら話しましょうか」

言って志保は琴里の前に歩み寄り、握手を求めるように右手を差し出す。

「初めまして。……じゃなかったわね？先週ぶりかしら……？」

「……そうね。あの時は悪かったわ。強引に拉致するような真似をして……」

対する琴里はその手を取ることなく、暗い表情を浮かべたまま小さく俯く。

「ずいぶんと大人しいわね？……何かあったの？」

何があったのか知らない志保は、零に顔を寄せて小声で耳打ちする。

「ああ。ちよっと事情ありきだな。詳しいことは後で話す」

「……………そう……」

歯切れの悪い物言いに首を傾げながら、志保は二人を医務室へと導いた。

それから十数分後、医務室で琴里の検査をしている傍らで、零は隣界での出来事を自身の知る限り説明した。

「……………なるほど。そんなことが……」

「博士はどう見る？俺一人の見解じゃ判断しずらくてな……」

志保は考え込むように唸り、零はそれを難しそうな表情で見守る。

一応【盗視】で琴里の思考は見ていたのだが、どうやら琴里自身にも何があったのかは把握できていないようだった。

「……………まず、急に琴里ちゃんの態度が変わったことだけど、私の仮説だとそれは霊結晶の意思じゃないかと思うの」

「霊結晶の意思？……………それってつまり、先に堕ちてた霊結晶が隷属を急かすために琴里の意識を乗っ取ったって事か？」

零の見解による解説に志保は「ええ……」と返し、そのまま仮説を続けた。

「それでそのまま隷属には成功したけど、過去に琴里ちゃんを精霊にしたモザイクさん？……………に封印されてた記憶が蘇って、それをきっかけに本来の琴里ちゃんの自我が復活した。……………ってところじゃないかしら？」

「モザイクさんって……………まあ、確かにそう考えれば納得できるな……」

多少の差違はあったが、零もほぼ同様の見方をしていた。

霊結晶の意思。そう考えれば彼女の破壊衝動も、隣界で急に人格が変わったのも説明がつく。

そして隷属の際に霊力が大きく循環したことで、彼女の記憶を縛っていたものが外れた。そう考えれば記憶の操作も霊力によるものか、霊力に強く影響を受けるものだと推測できる。

となると狂三から本格的に話を聞いておかなければならない。そう考えた零はこの謎の存在について調べる必要があると睨んだ。

「……なるほど。私の身に何が起こったのかはわかったわ。……今度は貴方たちのことを教えてくれると嬉しいんだけど？」

その二人の会話を黙って聞いていた琴里が、指摘するように口を挟む。

「それもそうだな。……それじゃあ順を追って話そうか」

それから要点を絞る形で、零は自分のことを話した。

金色の『何か』によって、様々な世界に送られ、謎かけのような『役目』を押し付けられてきたこと。

20番目に送り込まれたこの世界で、セフィラ霊結晶を与えられて精霊になったこと。

そしてそのセフィラ霊結晶の意思である精霊の隷属。そのために零たちは動いていたことを告げた。

「精霊を隷属!? そんなことが……」

「出来るわよ。その証拠にあなたはこうして社長と一緒に付いてきたじゃない」

信じられないと言いたげに声を荒げる琴里に、志保が指摘するように言ってみせる。

本当はそんなことはない。と言いたいところなのだが、残念ながら思い当たる節がありすぎて否定することができない。

その証拠に現界してからずっと、無意識のうちに彼の言うことに大人しく従ってしまっている。

特におかしいのは、その流れに逆らおうという気が起きないこと。そしてそれをおかしいと認識できないことだった。

もしこれが彼らの言う隷属というものなら、自分の生殺与奪権は彼の手の中にある。そう考えただけで琴里は心臓を鷲掴みにされたような気分になってしまう。

「……わかったわ。百歩譲って貴方にそういう能力があることは認める。……けど、そうまでして精霊を手中に収める理由は何なの？」

琴里は零の真意を問いただそうと強気に出る。

それが一番の疑問だった。他の精霊を支配下に置き、その果てに何を
するつもりなのか。

彼が言う金色の『何か』から与えられた『役目』。それが果たせない
とどうなるのか。へフラクシナスの司令としての義務でその疑問を
言葉にした。

「——その答えは自分がいちばん解ってるんじゃないのか？見たん
だろ？俺の『記憶』を……？」

「……ッ!？」

零のその一言を聞いた瞬間、琴里は目を見開いて硬直する。

同時に思い出す。隣界で見たあの光景を——。

そして零が【ストーリーキング黙秘強使】で送り込んだメッセージ。その最後のひと
つが、より鮮明になって琴里の頭に響いた。

——もしそのせいで——

——この世界が消えるとしても、君はあいつを愛せるのか？

苦悩と出逢いの運命

——あれは零が3番目の世界での旅を終え、金色の『何か』がいる白い空間に戻ってきた時のこと……。

「……なあ。俺って——何者なんだ？」

ずっと胸の内に抱えていた疑問。それは——自分の名前以外の記憶。

サバイバル知識はある。機械を修理したり、一から造ったりする技術力も持っている。

おまけに聞いたことのない言語でも、まるで母国語のようにペラペラと話せてしまう。

なのに自分が何者で、この旅を始める前のことはまったく記憶がない。

もしかしたら金色の『何か』なら知ってるんじゃないか。そう考えた零は思い切って疑問をぶつけてみた。

——旅を続け、『役目』を果たせ。その果てに答えはある。

「……う……なんだよそれ？知ってるのか知らないのかぐらい……」

曖昧な答えに苛立ちを覚える零が、金色の『何か』に詰め寄ろうと足を踏み出す。

「……ッ!？」

だが目の前でより強い光を放ち、零は反射的に腕で顔を庇う。

——それは今すぐ知るべきことではない。『役目』を果たす。それだけを考える。

それだけ言い残し、金色の『何か』の姿がゆっくりと薄れていく。

「……!?!……おいつー！待てよー！ちゃんと答えを——」

零が反射的に手を伸ばすが、その手が届く前に零の視界は光に染まった。

——『神の剣』を破壊しろ。それだけを考えてえいばいい——

——光が晴れ、零が最初に目にしたのは、中世を思わせる古い町並み。

その中心にそびえ立つ剣のような形をした巨大な岩だった。

その目の前に落下した零は、すぐに町民の注目を浴びてしまう。

そして騒ぎを聞き付けた番兵にいち早く拘束され、零はこの町の最高権力者である大神官の元へと連行された。

すぐに執り行われた尋問で、零はあの岩を破壊しに来たと正直に説明する。

すると大神官は、あの巨大な岩は神が地上を護るために与えた加護であり、町民からは御神体として崇められていると言って激怒する。

そしてこの町を破滅させるために来た神の敵だと断定した大神官は明日、零を処刑すると宣言。兵に牢へ投獄するように命じた。

このままではまずいと予感した零は脱出を試みて、その場から脱兎の如く逃走した。

「……はあ。どうしたもんかな……？」

何とか追っ手を撒いた零は、町から離れたところにある森の中に身を潜めていた。

だがあれだけの騒ぎを起こせば、もう零のことは町中に知れ渡っているだろう。

そうなるともう一度あそこに戻り、『神の剣』を破壊するのはほぼ不

可能に近い。

おまけに今の自分は天涯孤独も同然で、まともな武器どころか誰の助けも得られない。完全に詰んだと言っているいい状況だった。

「……そういえば、何でこんなことやってるんだろうな？」

背後の木に背中を預け、自問しながらそのまま座り込む。

自分にあれこれと要求し、いくつもの世界を転々とさせる金色の『何か』。

まるでジャングルのような密林。何百年も戦争を続けている二分された銀河系。

前回はエジプトのような町並みが広がる大国を経て、この世界に送られてきた。

おまけに見知らぬ世界に放り込まれる前には、金色の『何か』は決まって意味のわからない『役目』を言いつける。

最初はただ『一年間生き延びろ』——それだけなら簡単だった。だが二番目からは『ワイズマンに会え』。その次の世界で『冥府の門を閉じろ』だの、訳のわからない言い回しをするようになり、零は何度も頭を悩ませることになる。

それでも今までは必死に生き延びようと足掻き、その過程で成り行きのような形で果たされてきた。

しかし今回はそういう訳にいかない。町そのものから目の敵にされてしまい、もはや近づくことすら出来ないのだから……。

「……こんなのどうしろってんだよ？ まったく……」

自分は何のためにこんなことをさせるのか。本当にこんなことを続けて意味があるのか。

たとえ自分の正体を知ることができても、それで何が変わるというのだろうか。

自問をする度に今まで零の精神を支えていた気力が抜けていき、もう何かをしようという気が起きない。

「……もう、どうでもいいや……」

ぐったりと全身の力を抜きながら、重たいため息をひとつ吐く。考えれば考えるほどどうでもよくなり、すべてを投げ出してしま

たい。そう思いたくなるほど途方にくれる零だった。

「——こんなところだなにしてるの？」

「えっ……？」

背後から聞こえた声に、零は反射的に振り返る。

そこにいたのはウェーブの入った青く長い髪を風になびかせ、民族衣装のような服を着た少女。

手にはバスケットを抱え、木の影から覗き込のように零を見ていた。

それから零は少女に連れられて、森の奥にある小屋へと招かれる。訳もわからずに混乱している零をテーブルのそばの椅子に座らせられると、少女は目にも止まらぬスピードで料理を並べた。

「ほら、お腹空いてるでしょ？遠慮せずに食べて」

「あ、ああ。ありがと……」

零の目の前に並べられたのはパンにスープ。野菜のサラダに豚と思われる分厚い肉。疲労と空腹で弱っていた零にとっては大変ありがたい話だった。

しかしなぜ見ず知らずの自分にここまでするのか。そんな疑問を抱えながら両手を合わせる。

そしてスプーンを手に取り、スープを掬って恐る恐る口に運んだ。

「……どう、かな？」

彼女のサファイアのように青い瞳が、期待に満ちた視線で零を見つめる。

どうやら毒などの異物はないようで、味の方も特に異常はなく、ごく普通のスープのようだった。

「……ああ。うまい」

「ほんと!? やった〜♪」

少女はキヤーキヤーと歓喜の叫びを上げながら、嬉しさのあまり

びよんぴよんと跳び跳ねる。

そんな嬉しそうにはしゃぐ少女を横目に、零は腹を満たすべく黙々と食事を続けた。

「…………ちそうさま」

「はいっ！お粗末さまでした〜♪」

料理を完食し、一息つきながら両手を合わせる零を、少女は嬉しそうに眺める。

「…………ところで、どうして一人であんなところにいたの？もうそろそろ暗くなる頃なのに」

「えっ？あ、ああ…………」

少女の口から飛び出した質問に、零は言葉を詰まらせる。

もしここであの岩を破壊しに来たと言えば、また追われる身に逆戻りするかもしれない。

そう考えた零は、嘘ではないが真実を濁す形で話すことにした。

「…………ちよつと旅の途中で道に迷ってさ。それで疲れて休んでただ」

「そっか。…………ってことはあなた、異国の人？」

「まあ…………そうなるな…………」

などと視線をそらしながら、零は小屋の中を見回す。

ベッドやテーブル、イスなどの必要最低限の家具。

そして部屋の一角にある調理場と、その近くの火のついた釜戸。

てつきり遭難者が避難するための山小屋かと思っていたが、あまりにも目立つ生活感がその可能性を否定させた。

「…………もしかして、ここに住んでるのか？」

「え？…………うん。もうかれこれ3年くらいかな？」

「3年？まさか一人で暮らしてたりは…………」

零が疑問を投げかけると、少女は寂しげに俯く。

「…………うん。母さんはわたしが小さい頃に病気で死んじゃって、父さんも数年前に同じ病気で…………それからはわたしが父さんの後を継い

で、森番としてここに暮らしてるの」

「そうか……」

思っていた以上に重たい事情が飛び出し、零は言葉を詰まらせる。こんな森の奥の小さな山小屋で、誰の助けも借りることなく独りで生きていくのは並大抵の苦労ではない。

現在進行形で天涯孤独の身である零には、その大変さが痛いほど理解できた。

「……そうだ！しばらくここに泊まっていつてよ！ほら、外はもう暗いから怖い猛獣が出そうだし、天気が悪いからもうすぐ嵐が来るかもしれないよ」

「えっ……？」

予想外の提案に、零は頭を悩ませる。

もしかしたら彼女は町で何があったのか知らないのではないか。

少なくともさつき彼女が言ったことは嘘ではないように感じたが、何か別の意図がある。そんな気がしてならなかった。

「俺としてはありがたいけど……いいのか？どこの誰とも知れないような男を……」

「大丈夫。ここには盗まれて困るような物は無いから。……それにあなた、悪い人には見えないし」

「見えないって、それでいいのか……？」

どこか抜けたような物言いに、零はがくつと項垂れる。

しかしここを出ても行く宛がない以上、これが零にとってこの上なくありがたい話であることには変わりなかった。

「……まあ、君が良いなら、お言葉に甘えさせて貰うよ」

「うんっ！ゆっくりしていつてね！」

少女は嬉しそうに零の手を掴むと、強引にブンブンと荒い握手をする。

先程の食事に毒などの罠がないことから、少なくとも今すぐ命を狙うような様子は見受けられない。

本当にただの善意でここまでしてくれたのか。そんな疑問が零の頭の中で渦巻き続けた。

「そういえばまだ名前を知らなかったね。私はサファイラ。あなたは？」

「……俺は零。世創零だ。……まあ、その……よろしく」

零は差し出された手を恐る恐る取り、軽く握手をする。

もしこの無垢な笑顔が芝居だとしたら、かなりの手練れかもしれない。

そう思わせるほど優しい彼女を見ながら、ひとまず野宿せずに済んだ現状に、内心で安堵する零だった。

零がサファイラの家泊まった次の日、彼女が言った通りに嵐が到来した。

「ん……」

扉がガタガタと揺れる音で目を覚ました零は、毛布を畳みながらゆっくりと立ち上がる。

昨日は自分の身に何かあればすぐに眼が覚めるよう、壁に背を預け、毛布にくるまって眠りについた。

だが拘束などの危害が加えられた様子がないことから、少なくとも寝ている間に何かをされていないことはわかった。

「……そういえばあの娘はどこ行ったんだ？」

軽く周囲を見回したが、ベッドどころか屋内の何処にもサファイラの姿はない。

まさかこんな荒れた天気の日の外に出ているのか。気になった零は、強風で押さええられた扉を押し開けた。

「うおっ……!?!」

同時に強風が吹き込み、零の長い銀色の髪を掻き乱すようになびかせる。

咄嗟に腕で顔を庇うようにしながら、零は小屋の近くの木々を見回した。

「——あ、おはよう。もう起きたんだ？」

「えっ……!?!」

突如として聞こえてきた彼女の声に、零は驚きながら振り返る。

声が出た屋根の上を見上げると、そこには数枚の木板を抱えたサファイラの姿があった。

「……家の補強か？」

「うん。今日は5年ぶりに凄い嵐が来そうだからね。だから今のうちにと思って……」

「5年ぶり……?」

サファイラの言葉に違和感を覚えた零は、小さく首を傾げる。

彼女の両親が亡くなり、独りで暮らすようになったのは3年前。

それから現在までの間に、この小屋の修理は誰がやっていたのか。所々に木板を取り付けただけの歪いびつな補修の跡を眺めながら口を開く。

「……つかぬことを訊くけど、この小屋の修理とかをやっているのは……?」

「わたしだよ。父さんみたいに器用じゃないから上手くできないけどね。……本当は嵐が来る前にやっちゃいたかったんだけど、色々準備で手間取っちゃって——」

——瞬間、特に強い風が吹き、サファイラの身体を強く揺さぶる。

「きゃっ……!?!」

それにおおられたサファイラは体勢を崩し、屋根の上で横たわる。

そのせいで抱えていた木板を離してしまい、それらは屋根を滑るようになして落下した。

「マジかよ……ッ!?!」

このままでは自分の元に落ちてくると予感した零は、すぐにその場から飛び退く。

そのすぐ後に木板は零がいた場所に落下し、まるで墓標のように地面に突き刺さった。

「ぐ、ごめん！大丈夫だった!?!」

「何やってんだ！危ないだろ!」

両手を合わせて謝罪するサファイラに、零は怒鳴りながら木板を一枚

ずつ引き抜く。

そして木板を左腕の脇で抱え、彼女が屋根に上がるのに使ったであろう梯子に足をかけた。

「俺がやる。このままじゃ嵐が来る前に倒壊しかねないからな」

「ええっ!?で、でも零はお客様だし……」

慌てるサフィラを他所に、零は梯子を上がって屋根によじ登る。

そして彼女が持っていた金槌をひったくり、無言で作業に取り掛かった。

「おお……」

それから小一時間後、綺麗に補強が成された小屋を見上げて、サフィラは感心の声を漏らす。

「とりあえずやれることはやった。よほどの事がなければ大丈夫だろう」

ふう、と零は一息つきながら金槌を持ち替え、そつとサフィラに差し出す。

「あ、ありがとう。せつかくのお客様なのに……」

金槌を受け取りながら、サフィラは申し訳なさそうに俯く。

「大したことじゃない。一宿一飯の恩を返したただけだ。それに嵐で小屋がお釈迦しゃかになったら俺も困る。」

……そろそろ本格的に来そうだな。ほら、飛ばされる前に」

「う、うん。ありがとう……」

零に促され、サフィラは小屋の中へと避難する。

それから数時間が経過した頃には、森の木々が吹き飛ばされかねないほどの暴風雨が到来した。

それから数日後、嵐は特に大きな被害をもたらすことなく過ぎ去って行き、森には再び平穏な時が戻ってきた。

これを機にこの家を出ようと考えていた零だったが、どうにもそのタイミングを見出だせずにいた。

機を見て話を切り出そうとするたびに、彼女はあれやこれやと話題を逸らしたり、用事を言いつけたりしてはぐらかされる日々が続く。自分をここに置くことに何の意味があるのか。日頃の彼女の行動を観察しても、一向にその答えが出ない。

いったい自分をどうしたいのか。何をさせたいのか。零は疑問を抱えたまま、た巡り続ける日々を過ごした。

「……よし。とりあえずこれだけあれば十分だな」

ここは小屋からさらに深い場所に進んだ森の奥。そこでサフィラに薪集めを頼まれた零は、薪として使う木の枝を集めていた。

当人のサフィラから森の見回りに出るからと頼まれ、特に断る理由がなかったため引き受けたのだった。

「……にしても、どういう仕組みになってるんだ？こいつ……」

零は獣道のような通りのすみに目を向け、不思議そうに小首を傾げる。

そこにはサッカーボール大の大きな石が、まるで地蔵のようにぽつんと置かれていた。

そこで嵐が来ている間にサフィラから聞かされた話を思い出す。

この森には昔から獰猛な猛獣の目撃数が後を絶たず、いつか町にもその被害が出るのではないかと恐れられていた。

そこで町の長である大神官は呪術師に依頼し、獣避けのまじないを作らせたのだという。

それ以来、猛獣による被害の報告はなくなったが、猛獣を恐れる町の住民は恐がって森に近づこうとしなくなったため、その効果を実感する者はほとんどいなくなったそう。

「……ま、その方が俺はありがたいけどな。……そういえば近くに川があつたっけか」

耳をすませば、そんなに遠くない距離から水が流れる音が聞こえて

くる。

前日に飲み水についてサフィラに聞いたら、この近くを流れている山からの湧き水を汲んでできていると言っていた。

「……せっかくだから、ちよつと休んでから戻るか」

そう考え零は少しだけ休養を取るべく、音のする方へと足を進めた。

「おお……これまた自然豊かな……」

木々や茂みを越えること数分後。その先にあつた光景を見て、零は思わず見とれてしまう。

零の身長ほどある滝から爽やかな水音を立てて、澄みきつた水が流れ落ちてくる。

さらにその様子をより神々しく演出するように、程好い木漏れ日が眩しいくらいに流れる水を照らしていた。

さらにその先の下流には25Mプール程の規模がある湖が広がっており、より零の感心を惹き付けた。

「ん……う？」

ふと湖を見ると、やけに大きな波紋が広がっているのが見える。

「なんだ？でかい主でもいるのか？」

そう不思議そうに首を傾げ、零は少しずつ湖に近づいていく。

——瞬間、水中から浮上するように、何かが盛大な水音を立てて飛び出した。

「なっ……!!？」

それを見た瞬間、零は思わず息を呑んだ。

飛び出した拍子に波のようになびく蒼い髪。人とは思えないほど白く美しい肌。

そして見覚えのある明るく柔らかな笑顔。……そう、零が居候する家の主、サフィラだった。

しかも衣類どころか布地も身に付けておらず、零はその裸体を完全に直視してしまった。

「……！」

なんとか自力で正常な判断力を取り戻した零は、サファイラに気づかれないよう素早く木の影に身を隠す。

そして大きく深呼吸をして、逸る動悸を何とか落ち着かせた。

「はあ。……何やってんだよ？こんなところで……」

零は隠れた木に背中を預け、気が抜けたように座り込む。

見回りを済ませ、一息ついでの水浴び。そう考えれば判らなくもない。

確かにこの森は人が足を踏み入れることがほとんどないし、この近辺は猛獣避けで守られている比較的安全な場所。だから安心できる気持ちもわかる。

しかしだからと言って、これは無防備過ぎるのではないか。この森に誰もいないならともかく、今は零がこうして近くまで来ているのだから。

「……って、そんなこと考えてる場合じゃないだろ」

このまま見つかるのはまずい。覗き魔なんて不名誉なレッテルを貼られるのはもちろん、気まずくてこれ以上の居候を続けることができなくなる。

零は軽く頭を振るい、気付かれないようゆっくりとその場を離れようとした。

——ガシャンッ！

「いつつ……！」

瞬間、金属音と共に、零の足を鈍い痛みが走る。

「な、なんだ……!?!」

視線を足元に落とすと、古典的な罫であるトラバサミが零の左足に噛みついていていた。

幸いなことに拘束部分にはトゲなど鋭利な箇所はなく、ただ挟んで

一時的に動きを止める機能しかないのが幸이었다。

「マジかよ……」

まさかこれがあちこちに仕掛けてあるから、安心して無防備な姿を晒せるのか。

今まで見たことのない森番としての彼女の姿。それをほんの少しだけ垣間見たような気がした。

「……って、んなことしてる場合じゃないか……!」

かなりの音だったから、もしかしたらサファイラの耳にも届いているかもしれない。焦る気持ちを抑え、トラバサミを外そうとしゃがみこんだ。

——ダアンツ!

「いっ……!?!」

トラバサミに触れる直前、発砲音と共に零の頭上を何かが通過する。

その音が銃声だと認識したとき、あとほんの少し——1、2秒屈むのが遅れていたら。そう考え零は死の恐怖を覚えた。

「——えっ!?!れ、零……!?!」

「………!?!」

すると零の背後からガサガサと草木を掻き分ける音と共に、サファイラの声が聞こえてくる。

「もしかして罠にかかっちゃったの!?! てつきり猛獣が入ってきたのかと……」

「あ、ああ。……けどこれくらい大したことじゃ——」

大事なことを伝えようと振り返った瞬間、零は目を丸くしながら硬直した。

そこには水浴びをしていたときと同じ糸纏わぬ姿で、先ほど撃つたであろう猟銃を抱えたサファイラの姿があった。

しかもその裸体を隠すどころか恥じらう素振りも見せず、慌てた様子で猟銃を放った。

「大丈夫!?貸して!わたしがやるから!」

「いやいや!こっちの心配は要らないから!それよりもサフィラの方が……!」

サフィラが正面に回り込むと、零は咄嗟に顔を背ける。

無理もない。このまま前を向いていたら、至近距離で彼女の裸体を直視することになっていた。

女性に面識がほとんどない零にとっては、あまりにも刺激が強すぎるのだ。

「……?……顔がどうかしたの?……まさかさつき撃つたのが当たったんじゃない!?」

慌てて零の頭を掴み、強引に見えない部分を見ようとするサフィラ。

だからと言って『サフィラの裸を見ないようにしている』などと動揺しまくっている零に言えるはずがなく、ただ必死に彼女の方を見まといと顔を背けることしかできなかった。

「い、いや……だからそうじゃないんだって……!」

「ほら!ちよつと見せて!……顔に傷は無いみたいだけど、もしかして頭とかに……」

などと珍妙なやりとりが続き、自身が無事であることを伝えてサフィラに服を着させるのに、およそ10分近くの時間を要したのだ。

た。——この日、零は彼女が超がつくほどの天然であることを理解した。